生きるに値するいのち

―放送《心の花束》第一集―

小林有方著

―23―

ユニヴァーサル文庫

序

マテオ聖福音書の五章、六章、七章、「幸いなるかな貧しき人……」から始まる、いわゆる「キリストの山上の垂訓」を読んだ人々は、そのきびしいまでに崇高な道義の宣言に、何か強く心引かれるものを感じながらも、しかし、恐らく大部分の人々が、それを、「所詮は実行もかなわぬロマンチックな一場の夢」と見て過ごされたのではないかと、私は思います。私もそこに盛られたロマンチシズムを否定しませんし、また——もしも、キリスト自身が、己が説いたところを、身をもって実行しなかったとするなら——それを「一場の夢」と見たかも知れません。けれども、少くともひとりの実在の人間が、現実の行ないをもって、それを実行したとき、それはも早、「夢」ではなくなったのです。

「汝らの敵を愛し、汝らを憎む人を恵み、汝らを迫害し、かつざん謗する人のために祈れ！（マテオ五章四十四節）」

これは美しいポエジーでしょうか？　けれども、キリストは、ゲッセマニの園で裏切り者ユダスの来るのを待って、彼に「友よ！」と呼びかけ、神経をズタズタに引き裂くような残虐な処刑の苦痛に耐えて十字架の上から「父よ、彼らは、その為すところを知らざるにより、彼らの罪を赦したまえ」と祈りました。

「汝の右の目、もし汝をつまずかさば、これを抉りて捨てよ。……もし汝の右の手、汝をつまずかさば、

これを切りて捨てよ。そは、汝にとりて五体の一つの亡ぶるは、全身の地獄に行くにまされればなり（マテオ五章二十九節三十節）」

美しいけれど、だれも実行できぬ「たわごと」とお考えでしょうか。けれども、二千年以来現代に至るまで、ただ一言「神を捨てる」と言う言葉を拒んで、目だけではなく、手だけではなく、己が命を投げうって行った数知れぬ殉教者たちが実在するのです。

「汝もし完全ならんと欲せば、行きて有てるものを売り、これを貧者に施せ。しかして来たりて我に従え（マテオ十九章二十一節）」

これは無意味な世迷言でしょうか？　だが中世以来、幾多の聖フランシスコたちや聖ヴァンサンたちが、また大ぜいの名もなき北原怜子たちが、己が家庭の安逸と欲望とを投げ捨てて、バタ屋部落に生涯を捧げたことでした。

「汝らのうち、その持てるものを、ことごとく見限らざるものは、だれにてもあれ、わが弟子たることあたわず（ルカ十四章三十三節）」

何と思いあがった厳しさだとお思いですか？しかし、自分の家、自分の国を捨てて、生涯の独身を神に誓い、神に命を捧げて、布教、教育、社会福祉に挺身するカトリック宣教師、修道士、修道女たちの姿を見かけたことはありませんか？　現在、日本だけにでも千二百名のカトリック外人宣教師、三百五十名の日本人神父、四千五百名に上る修道士、修道女が、現に実在しているのです。

そして、キリストの教えを受け取り、神の掟に従って美しい人間像を築き上げようと日々努力している世界五億のカトリック信者の姿は、決して「一場の夢」ではありません。

そういう生き方があるということを……「神」を基盤として百八十度方向を転換した全く別種ないのちのあり方が——現実を遊離したものとしてではなく——現に実在するのだということを、私は、現代の人々、ことに若い世代の人々に、一度話しかけてみたいものと乞い願っておりました。

幸いに、東北放送、ラジオ青森、岩手、福島各局のご協力を得まして、一週一度、十五分間ずつではありましたが、ラジオを通じて東北の人々に語りかける機会が与えられたことはまことに、ありがたいことでしできるだけ平易にご説明申し上げたつもりであります。

まことにおこがましい言い分になりますが、何か人生の目標を見失ったようにも見受けられるきょう、このごろの世相ですが、私は、人間の良識と善意とを信じて疑いません。道理にかなったことならば、じっくり話し合えば、必ず、いつかはわかってもらえる……そう、いつかは、です。私は、私のこれらの言葉が、今すぐに理解されるとは思っておりません。ですから、各放送局に寄せられた「モニター報告」の中に、「小林司教の話に反撥と抵抗を感じた」あるいは「全然興味がない」ということを、率直に打ち明けられた二、三の方々の感想を、私は当然なこととして受け取りました。ですから、また、同じ「モニター報告」の中の大ぜいの方々が私の話に特別な関心と好意とを寄せられ、また、私あて、および放送局あてに、おびただし

い激励と感動のお便りを寄せられたのを見ましたとき、私は、むしろ、驚きを禁じ得ませんでした。衷心から感謝し、また勇気を得た次第です。

今回、「心の花束」の時間としての放送実現のため、絶大なご協力とご賛同を与えられました東北放送、およびラジオ青森、岩手、福島四局の方々に対しましては、ここに深甚なる感謝を捧げます。

また、この講話集の刊行にあたり、多大な犠牲とご尽力とをいただきました聖パウロ女子修道会日本管区長マザー・マリア・イレネを始め、修道女の皆様に厚く御礼を申し上げます。

私の放送講話集「生きるに値するいのち」（心の花束第一集）は拙いものではありますが、私の小さな贈り物として大方の諸彦にお送りする次第、幸いにご高評とご鞭達とを賜らば幸甚です。

昭和三十四年正月五日

仙台にて

小林有方司教

目次

序……一
案内文……七
第一話　許しあういのち……九
第二話　高めあういのち……一七
第三話　磨きあういのち……二四
第四話　理解しあういのち……三一
第五話　孤独を凝視めて……三九
第六話　考える葦……四七
第七話　しあわせであることの義務……五四
第八話　守銭奴のなげき……六四
第九話　術策と金力で獲得したもの……七三
第十話　性の解放のもたらすもの……八〇
第十一話　燻銀のような人間美……八八

第十二話　無限への息吹き……九六
第十三話　強きものと弱きもの……一〇四
第十四話　三百五十円のいのち……一一三
第十五話　思い出話……一二一
第十六話　魂のいのち……一三一
第十七話　ただ一つのこと……一三九
第十八話　驚いてみたい……一四七
第十九話　虫けらの知恵……一五五
第二十話　神秘の奥に潜むもの……一六四
第二十一話　テ・デウム！……一七三
第二十二話　現代の奇蹟……一八〇
第二十三話　自由の掟……一八八
第二十四話　自由人の誇り……一九六
第二十五話　心の旅路を振り返って……二〇四
第二十六話　生きるに値するいのち……二一二

――テーマ・ミュージック――

バッハのマテオ伝「受難曲」63番

コーラル　“O Haupt, voll Blut und Wunden”

静かに流れて――

アナウンサーの案内文

「病めるものにも、健やかなるものにも、ひとしく幸多かれとの祈りをこめて、毎週この時間、カトリック教会が皆様にお送りする『心の花束』の時間が参りました。

ともすれば、生活の惰性に押し流されて、生きることの希望と喜びとを見失いがちなきょうこのごろでございます。

でも、この世の命は、生きるに値しないでしょうか？

お話は、仙台光ケ丘スペルマン病院主、カトリック司教、小林有方師でございます。

第一話　許しあういのち

皆様、みちのくの夜が更けて参りました。きょうの一日のいとなみが終わろうとしています。お疲れになったことでしょう。私にとりましても、きょうの一日はいろいろな意味で多忙な一日でありました。けれども、生きているということが、きょう一日生きて働くことができたということが、深い意味を持っているのだということを考え、静かな満ち足りた眠りに入ることができますように、私は、皆様に小さなお話をしてみたいと思います。それは私自身のいのちの反省であると同時に、あすのよりよき生命への、私自身の決心であり、また、せめて何人かの人々が私の拙い話に耳を傾けていてくださるに違いないと信じつつ、私が私自身に語って聞かせる言葉でもあるのです。

こんな話がありました。ある南方の、つまり熱帯地方のどこかの島だと考えてください。その島の海岸で十人余りの黒坊の子供たちが仲良く遊んでおりました。皆が丸く車座に坐って、足を

投げ出し、歌ったりお話をしたりしていたのです。そのうちに日も暮れかかりましたので、それぞれ自分の家に帰ろうとしましたが、その時になって困ったことができたのです。というのは、丸く車座になって、足を投げ出していたのですが、そのどれを見ても細く黒いすりこぎのような、それが二十本余り見境もなくめちゃくちゃに交錯していて、そのどれが自分の足なのか見当がつかなくなってしまったのでした。日は暮れて来る、お腹はすいて来ますし、子供たちは悲しくなって大きな声で泣き始めました。そこへちょうど折よく、ひとりの旅人が通りかかって、なぜ泣いているのかと尋ね、その理由を聞くと、子供たちに申しました。

「それは困ったことだ。だが、おじさんが、いいことを教えてあげよう。」

それから、その旅人は、そこら辺にあった一本の棒片を子供たちに示して、

「この棒でお前たちの足を一本ずつ叩いていく、痛かったら、それが自分の足なんだから引っ込めるがよい。」

そして、その棒を目よりも高く振り上げ、今にも、ヤッとばかりに打ちおろそうとしますと、どうでしょう。今まで、どれが自分の足かわからぬ程こんがらがっていた二十本余りの、すりこぎのような足が、いっせいに、サッと引込み、そのまま、バラバラとくもの子を散らすように逃げ帰ってしまいました……というお話です。

これは一見他愛もないおとぎ話のように見えますが、実は、このお話の中には深いものが含まれているのです。

この世のいのちにとって、愛情は貴重なものです。どこまでも信じあい、助けあって行く美しい友情は、どんなにか私たちの人生にうるおいをもたらしてくれることでしょう。人生は、いわば、愛情によって完成されて行くとも言えるものです。

けれども現代の世相を形造っている軽薄な愛情というものが、果たして、どれだけ人間を幸福にし、人間を完成しているでしょうか。さきほどの黒坊の子供たちの話は、現代のゆがめられた愛情の姿をみごとにばくろしています。それは、愛することが楽しい間だけは、愛することが自分に何らかの利益をもたらしてくれている間だけは、自分のものも他人のものも区別がなく、すべてを投げ出しあってほんとうに愛しあっていると信じているのです。けれども、一度、愛することが、何らかの苦痛を伴うときには、愛することが自分から何かの犠牲を要求する段になると、サッサと自分の荷物をまとめ上げ、それを背中に背負って、さよならをするのです。もう友だちでもなければ夫婦でもない、もう君とは何の関係もないのだと、きのうの友が、否、きのうまでの夫と妻とが、きょうはもう仇敵の仲ともなりかねない、ゆがめられた愛情の姿を、あの話は諷刺しているのです。

一体、そういう愛情とは、どんなものなのでしょうか？　愛情という以上は愛することに違いはないのですが、一体、何を愛したというのでしょうか？　そういう人々が愛したもの、それは、その相手と共に持った「楽しい一時（ひととき）」なのであり、その相手が自分に与えてくれた悦楽だけなのです。言い換えれば、愛しあう喜びに酔う自分自身をかわいがったままでなのです。それは愛情の仮面を被った醜いエゴイズムに過ぎません。

しかし、愛するという以上は、愛することの対象はその相手にあるのであって、自分自身を愛することではないはずです。そして、愛するということの意味は、その相手のしあわせを希うということであって、愛する相手がしあわせであるために自分にできることは何でもしよう。何でも与えようという方向、言い換えたなら、おのれをむなしゅうする没我的な奉仕の中に、始めて、愛が……ほんとうの愛が宿るのです。愛しあう喜び、愛の歓楽は愛情の正当な報酬ではありましょうが、それが失われた後にも、なおかつ愛するもののしあわせを希う心が……そして、それがための自己の奉仕が、なおも続く時にこそ、始めて、私たちは堂々と胸を張って、私はあの人を愛するのだ……と言えるのです。ですから、愛情は、愛の歓楽に酔うときにではなく、愛が裏切られ、愛の歓楽が終わりを告げた後にこそ、始めて、真の輝きを発するものなのです。

愛とは忍ぶことです。愛とは許すこと、忘れることなのです。真の愛は、そこから出発しま

す。そこから出発して、あくまで恵み、与え、捧げ続けます。愛は、いったん、愛したからには、どこまでも信じぬき、絶望の間際に追い込まれながらもなおも望み続け、もう投げ出してしまいたいと叫びながらも、なおかつ抱き、包み、忍び、許し、与え、恵み続けるもの……その本当の愛こそが、私たちの生命を豊かにし、大きく実らしめるのではないでしょうか？

私がまだ東京のカトリック大神学院に勉学中のころのことでした。その時の大神学院の院長は、親日家の思想家として有名なカンドー神父でありましたが、そのカンドー神父が毎週一度あるいは二度、多忙な業務の余暇を見つけては訪問して、見舞い励ましていたひとりの貧しい青年がありました。貧しいといってもこれ以上の貧しさはないと思われるあばら屋に、だれひとり看るものもない孤独の中で、淋しく死を待つかわいそうな病める青年でありました。ある日の訪問のとき、この青年は問わず語りにこんなことをもらしたのでした。

「私にはひとりの母がいます。けれど私はその母を心から憎んでいるのです。どんなことがあっても、私は、母を許そうとは思いません。」

カンドー神父は何気なくその告白を聞き過ごしました。それから間もないある日のこと、病床の青年は、カンドー神父の顔をジーッと見て、思いつめたように申しました。

「神父様、私のようなものでも、洗礼を受けて神様の子供になれるのでしょうか？」と。

そこで、カンドー神父とその青年の間には次のような会話がかわされました。

「もちろんですとも。だからこそ、私はこうして君の所へやって来るのですよ。」

「じゃ、神父様、どうぞ、私にも洗礼を授けてください。」

「よろしい。喜んで。けれど、その前に一つだけ条件があるのです。それは、いつぞや君の話に、君は生みのお母さんを心から憎んでいる。許すことができないと言いましたね。でも、神様の子供になるためには、その憎しみを捨てねばなりません。お母さんを、たとえどんな悪いことがあったにせよ、許してあげねばなりません。それでこそ、君は神の子となれるのですよ。」

「いや、神父様、それだけは言わないでください。ほかのことなら何でもします。が、それだけは……いや僕にはどうしてもできない。」

「そうですか。それでは残念だけれど、私は君に洗礼を授けることができないのですよ。」

そして話は決裂しました。ジーッと神父を見つめる青年の瞳にキラリと涙が光ったかと思うと、クルリと神父に背中を向けて悲痛な叫びをあげました。

「そうですか？　それじゃ私も洗礼なんか受けたくありません。」

それから数日たって、カンドー神父は再び青年の病床を訪れました。ところが病人は神父を待ちこがれていたのです。

「神父様、どうして、もっと早く来てくださらなかったのですか。僕は神父様に会いたかった。」

そう言ってから、何か書くものとペンとを所望しました。さいわい、いつもの習慣で鞄の中に葉書を持っていたカンドー神父が、その一枚にペンを添えて差し出しますと、ひん死の青年は、やせ衰えた上半身を起こし、熱に震える手にペンを取り、たどたどしく、その葉書に認めました。

「お母さん、僕が悪かった。どうかあなたの不幸な子供を許してください。」

そして、それを神父に差し出して申しました。

「神父様、これでいいのでしょうか？」と。

それから数日後、青年は澄み切った瞳に心からの安心と満足とを浮かべながら、安らかに息を引き取りました。

皆様、夜も大分ふけたようです。どうやら寝床に入る時間がやって来ました。けれど、眠りに入る前に、一度考えてくださいませんか？　だれかを、あなたは、だれかを憎んではいませんか？　だれかを恨んでいることはありませんか？

もしありましたなら、今、許してあげましょう。不愉快な思い出を全部忘れ去って、あすはそ

の人に朗らかな笑顔を見せてあげましょう。もし私の話をお友だち同志、あるいは、ご家族揃って聴いてくださった方がありましたら、今、どうぞ静かに顔を見あって、ほおえみかわしてください。許しと愛情のしるしとして。

許すことによって、愛することによって、皆様のいのちが、祝福で満たされますように、と祈ります。

では、皆様、おやすみなさい。

第二話　高めあういのち

昔、ギリシャにひとりの若い詩人がおりました。美しい数篇の詩で、世人がようやくその詩人の名を認め始めたころになって、どういうわけか、フト霊感が、詩ごころが停滞してしまったのです。今でいうスランプに陥ったのでした。高らかに歌い上げたい欲望だけがあって、その歌を乗せて飛ばせる詩心（しごころ）が内から湧き上がって来ないのです。青年は悩み、あせり、苦しみました。その時、ひとりの少女が青年の前に現われて来るのです。青年はその少女を愛しました。その少女の清浄無垢な面影が青年の心を捉えたのです。そのとき、ぼつ然として詩情が湧いて来ました。その少女を愛し、その少女からも愛されていると考えただけで、くめどもくめども尽きることのない霊感が、こんこんと湧き起こって来て、青年は、調子の高いすばらしい詩（うた）を次から次へと発表して行ったということです。少女の名はエゲリアといったのでしたが、それ以来、人々はこの少女のエゲリアという名前を、固有名詞ではなく一般名詞として使うようになり、だれかがある少女を愛し、また愛されることによって、霊感を得、高められて行くという、そういう愛人の名

をエゲリアと呼ぶようになりました。

この話は、友情というもの、なかでも、異性同志が互いに異性を意識して愛しあう友情、すなわち恋愛というものの正しい姿を美しく描き出していると思われます。

友情というものは、ただの愛情と異っていて、それはふたりの人間、たとえば甲と乙とが、相互の愛情を意識して愛しあうという、相互愛の中に生まれて来るものなのです。ですから友情には甲と乙、ふたりの人間が互いに結ばれ合う絆（きずな）とでも申しましょうか、一本の「ひも」ができるわけです。ところが、そのひも、その絆には、高尚なものから下等なものまで、いろいろな種類があって、その種類、その性質によって、友情の種類や性質もまた、変わって来るものなのです。

たとえば、よく監獄で結ばれた友情などということがありますが、罪を犯して獄舎にいる間に、同じ獄舎の仲間の徹底的な悪人振りにぞっこんほれ込んで、娑婆に出てからもふたりはコンビになって悪事を働き続けるというようなことが間々（まま）ありましょう。これなどは、結ばれた「ひも」が「悪そのもの」なのであって、もちろん、そういう友情が、愛などみじんもない、ただ互いに利用しあうだけの、偽りの友情にほかならぬことは言うまでもありません。

恋愛の場合にも、ほとんどそれに近いものがあるようですね。ただ、「からだ」だけの魅力、

「からだ」の与えあう欲情の快楽だけで結ばれているもの、その絆は、愛情ではなくて欲情と言った方がよいもので、そういう友情ならば、そこら辺の野ら犬の間にも見受けられます。

今夜の私の話を聞いてくださっている方々の中に、結婚前のお嬢さんたちがいられるでしょうか。もし、いらしたら、よく聞いていただきたいのです。ある青年が、いつかあなたの耳に愛の告白をささやくことがあったなら、その愛に答える前に、一度よく考え、正直に自分自身に問いただしてみてください。「なぜ、彼は私を愛するのだろうか？　私の何が彼の心を引きつけているのだろうか？」と。そして、もしも、残念なことに、それが、ただあなたの美ぼうと、あなたの均勢のとれた若さの美しさだけなのだと答えねばならなかったとしたら、その愛情に深入りしてはいけないのです。また、たとえ、どのような美しい言葉をささやかれようと、交際し始めて間もなく、あなたのすべてを求めてくるような青年の愛の言葉を信じてはいけません。ふたりの間に、今、結ばれようとする友情の絆は、ただ、からだと、からだの与えるただれた快楽以外の何ものでもないからです。もちろん、人間が人間を愛するのですから、その愛の対象の中には、「からだも」含まれています。私はあえて「からだも」と言います。すなわち、「からだだけ」ではいけないのです。「からだ」だけの絆というものが、どんなにはかなくもろいものかということは、あなた方のたくさんの先輩たちが知り過ぎるほど、知っています。「からだ」だけの魅

力が一体どれくらい続くとお思いですか？　もしも、あなたが、そういう青年の愛情を信じて、あなたのすべてを与え尽くし、やがて飽きられ、捨てられるとき……しかも「からだ」だけの魅力で異性の愛を求めたのが、あなた自身であったとしたら……その愛情の破たんの悲運に泣く悲しみの涙は、だれの責任でもない、あなた自身の責任になるのですよ。

ところで、もしも、あなたが、本当の人間としての、人間らしい誇りをあなたの心の中に培うなら、すなわち、あなたの目を内側に向けて、内面的な精神の美しさを内に蔵するなら……たとえば、高い教養を持ちながら、それを謙虚に包むことを忘れず、深い大きな愛情を内にたくわえながら、それにおぼれぬだけの理知にも生き、女らしいしとやかさの内に、強じんな信念を宿し、特に清浄と純潔との価値を知る魂……そういう内面の輝きは、それを内に隠そうとすればするほど、おのずから外に溢れ出て来るものなのです。全人格の輝きが光を放つのです。

ことに、純潔の美しさというものは、それがからだのことだと思っている人が多いようですが、そうではありません。実は、それは精神的な美しさなのです。だれでもが持っている本能としてのからだの欲望を、それが許される時まで……というと、つまり、結婚生活という確固たる基盤ができて、愛の結晶としての子供を生みかつ育てる権利と資格とができるまでは、より強く、より高い精神的な力でもって、その欲望を制御し、それを快楽として味わわないということ、もちろん、それには、自分自身の欲情との不断の戦いが必要でしょうが、本能の正しい理解と強い意志力とで己が肉体との戦いを続けて行くとき、肉体に対する精神力の勝利の栄光が外に溢れ出て来るその内面の輝きこそが、ふくいくたる処女の純潔の香りであり、また、童貞なる青年のけなげな「りりしさ」なのであります。そうなったなら、実は外面の美ぼう、容姿、姿態の均勢などは、どうでもよくなるのです。

そして、そういうあなたの内面の輝きが目につかぬほどに、「からだ」のことにしか興味のない青年ならば、あなたの愛の対象としてはあまりにも値打ちのないものと言わねばなりません。けれど、もし、あなたのその人格の美に心打たれる青年があったとすれば、その青年は自分もまた、その心の中に、あなたの内面の輝きによって高鳴ることを知っている美しい心の琴線を持っているものと言えましょう。

彼の魂は、あなたを愛することに大きな誇りを感ずると共に、その愛に値するものたろうとして、彼もまた己が心を清め高めようと努力するでしょう。あなたは、また、そのけなげな青年の愛に答え得ようとして、あなた自身を深めて行くでしょう。

かくて、愛しあうとは、お互いがお互いを高め、清め、育くみあって行く生命なのです。ふたりの若さや、からだの容姿はやがて衰えて行きましょう。けれど育くみあって行く魂の輝きは、

若さや美ぼうとは何の関係もなく、どこまでも、ふたりのいのちを大きくふくらませ、満たし続けて行くことでしょう。そのような愛情の世界が、あり得ることを……いや、あなた方自身が、そういう世界を生み出して行かねばならないのだということを信じていただきたいのです。

十九世紀末のフランスの文壇に異彩を放ったレオン・ブロアという作家がありました。彼は青年時代文学にこって、せっかく得た建築助手の職業を投げ捨て、父親の怒りと嘆きをよそに、頽廃的な生活に陥込んで行きました。それからというもの、およそ二十年の間、彼の生活は、浪費と恋愛沙汰のうちに続いて行きますが、ついに彼が四十才を越えたある日のこと、友人の葬式の席で、ジャンヌというひとりの女性に出合いました。彼女こそ、ブロア自身の言葉を借りると「今までだれもが逃れることのできなかった非常に大きな危険から、私を救うために、私の前におかれたひとりの女性」であったのです。ふたりはヒシと愛しあい、やがて結婚に結ばれますが、その結婚までの相愛の一年間、ブロアがジャンヌに書き送った手紙が、後に「フィアンセへの手紙」として公開されました。

きょうは、もうあまり時間もありませんので、お別れの言葉のかわりに、その一節を朗読してみましょう。ブロアはこんなことを書いています。

『愛するジャンヌよ。

僕たちはどんなにお互いの心の中に深く入っていることだろうね。

僕たちは、一つの愛の中で、一緒に祈り、一緒に神の言葉を学ぼうよ。

神の愛と、君の愛とに支えられて、何か偉大な仕事を成し遂げられそうな気がする。そうだ、すばらしいことがやって来るようだよ。そして僕も、もし、君を光の中に歩ませることができるなら、そのかわりに僕自身の幸福の全部を断念しても悔いないと思うよ。

ジャンヌ！　僕は君を大きな愛で包む。では、さようなら

君のレオン・ブロアより』

×　×　×

で、私も、皆様を大きな愛で包みつつ、皆様に、さようならと申しましょう。

では、皆様、夜もふけました。静かにおやすみなさい。

第三話　磨きあういのち

キリスト教のバイブルを繙いてみますと、旧約聖書の第一巻、創世記という書物の中にたいへんおもしろい物語が記されています。それは人祖アダムとエワの創造の物語でありますが、聖書に記された物語をかいつまんでお話してみますと、人類創造の暁、神はまず最初にひとりの男をお造りになりました。それは、土によって……つまり土を形成しているもろもろの元素と全く同じ物質でできている肉体と、神ご自身の生命の分与とも言われる霊魂と、この二つのものから成り立つところの、最初の人類でありました。この男アダムは、自分に人間としての生命を与え給うた神に、光栄と感謝とを捧げながら、希望に充ちた長い人類歴史の第一歩を踏みしめようとしたのです。ところがその時になって、神は突然ひとり言を言われます。『人、ひとりなるはよろしからず』と。人間がひとりでいることはよくないことだというのです。では、人間がふたり以上、たくさんいればいるほどよいのかと申しますと、そうではないので、この言葉の意味は、すぐ次に続く、神の言葉によって、はっきりします。すなわち、神は「人、ひとりなるはよろしからず」

と言われてから「我、彼にかなう助け手を彼のために作らん」と曰うのです。人間がひとりでいるのはよくない、ではもうひとりの人間、神がアダムに与えようとされるもうひとりの人間とは、ただ、アダムと同類の人類のひとりであるというばかりではなく、実に、アダムにかなう助け手、すなわちアダムと共に笑い、アダムと共に泣き、アダムと共に喜び、アダムと共に苦しみつつ、ふたりして己が人生を完成していくための人生の伴侶でなければならなかったのです。そこで神は、アダムを深く眠らせ、その熟睡している間に、アダムの肋骨の一本をとり出し、それをもって、ひとりの女エワを創造なさいました。目覚めて、自分の前に立つ美しい女エワを見たとき、アダムは、彼女が何から造られたのかを本能的に悟ったかのように、エワをしっかりと抱きしめ、「これこそ私の骨の骨、私の肉の肉だ！」と叫んだというのです。この聖書を書いたモイゼは、すぐに引き続いて、この話の結論のように、次の言葉を書き添えています。「かかるが故に、人、男たるものは、己が父母を離れてその妻につき、ふたりは一体となるべきなり」と。

さて、皆様、この聖書の記録は、これを、そのまま、文字通りに取り上げることができないことは言うまでもありませんが、しかしこの話が、本質的に何を言おうとしているかは明白であります。それは、第一に、人間にとっては、自然法に従って、結婚という制度が必要であるという

こと、第二に、女が男からできたのだという暗示によって、結婚生活内における男女の立場、すなわち、男を主と見、女を従と見つつ、しかもその両者間の愛による密接な一体性という二つのことであります。

夫は妻にとって、一体何であるのか？　妻は夫の何に当たるのかなどという論議の愚かさを聖書はみごとに喝破しているのです。「かくてふたりは一体となるべきなり」……ふたりがふたりして一つの体、一つの心になるとすれば、夫は妻の半身、妻は夫の分身なのです。結婚するまでは、青年と少女とは各自が自分の生命を生きて来ました。それは二つの生命でした。けれども、結婚によって一度結ばれた後には、ふたりはふたりして始めて一つの生命を生きるのです。夫は妻なくしては完全な人生を生きることはなく、妻は夫なくしておのが生命を完うできない……夫は妻の、妻は夫の分身、半身となりきる……そこに結婚の聖さがあると聖書は言うのです。

この聖書が書かれたのは、今からおよそ三千五百年ばかり前で、著者はモイゼということになっていますが、実は、これはモイゼの発明ではなくて、それまで、恐らく、数万年いや数十万年の間、一部の人類が、口から口に語り伝えて来た伝説をそのまま書き留めたものだと言われます。

聖書というと、すぐにキリスト教に結びつけてけぎらいする人々があるかもしれませんが、し

かし、人類が地上に出現して間もなくの時代から、すでにこのような結婚観を伝説として語り伝えて来たという一つの事実の中に、私は人間というものの厳粛な宿命を見い出すような気がするのであります。

さて、人類には、植物や他の一般の動物たちと同様に、大自然の法則に従って一つの義務が課せられています。それは、おのが子供を生み育てて、人類という種族を永続せしめるということであります。そして結婚という制度が一対の男女の愛情によって、その義務を果たしていくための一つの基盤であることは言うまでもないことでしょう。

ここで私たちは、精神生活を営む人類と、そうでない他の一般の動物たちとの間にある根本的な相異に注意してみましょう。たとえば、猫の子が生まれるとたいてい一カ月ぐらいでどこかにくれてやるでしょう。子猫は貰われて行った先で、ミルクやカツオ節のご飯などで一人前の猫に育って行きます。

最初の二、三日は母を慕って泣きましょうが、すぐに忘れてしまいます。母猫にしてもそうなのです。三匹の子猫の中一匹がいなくなっても別に捜そうともしませんし、二カ月もたてば子猫に見向きもしなくなります。生まれたばかりの子猫のそばに見知らぬ人が近づこうものなら、毛を逆立てて身構えたあの強い母性愛の本能はもう必要がなくなったのです。子猫が生まれて一カ

月の間……と申しますと、猫の寿命をかりに十年すなわち百二十ヵ月と見て、全生涯の百二十分の一の期間ということになりますが、その間だけ、子猫には母性愛の本能が必要なのだと大自然はみたのでしょう。それも母性愛だけ、子猫には父親の愛は必要ではありません。

ところが人間の場合はどうかと申しますと、人間の寿命をかりに六十年としますなら、その全生涯の百分の一どころか、十分の一の期間が過ぎた時、人間の子供は幼稚園に行って、お手々を叩いてチッチパッパというでしょう。これではまだまだ使いものになりません。人間の子供が一人前になって両親の許を離れてよいというまでには、約二十年、つまり、全生涯の三分の一の年月を待たねばならないのです。しかも、母性愛だけでは足りません。子供が身も心も一人前の人格の形成を見るためには、父親のきびしいしつけと、母親の細やかな愛情とがなければならないのです。

ですから、仮に男子が二十八才、女性が二十四才で結婚生活に入ったとしましょう。そして、結婚後、二年たって最初の子供が生まれ、それから平均三年おきに四人の子供を生んだとしますと、最後の子供が二十才になって両親のもとを離れてもよいという時がくるときには、父親は六十二才、母親は五十八才、すなわち、夫婦ともに、その人生の大半を終わっているはずであります。言い換えたならば、家庭をもって子供を生みかつそれを育て上げるということは、夫と妻とが一体となり、その全生涯をかけてこそ始めて成し遂げられる重大事業なのだということになりましょう。従って、結婚とは、ひとりの夫とひとりの妻とが、再び別れることのない不可分の関係に結び合わされたものであるとみるのが自然法の立場なのであります。

皆様！　夫と妻とは人生の伴侶、互いの分身として、互いの欠点を忍びあい、互いの過失を許しあい、互いに恵み、互いに与え、互いの幸福を祈り合いながら、ふたりして生きるいのちの完成を目指す、人生の修業の道場こそ、それこそが結婚生活なのではないでしょうか。

若あゆのようなピチピチとした青春の若さ、それは確かに美しいものです。けれども、その美しさはあまりにも生の美しさ、いわば、未熟の美しさなのです。けれども、ちょうど、春の田畑の青々とした美しさが、やがて、きびしい太陽の熱に耐え、激しい風と雨との試煉を乗り越え、ついに、内に豊かな実りを宿して黄金色に輝き波打つとき、人々は実りの秋の美しさを讃えると同じように、青春の若さの美しさも、夫とし妻として結ばれた結婚生活という愛の修業の道場の中にきびしく鍛えられて、始めて人生の実りの秋を迎えるのです。最後の子供をりっぱに育て上げて世に送り出した老夫婦が……完全にお互いの分身となりきりながら、今はもう何の求めあうところもなく、暖かな春の陽ざしを浴びて互いにほおえみかわす、満ち足りた老境の深さと静け

さ……ああ私には、この世においてこれ以上に美しい姿があるとは思われないのです。

皆様、きょうもどうやら、みちのくに静かな夜がふけて来たようです。一日の夜に、私たちはやがて来る人生の夜を思いましょう。生きるということはきびしいことです。中でもひとりの夫がひとりの妻を労り続け、ひとりの妻が生涯かけてひとりの夫を愛し抜くということは、至難なことかもしれません。けれども、欲情のおもむくままに、次から次へと絶対に満たされることのない愛欲の対象を求めてさまよい歩き、ついに、身も心も疲れ、なえ果てた淋しい人生の末路を迎える愚かさに比べたら……。

皆様、生きるということはきびしいことです。けれど、その「きびしさ」の中にこそ、人間としての誇りと喜びとがみなぎるのです。

私には、いつの日にか心の底から、しみじみとした喜びをもって口ずさみたい一つの言葉があります。いつか皆様と共に、この一句を口ずさみ得たらと思います。それは

「年をとるということは、楽しいことだ！」という一句であります。

では皆様、おやすみなさい。

第四話　理解しあういのち

皆様は、こんな日本の古い話をご存じでしょうか？　ある所に、隣りあわせの二軒の家がありまして、その一軒には、子供のない中年の夫婦が住んでいましたが、どういうわけか、その夫婦の間にはけんかの絶えたことがありません。ちょっとしたことが原因となっては、互いに口汚くののしりあって不愉快な日々を過ごしているのでした。ところが、その隣りは大世帯で、若夫婦に子供がふたり、それにお姑までが加わった大家族ですが、不思議なことには、その家からは、未だかつて口げんかの声らしいものの漏れるのを聞いた人がないのです。いつ行っても一家こぞってニコニコと、いかにもしあわせそうなありさまは、夫婦げんかを日課のようにしている隣りの夫婦者には、真に理解し難いなぞでした。そこである日、隣りの家へ出かけて行って、いったい、どうしてたくさんの家族が毎日毎日けんか一つしないで暮らして行けるのか、その秘訣を教えてほしいと頼みました。隣りの若主人はニッコリ笑って、

「ああ、そのことですか。それはなに、ちっとも不思議なことではないのですよ。あなたのお家

に夫婦げんかが絶えないのはおふたりとも善人だからです。私のところにけんかがないのは、私たちみんなが悪人ぞろいだからです。」

と答えました。隣りの主人が驚いて、善人ばかりの家にけんかがあって、悪人ぞろいの家にけんかがないとはいったいどういうことですかと尋ねますと、若主人が答えて、

「まあ、仮に私が座敷の真中に出してあった湯のみ茶わんに気がつかないで、うっかり足にひっかけたとしましょうか。私は、ああ、これは私が不注意で悪かったと申します。すると私の家内が、『いや、あなたが悪いのではありません。早く片づけなかった私が悪いのです。』……と言うと、私の母がそばから口を出して、『いやいや年寄りの私がそばにいながら注意してやらなかった私のあやまちなんだよ。』と申します。みんなが進んで悪者になろうとするのです。けんかをしたくても、これではできないじゃありませんか。ところで、お宅でしたら、おふたりは、そんなとき、どのようにおっしゃいますか？」

と言われて、隣りの男は、フーム、なるほどそうでしたかと合点がいったというお話です。

たいへんに古臭いお話を申し上げて失礼しましたが、案外、こんなところに、つい見逃しやすい大きな真理がひそんでいるのではないでしょうか？

ここ三回にわたって、私は「愛情」という問題についてお話して来ましたが、もう一言愛情ということに補足しておきたいと思います。私は、最初の時に、愛とは許しあうこと忍びあうことだと申しましたが、さらに、愛とは、互いに理解しあうことでもあると言いたいのです。よく、「今の若いものの気持ちがわからない」とか「私の夫は私を理解してくれない」などの言葉が使われますが、一体、理解するとは、どういうことなのでしょう。

世の中には、どこから見ても欠点一つない完全無欠にでき上がった人間というものはめったにありませんし、また、何もかも悪い面ばかりで、徹底的に悪人だという人も、ほとんどあり得ません。ですから、彼は悪い奴だ、だから彼の行いは全部悪で、彼の考えは全部まちがいだ、彼の言葉は全部嘘だとひとりぎめすることはよくないことです。確かに、だれが見ても仕様のない、救いようのない人間と思われる人があります。けれども、なおかつ、その人も、どこからどこまでが全部悪いということはあり得ないことなので、その人にも、どこかに善い面が……すばらしい性格が——知力や才能の方面ではなくても——人間としての素質の中に何かの善さが必ずあるはずなのです。問題は、私たちがそれをみつけようと努力するか、否かにかかっています。たとえば、しようのない人間だと思われている人が、よく気をつけてみると、自分より弱い人間には最後までめんどうを見てやるとか、どんなことがあっても友だちを裏切るようなことは絶対にし

ないとか、案外な美点が——発見しようと思う人には発見できるものなのです。だれももちろん、悪そのものを愛することはできませんが、悪い人だと思われている人の持つ「美点」を愛することはできましょう。その善さを見い出し、それを尊敬し、それを愛することが、すなわち、その人を理解するということなのです。

お子さんをたくさんお持ちのご両親で、どうしてあんな子供ができたのだろうかと不思議がられるような、学校でもご近所でも、いつも問題になる、いわゆる「問題の子供」をお持ちの方がありましょうか？　もし、ありましたなら……だれの子でもない、あなたご自身のお子さんです。必死になって、祈りながら、謙虚な気持ちで、そのお子さんの美点を捜し出してください。必ずあるはずなのです。そして、それを、あたかも貴重な宝石のように尊重してあげてください。「世の中の奴等が全部僕を嫌っても、僕のお父さんとお母さんだけは、僕のことをわかってくれてるんだ」という、ほのぼのとした自覚が、お子さんの胸の中に湧き出て来るなら、もう、お子さんは救われているのです。いや、救われているどころか、そのお子さんの人生の完成を目指して、強い第一歩が踏み出されていると言っていいのです。

ところで、第二の点に入りますが、人間として徹頭徹尾悪人だという人がないと同様に、ある人の意見や考え方、その主張というものも、それが少くとも何人かの共鳴者を持つ以上は、徹底的に全部がまちがいであるということも少いものです。どこかに真実があり、どこかの一点に傾聴すべき点があるはずなのです。

それと全く同じわけで、自分の意見が正しいと確信する人も、何人かの人が自分の意見や主張に反対するならば、自分の意見のどこかに誤りがあるか、少くとも説明し足りない点があるのではなかろうかと反省してみる必要があるわけです。自分の意見はすべて正しく、それに反対する他人の主張はすべてまちがいだときめつけることは、正しいことでもなければ、また賢いことでもありません。

生活の態度や、あるいは、意見、主張を異にしているさまざまな人々が一緒になってこの世の生命ができ上がっている限り、いつも他人の主張の中の真実に耳を傾け、自分の意見のまちがいを謙虚に認めるだけの、心のひろさと素直さとを持って生きるのでないならば、平和な世界というものは望むべくもありません。

私はこの時間の放送では、政治に関しては語らぬつもりでおりますが、今度の勤務評定に関する政府と日教組との争いは、それが、「教育」という精神的な仕事の場を中心としているものでありますので、私にも一言、言いたいことがあります。

政府は、他のすべての公務員に勤務評定が実施されているのだから、同じ公務員である学校教

師にも、この法律があてはまるのは当然であるという立場をとっているようであります。けれども、鉄道の職員や官公庁の事務員たちのしている仕事と、学校教師が果たしつつある教育という仕事との間の根本的な相違が見逃されているのではないかと私は恐れています。一般の職域においては、仕事というものの本質は、あらゆる意味を含めて「能率」という一本の線にしぼられてきます。それは外部に現われた世界であり、外面の「はかり」ではかられる……すなわち評定され得る次元の世界なのです。もしも教育ということを、単に知識の伝授、その切り売りと考えるならば、同じ次元に属しましょうが、私は教育というものを、全く別の世界、次元を異にした世界の労作と考えています。一例をとるならば、生物学の教師は、一本の植物を教材にするとき、その植物の類別と名称、あるいは、その成長の過程、その内部構造の分析などを教示しましょう。それだけならば、その教え方のじょうずへたや授業への熱意、出席状況などが評定の対象となりましょうが、少くとも小中学校の児童の教育ということは、それ以外に児童の人格の形成が織り込まれていなければならぬはずです。従って一本の植物を教材にした場合、先にあげました事柄以外に、児童をして、一つの可憐な植物の中にひそむ生命の神秘に触れさせ、そこに驚きを感じさせ、生命というものの限りない尊さとその恩恵へのしみじみとした感謝を覚えさせることができねばなりません。いわば、教師の人格と児童の人格との火花を散らすような激しい接触の

うちに、始めて教育という業ができ上がると私は考えています。そのような教師自身の内面的な人格の力量は外部からは評定され得ない世界であるはず、それをただ、国鉄の職員なみに評定しようというところに、私は勤務評定実施の不合理を見るような気がいたします。従って、私は、それに反対を唱える人々の立場が理解できるように思われるのです。

が、それと同時に、私は、勤務評定に反対する教育者の立場を理解するからこそ、今度の日教組の人たちがとった反対のための手段、その方法を私は悲しい気持ち、なにか裏切られたような気持ちで見つめざるを得ないのです。さきほども申しました通り、教育とは、各教師が担当する学科を通じて児童の人格の形成を目指すものであるはずです。そして、人格形成の素材となるものは、理知の琢磨と、情操の陶冶……言い換えたなら、真理と愛とであります。たとえいかなる理由があろうとも、人間の内面的生命が、憎しみや恨みによって成長するものではないことを、私は、はっきりと断言いたします。人間性を豊かに実らせ、人の住む世界を地上のパラダイスにする唯一の方法があるとすれば、それは憎しみではなくて愛であり、戦いではなくて許しであり、敵の野望をあくまで粉砕することではなくて、互に話しあう場を持ちつつ理解しあっていくことです。

皆様、今や世界は、国と国とが、民族と民族とが、憎悪と疑心暗鬼の中に、こんとんと渦巻いています。せめて狭い四つの島にひしめく九千万の私たち日本国民は、祖国を一つにする「はらから」として、もっと理解しあい、和(なご)みあっていけないものでしょうか？

私は日本の国が、そこに住むひとりひとりみんな、自分こそが悪いのだと謙虚におのれが足りなさを見つめ得る、悪人ぞろいの国になって欲しいと心の底から祈らざるを得ません。

夏の夜がふけて来ました。夜のしじまは反省の時です。ひとりひとりの深い反省と悔悟の中に、また明かるい希望の朝が訪れますように。

では皆様、おやすみなさい。

第五話　孤独を凝視(みつ)めて

今から十五、六年も昔のことになりましょうか、私が大阪にいたころのある日のことです。突然見知らぬひとりの婦人の訪問を受けました。けれども、会って話しております中に、見知らぬとは言いながら、私は、その婦人の名前を新聞などでしばしば耳にしていたことを思い出しました。その婦人というのは、当時、関西では相当に名の売れた舞踊家だったのです。年のころは三十もすでに半ばを越していたと思いますが、売れっ子の自信に満ちたはつらつたる気構(きがまえ)の女性でありました。その有名な舞踊家が私を訪問したわけを尋ねようとしますと、それより先に、彼女自身問わず語りに次のように話してくれました。

「私は舞踊家なのですが、こんなに生きがいのある仕事は他にないと思います。この次にはあれを演じ、その次にはこれをひろうし……と公演の出物(だしもの)の構想を練るのですが、すばらしいヒントをインスピレーションのように思いついた時の喜びは、口では言い表わし得ないほどです。ところでできょうお伺いしましたのは、ちょっとお願いがあってのことなのですが、実は、いつか近い

中に、中世紀風のキリスト教的な雰囲気を盛ったものをやってみたいと思いまして、その参考に、お宅の教会堂の内部を見せていただきたいのです。ステンドグラスを通して流れこむ五色の彩光に充ちたゴチック建築の内陣の美しさが、きっと私によいヒントを与えてくれると思いますので……」と、まあ、こういうわけなのでした。当時、私が主管していました大阪の川口の教会は、その後、戦災で灰燼に帰しましたが、明治十一年の建造で総檜作り、純粋のゴチック様式で、中でもフランスからはるばる取り寄せたステンドグラスのすばらしさは筆舌に尽くし難いものがありました。私は喜んで、その婦人を教会堂に案内し、溜息のような感嘆詞を連発している彼女をそこにひとり残して書斎に引き返し、中断された仕事を続けていましたが、しばらくたって、彼女は再び私の部屋に姿を現わし、机の前の椅子に腰を降ろしてそれからおよそ一時間ばかり、自分の生きがいのある人生の喜びをとうとうと私に話して聞かせてくれたことでした。やがて、その婦人を玄関に送り出し、ホッと一息ついて、再び仕事の続きに取りかかろうとした矢先です。またしても、ドアにノックの音が聞こえて、今度は私がよく知っているひとりの青年が飛び込んで来ました。ところが、その青年はしばらく、私の顔を黙って見つめていたと思うと、たちまちその顔をクシャクシャにゆがめて、いきなり私の机に顔を伏せ、激しく泣き始めたものです。しばらくはポカンとしてあっけに取られていた私が、ようやく我に返ってだんだんと事情を

問いただしてみましたところが、どうやら、その青年は失恋をしたらしいのです。心に深傷をおうて、私の所に泣きに来たのでした。ようすがわかりましたので、私は安心して、泣きたいだけ泣かせておけとまた私の仕事にとりかかりました。が、突然、ハッと何かに気づいて思わずペンをおきました。

私が何に気づいたかおわかりになりますか？　それは一つの不思議なコントラスト……つまり、ほんの五分ぐらい前には、その同じ椅子に同じように腰を降ろしたひとりの女性が、「生きるということはすばらしいことですわね。」と繰り返しながら、長々と生きることの喜びを私に語ってくれたのでした……だのに、その同じ椅子で、今度はひとりの青年が、「僕はもう生きてるのがいやになった。」と身もだえしながら泣いている……ということでした。

世の中にはしあわせな人も、不幸な人もある……これはきわめて当たり前のことですね。けれども、私は、その時、フト思わざるを得なかったのです。いったい、生きるということは幸福なのか、それとも不幸なのか？　この青年とあの女性と、いったいどちらが人間の真実な姿なのだろうか？　と。

そして私は、その時、さきほどあの婦人と対座していた時のことを考えました。ゴチック聖堂の神秘に心打たれたこの女性、これも神のみ摂理が私のもとに導き給うた一つの魂ならばと思

い、何とかして、心に触れあうものをお互いに感じたいものと何度か努力をして見ましたが、その度毎に、私の心は喜びにはち切れそうな彼女の胸の壁にぶつかってむなしくはじき返されるのでした。結局、一時間余りの対座で、私の心に残されたもの、それは、何かそらぞらしいもの、ただ、それだけであったのです。けれど、今、人生の淋しさに泣くこの青年には、私は何かしらしみじみとしたもの、何か溶け合うものを感ずるのです。これは、そもそもどういうことなのでしょうか？

あの女流舞踊家は「生きることはすばらしいことですね。」と繰り返していました。その瞳は喜びに輝いていました。けれど、私は、その瞳の中に、聰明な人生の英知ではなく、子供のような無知の色を見たのです。今の刹那の喜びに満足するものの、浅い知恵の色を見たのです。健康で、若くて、美貌で、才能に恵まれて、人々の称讃を浴びて……などなど、そういうときに「生きることはうれしいことだ。」とはだれでもが言えるのです。けれども同じ女性が、もう二十年も経って、若さを失くし、人々の浮雲のような称讃から忘れ去られるとき、その時にも、なお彼女は、「生きることはうれしい。」と言うでしょうか？　いや、彼女はまだその時を考えてはいないのです。あるいは、フトそれに気づくことがあったにしても、彼女は、恐らく、その忌わしいおのが影に急いで目を閉じるのでしょう。そして、その代わりにつかのまの今の自分の姿をしいて大きく見つめながら「ああ生きることはしあわせだ」と言うのです。

私が彼女との対談に、何かそらぞらしいものを感じたと思ったのは、そこだったのですね。人間の真実の姿に目を閉じて、人生の仮の姿に歓喜の声をあげる……それは「架空の喜び」に過ぎません。少し意地の悪い言い方をするならば、それは、一つの「嘘」なのです。

それでは皆様、人間の真実の姿とはいったい何でしょう。もしも人間のこの地上の姿だけを見つめるなら、私は人間のひとりひとりの中に宿命のようにこびりついている一つの暗い不吉な影を認めざるを得ないのです。その影、それは「孤独」ということです。きのうまで、ヤンヤのかっさいを博した横綱が、その力の限界に来たことを思い知らされたときの、悄然とした孤独の影を、私は涙なしには見ることができませんでした。はなやかな脚光を浴びる人々を取り囲むファンの群の、きびしい冷たさは、生きることの真実の姿を暴露しています。世の中には、親子、夫婦、友人など、人と人とを結びつける堅い絆があるように見えます。けれども、やがて、年老いた時、改めて、私たちの周囲を眺めるなら、あの強いと見えた絆が一つ一つ次から次へと断ち切られていくのを、じっと涙をのんで見送らねばならないでしょう。何ものも、いかなる権力も富も愛情も、私たちの絆の断ち切られるのを防ぐことはできません。そして、ついに、臨終の床に最後の苦しみをもだえるのは、あなたひとり、それは残酷なまでに徹底的にあなたただひとりの

世界なのです。諸国遍歴の巡礼者が背中にかけたすげ笠に、たとえ同行ふたりと書いてありましても、しょせん、この世は私たちにとって、ひとりひとりの孤独の旅路……それが人生の真実の姿なのです。

それでは、生きることは悲しいこと、不幸なことなのでしょうか。ただの悲哀、ただの寂寞なのでしょうか。

いいえ、とんでもないと私は申し上げたいのです。考えてもごらんなさい。今から十数年、あるいは数十年前、私たちはどこにも存在していませんでした。全くの絶対的な無であったのです。思っただけでもゾッとするような虚無の深淵……私は、いや私はなどというその私も存在していなかったのですが……永久に虚無であってよかったのです。だのに、フト物心づいた時、私はこの世に人間としての生を得ていました。虚無の深淵から存在の光明の中に置かれたのです。「私」というこの全人格をもって私は存在を始めたのです。越えるはずのなかった虚無と存在との間の無限の深淵を乗り越えたのです。これが無意味なことでしょうか？　これがただ淋しさや悲哀などであってよいものでしょうか？

皆様、今、ソッとあなたの胸に手をおいてください。そして、あなたの生命の息吹きの中にあなたご自身の存在を確かめてください。絶え間なく脈打つ心臓の鼓動が……そして呼吸する度にふくらむあなたの胸が、何かをあなたにささやいてはいませんか？　いや、それはささやくなどというなまやさしいものではありません。叫んでいるのです。絶叫しているのです。あなたの注意を促して、あなたの反省を求めて……「早く早く、私が未だ鼓動し続けている間に……」「どうぞ、私が未だ呼吸し続けているうちに、早く見つけてください。この生命の意義を……生きるということの真の意味を……」と叫びながら、それは、あなた全体をゆすぶっているのです。

皆様、生きるということのこの世の姿は、確かにきびしく淋しいものですね。孤独に生きて、やがて年老い、そして、死に絶えるこのいのち……けれども、この真実の姿に目を閉じてはいけないのです。大きく目を見開いて、それをしっかりと凝視しましょう。ほんとうの、心の底から勃然として湧き起こって来る生命の歓喜は、その真実の姿の凝視から生まれてくるものなのです。この世の悲しみに泣くその涙を通して獲得する喜びこそがほんとうの生きる生命の法悦なのです。貧しかろうと、病んでいようと、人に侮られようと、年老いようと、私は、なお目をうるませて叫びたい、「生きるということはなんてすばらしいことなのでしょう」と。

静かな夜です。皆様、この世のいのちは、生きるに値いするものだと理解しようとは、お思いになりませんか。

では、また来週のこの日まで。おやすみなさい。

第六話　考える葦

もう一羽、もう一羽だけと思ったのがまちがいのもとでした。私の腰には予想以上の獲物がすでにぶらさがっていましたのに、欲というものは恐ろしいもので、目の前に飛び立った一羽の山鳩の羽ばたきの音を耳にした途端、矢も盾もたまらなくなったのです。銃を構えて、そっと、やぶの茂みに一歩踏み込みました。獲物を捕えれば、すぐにでも元の道にとって返すことはぞうさもないことでした。無意識の中にも、元の道へ出る方角だけは頭の中で確保しているつもりでした。だが、それから、ものの二十分も、一羽の山鳩を追っかけて、すっかり夢中になり、とうとう最後に獲物を仕留めて、私のほおに浮かんだ快心の微笑は、しかし次の瞬間にヒヤリと凍りついてしまいました。私は忙しく、頭の中で、道からそれてからの私の行動を思いめぐらしてみました。わからなくなったのです。全然見当がつかないし、何の目印もありません。が、ボンヤリしていてもしようのないこと、私は意を決して、身の丈ほどもある笹籔をかき分け、一直線に進んで行きました。やぶは深くなるばかりです。もしかして反対の方角だったら……私はゾッとし

て、もう一度、さきほど獲物を捕えた所に戻ろうとしましたが、今度は、それさえもわからなくなりました。私はあせりました。すでに日没が迫っていました。こんな所で真暗な夜がやって来たら……そして性の悪い獣にでも襲われたら……犬も連れない気軽なひとり狩の軽卒が悔まれましたが、今更どうなるものでもありません。次第次第に暮れ行く山の鬼気に身震いし、次から次へと浮かぶ妄想を払いのけながら、必死になって、笹籔の迷路をはいまわりました。どうしよう……不安と疲労とで、心臓が早鐘のように打っている私の胸をかきむしり、私は、オーイと叫んでみました。が、それに答えるものは、四方から響き返ってくる無気味な山彦ばかり……暗い絶望が、私を不安のドン底につき落としました……と、皆様、いかにも深刻に描写してみましたが、実は、山登りがあまり好きでなくまだ一度も山路にふみ迷った覚えもなければ、銃で雀一羽殺したこともない私です。幸いにも、そんな経験はないのですが、もし、そんなことがあれば、どのような気持ちがするだろうと、ちょっと想像をたくましくしてみたに過ぎません。が、想像しただけでも、ゾッとするような無気味さを感じますね。

ところで、皆様は、そのような経験をお持ちでしょうか？　道に迷ったなどということは、あまり自慢にならぬことですから、経験がなければそれに越したことはありませんが、しかし、狩をする獲物は必ずしもキジや山鳩ばかりとは限らないようです。

もう毎日の暮らしを立てるには充分過ぎるほど持っていながら、も少し、もう少しもうけたいと夢中になって狂奔するお金もうけというものも、真に魅力のある獲物ではないでしょうか？

世の中には事業家といわれる人がたくさんにいます。一つ、また一つと、事業を拡張していくおもしろさ。もちろん、これらの事業そのものは世のため、人のために役立っていましょうが、その人々の心を引きつけるのは、世のため、人のためになっているということよりは、人に先んじて機敏に立ち回り、腕のさえ、頭のさえを見せて、もののみごとに事業の手を押し広げて行く男らしい壮快さだけなのですね。そのためには、義理や人情をあまり考えてはいけないようです。ただ、自分の心を夢中にさせる事業欲、これもりっぱな獲物だとお思いになりませんか？

それから、これは少し言いがたいことですがそういう人々にとって「女」というものも、追いかけるに値する獲物だと言えば、少し言い過ぎでしょうか？

とにかく、獲物はたくさんにあります。そして前後を顧みず、義理も人情も踏みにじって、ただ獲物を追いまわす醍醐味……けれど、皆様、一度立ち止まってください。そして、あなたの周囲を見まわしてください。あなたは、今、この貴重な人生という旅路、山路のどこにおられるのでしょうか？　あなたの人生の行手は、いいえ、二度と再び、やり直しのきかないあなたの貴重

な人生の目的は、いったい何だったのでしょうか？　あなたの人生もようやく暮れはじめようとしているきょうこのごろです。こうして、次から次へと暗雲に富や快楽を追いかけて、そして、それが、それで、どうなるというのか？　あなたは考えたことがおありでしょうか？

それとも、そんなことを考える暇はなかった。ちょうど、あの石川達三の小説の主人公、西村某という男のように、そこはかとなく学校を出て、何ということもなく結婚生活に入り、やがてひとりの子供が生まれると、その妻と子供に追い立てられるように毎日毎日弁当をもって会社に出かけ、地味な平凡な人柄が買われたのか年と共に地位も昇っていったものの、フト気がつくと、もう五十の年に手が届こうとしていました。何の波瀾もなく、何の冒険もなく、そうかといって、心の浮き立つような激しい恋愛の思い出もなく、夢のように過ぎて行ったおのが青春が今更のようにくやしく、まだ情熱の炎が全く消え失せてしまわぬうちに、せめて今生の思い出に激しく美しい恋愛に身も心も焦してみたいものと、フト知り初めた十八才の少女の肉体に今まで生きて来た平凡な人生に対する最後の抵抗を試みますが、それが拒まれた瞬間、かき立てた情熱の炎も消え失せるのを感じ、夜具に顔を埋めて、サメザメと人生の悲哀に泣く四十八才の男……のように、今まで生きて来た過去の生命の無意味さに、今更のように愕然となさることはありませんか？

皆様、フランスの哲人パスカルは、あのパンセの中で「人間とは考える葦である。」と申しています。川辺に生い茂り、風のまにまにそよぐ葦草……確かに人間は外目にはみじめな一本の葦のような存在でありますが、人間は、しかし、人間をただの葦から隔てるものを……いいえ、それどころか他のいかなる存在……そうです、どんなに精巧無比な機械からも人間を隔てるものを……言い換えれば、人間にしかない独自の偉大さを持っているのです。それは「考える」という力であります。人間は考えます。考えるからこそ私たちは人間なのであり、そこに、人間の、最も人間らしい生命の営みがあるのでしょう。

こう言いますと、皆様はきっと、「もちろん私たちは考えているさ。商売一つにしたって考えないでできるものじゃない。ましていわんや知的な仕事、学校の教師、医者、技術家、どれを取っても考えないでできる仕事など一つもあるわけはないではないか。」と、おっしゃるかもしれませんね。もちろん、それに違いありませんが、パスカルが、人間を、考える葦だと言ったときの「考える」とは、そういう意味の考えではなかったのでした。

ある哲学者は、「人間とは『なぜ？』と問う動物である。」と申しました。子供がようやく物心つくと、母の背にいながら、すでに「あれは何？」「どうしてなの？」「それからどうなるの？」とやつぎばやに質問を浴びせて来ますね。この、執拗な「なぜ？」を繰り返しながら、物事の原

因とその目的とを追求していくところに、人間理知の輝きがあり、止まることを知らぬ科学の進歩があるのです。けれど、次から次へと奔流のように出て来る「なぜ?」という質問の中に、一番重要な、一番根本的なものがあります。このたった一つの「なぜ?」に解答を与えないなら、たとえ全宇宙の神秘を知り尽くしても何の益にも立たぬほど、深刻な重要なことなのです。そして、このことは、皆様のひとりひとりが必ずや、いつか一度は自分自身に「なぜ?」と問いかけてごらんになったに違いないほど、必然的なものなのです。その一つの問題というのは、「私はなぜ生きているのか?」という問題であります。この「なぜ?」にはきわめて深い問題が含まれています。毎日生きていますが、生きていったい、どうなるのでしょうか? いつまでもこの世に生きておられないことは確かですし、来る日も来る日も、あくせくと働いているうちにも、日に日に年老いて来ます。だが、いったい、何のために?……ああ皆様、これこそパスカルが言った「考える」ということ、川辺の葦のような私たち人間のひとりひとりが考えねばならぬ問題なのです。

そんなめんどうなことは、よほどの暇人(ひまじん)か、それとも哲学者にまかせておけばよいと言ってはいけないのです。それは、だれの問題でもない、あなた自身の問題、私たちのひとりひとりの切実な問題なのですから。

人生という旅路に、自分がどこから来てどこへ行くのかも知らぬ暗黒の山路をさまよいつつ、一度しか与えられぬ私たちの、人生という貴重な存在を無意味に浪費したくないなら、「なぜ生きているのか?」というこの「なぜ?」をゆるがせにしてはいけないのです。

皆様、早くもきょうの一日が終わろうとしています。生きることの苦しさが、私たちから、物事を深く考えるという力を根こそぎ奪い去ってしまいます。何も考えないで、ただ、あくせくと、生命の糧を追う生活、きのうもきょうも、そしてあしたも同じような日が続くことでしょう。考える力も失せて、ただ生活の惰性に押し流されて生きる生命が続きます。けれど、皆様、考えるということ、静かに、物思うということは必要なことなのです。勇気を出しましょう。そして、勇敢に、思い切って、この「なぜ?」を私たち自身の心に問いかけましょう。解答が与えられるまで忍耐強くこの一語を、胸の奥にささやき続けてまいりましょう。

「なぜ? なぜ、私たちは生きているのか?」と。

では皆様、おやすみなさい。

第七話　しあわせであることの義務

皆様、私は今夜のお話を、こんなたとえ話から初めてみたいと思います。

私の家にあるたった一つの時計がこわれてしまって、さっぱり時間がわからず、不便でしかたがないので、思い切って新しい時計を一つ買おうと決心しました。そこで、無けなしの財布の底をはたいて有金をかき集め、時計屋へと出かけました。いろいろ物色しておりますうちにフト目についたのが、りっぱな豪華な置時計です。ああ、あんな時計が買えたらなあ——と思いながら冷やかし半分に値段を聞いてみました。ところが、案に相違して驚くほど安いのです。私の用意したお金で買えそうな値段です。これは掘り出し物だわい——と喜んで、その時計を買って帰りました。さて帰宅して、早速ねじを巻こうと手にとって巻きはじめましたところが、これはしたり、いくら巻いても巻いてもねじがかからないのです。私はあわてて、それを小脇にかかえ込み、さきほどの時計屋にとってかえし、それを店の主人につきつけて申しました。

「君、これは、こわれているじゃないか。いくら巻いてもねじがかからないよ。」

ところが私がも一度驚いたことには、店の主人はいとも平然として

「ああ、その時計は動かないんです。動かぬ時計なんです。だけど、りっぱに使い途はありますよ。たとえば、お宅の床の間かマントルピースの上に置かれたら、大した飾物になると思いませんか？　また風の強い時など書類の上にデンとすえたらりっぱな文鎮になるじゃありませんか。」

私はしばらくあっけにとられて主人の顔を見つめ、それから憤然としてこう叫んだことでした。

「ばかばかしい。君、時計は時間を示すためにあるんだろ。その時計が時間を示さないなら、そんなものは一文の値打ちもないじゃないか。」

皆様、きっと皆様だって、そうおっしゃったに違いありませんね。確かに時計は時間を示すためのもの、それが時計の目的なのですからね。その目的を果たさないなら一文の値打ちもありません。

ところで皆様、これは時計ばかりとは限らないので、すべて物の値打ちというものは、その物が、その作られた目的にどれほどりっぱにかなっているかいなかによって定まるもの、ですから、たとえば、夜店を冷やかしていてフト目についたニッケル製の安っぽい古ぼけた時計でも、

それが一日に一分と違わないで時間を示してくれるなら、それこそ、私にとっては又とない掘り出し物、時計がないので時間がわからなくて困っていた私はそれで大助かりです。それが、どんなに安っぽい、古ぼけたものであっても、時計としては完全なものです。その目的をりっぱに果たしているのですからね。

さて、皆様、今しばらくご一緒に考えてみましょう。私たちのこの世のいのちには、二つの面があります。一つは生活の形式、あるいは形とでも申しましょうか、つまり、何をして生きているかということ、も一度言い換えれば、どんな職業に、あるいはどんな地位についているかということです。そして、も一つの面というのは、生活の態度とでも言えるもの、つまり、その職業をどのような心構えで、どのような目当て、目的で果たしつつあるかということです。

この二つのうち、生活の形式（かたち）、つまり、私たちが、どのような職業についているかということは、あまり重大なことではないのです。世の中の職業というものは、これを経済的な立場から見るなら、需要と供給とのバランスをとるための手段だと言えましょう。すなわち、社会の求めに応じて必要なものを生産し、あるいは供給すると、その供給されたものがお金に換算されて報われ、今度は、供給者がそのお金をもって、自分に必要なものを求める……それが経済の原則であり、その原則の上に、実に多種多様な職業が生まれて来たわけです。ですから、それが、正しい

ものである限り、というのは、正当な法律によって禁じられたもの、あるいは、風俗や道義心をかき乱して社会に害悪を流すものでない限り、すべての職業はすべて正しくすべて聖く、すべて必要なものであって、その間に、どれがりっぱだとか、どれがつまらないなどという区別はないはずであります。近来、ともすると誤った資本主義的世界観から、職業の価値を、ひいては人間そのものの値打ちを、その収入の多い少いによって計ろうとする傾向が強いようですが、これはとんでもない価値の転倒であると言わねばなりません。

勤労者は、堂々と自分の勤労を供給し、雇主はおのが需要に応じて勤労が供給されたからこそ事業が成り立つのであるという感謝をこめて、その勤労に対しては、勤労者が、少くとも人間らしい誇りとゆとりとを持った生活を営み得るに足るだけのものを正当に支払わねばなりません。そこに、上下貴賤の差別があってはいけないはずなのです。

一国には一度に一人の首相があればよいので、国民全部が首相になる必要もなければ、また、日本全国の便所が全部水洗式にならぬ限り、だれかが便所をくみ取らねばならないのです。総理大臣と便所のくみ取り屋、真に妙な取り合わせになりましたが、二つながらに、全く同等に、社会に必要、かつ有益な、従ってりっぱな職業なのであります。このように、職業そのものに、上下貴賤の区別がないとすれば、私たちがこの世において、どのような職業を営み、あるいはどの

ような地位につくかということは、大した問題ではなくなるわけです。ですから、人間に、人間としての価値を与えるものは、さきほど申し上げた二つの面の一つとしての、生活の形式の方ではないのでありまして、私たちが、生きる生活を通じて、私たちの人間そのものに価値をもたらすものは、も一つの面、すなわち生活の態度なのでありましょう。つまり、どのような心構え、あるいは目的をもって、その職業を果たしつつあるかということなのでしょうね。

たとえば、一国の首相となった人が、首相としてりっぱに勤め上げて国家を盤石の基礎の上に置いたとしましょう。しかし、もしも、仮にその人が、ただ人々の賞讃の声を求め、おのが名前を歴史に残そうという名誉心や、傲岸な高ぶった思いに駆られて生きたのだとすれば、その功名も手柄も、実は、その人の人間形成には何の役にも立っていません。その生活の態度が、人間の正しい目的を追求していなかったのですから、ちょうど、さきほどの、外見は実に豪華でありながら動かない時計と、何の異なるところもないのです。

会社に働く人々で、もし、ただ上役の気に入られようという野心だけで、その仕事に従事するなら、たとえ、希望通り上役の気に入られて高い地位についたとしても、それは主人にほめてもらいたいばっかりに演じて見せる猿芝居とどこが違うでしょうか？　もしもまた、ただ少しでも給料が上がるように、との心遣いだけで忠勤を励み、首になって路頭に迷わぬようにとの心配だけで仕事に携わるなら、エサを求め、鞭を恐れて車引く牛馬の類とどこが異なるでしょう？　それは人間存在の崇高な目的とはあまりにもかけ離れたみじめな姿ではないでしょうか？　一国の宰相の印綬を帯び、大学者となり、大会社の統師となって、栄耀栄華と人々の喝采をほしいままにしようとも、人間としての存在の目的にかなっていないなら、それは動かぬ時計と何ら選ぶところもなく、うわべはいかに豪華に輝こうとも、その人のいのちは、一文の値打ちもないのです。ですが、それに反して、貧しい裏長屋に、人々から忘れられて黙々と車を引きつつ、だれにも知られずにこの世のいのちを終える一介のバタ屋さんのいのちでも、もし、その生きる一日一日が人間の目的にピタリと瞳をすえたゆるがぬ一日一日のいのちであったなら、その人生は完全な人生であったといえましょう。

では、皆様、その人生の崇高な目的とはいったい、何なのでしょうか？　と言っても、これは、そんなにむつかしい問題ではないと私は思うんです。全人類すべてに与えられた目的なのだとすると、だれでもが知らねばならぬことなのですから。従って、どんな子供でも老人でも容易に知ることのできるものであるはず、いいえ、それは、実は人間だれでもがよく知っていることなのです。

私たちは今更らしく口にこそ出して言わないかもしれませんが、実は無意識の中に、ちょうど

鉄が磁石に引かれるように、私たち人間のすべてが、この人間存在の目的に向かって宿命的に引きつけられているのです。

いったい、それは？　そう、それは「しあわせでありたい！」という願いであります。生まれ落ちたばかりの赤ん坊が、オギャーと泣く呱々の声こそ、その生涯かけて「しあわせ」を探求する遍歴の旅への門出の一声なのだと申しましょうか。

こう申しますと、皆様の中に、きっと、「なんだ、くだらない。自分の幸福を求めるなんて、それこそ利己的な願いだ。崇高な目的でも何でもありはしないじゃないか。」

と、おっしゃる人があるかもしれません。ですが、そうではないのです。幸福とは、満ち充ちた、力強い充足のいのちのことです。ちょうど、水さしは水を湛えるために、花瓶は花をいけるためにあるのと同様、私たちの人生は、満ち足りた充足したいのちを営むための存在なのでありまして、私たちは、自分の生命を力強く充足せしめ、満ち足らしめて行かねばならぬ義務があるのです。言い換えたなら、私たちのひとりひとりは必ずしあわせになれるはずでありますし、またしあわせにならねばならないのです。しかも、それは遠い将来のこと、自分たちの子孫の時代のことを考えて私たちが、その人柱になるというようなことではなく、きょう、今、現に、あるがままの環境の中で、私はしあわせになれるはずですし、またしあわせでなければならないということなのです。

私はしあわせでなんかなくてもいい……と言う人があるなら、その人は人間を廃業せねばなりません。なぜなら、自分の正しい幸福を追求することをやめる人、すなわち、人間としての充足を求めず空虚ないのちを生きる人は、全人類の幸福のじゃまになるからです。

皆様はこんな話をご存じでしょうか？　昔イタリーにミカエル・コスタという有名なオーケストラの指揮者がおりました。演奏会を間近に控えて、二百人余りの大楽団を集めて練習に余念がありませんでした。いろいろな種類の楽器群が混然と溶け合って美しいハーモニーを築き上げているとき、ひとりのピッコロ吹きが、ピッコロというのは笛の一種で楽器の中で一番小さいものなのですが、一本のピッコロ位と油断してちょっと、手を休めました。と、その途端、ミカエル・コスタの大きな声が響きました、「中止！　ピッコロは？　ピッコロは何をしてるんだ？」と。一本の小さなピッコロでも、存分に鳴り響いていなければ、その大楽団の作り出す壮大なハーモニーはくずれるのです。

私たち全人類は、各種各様な生活の形式に生きながら、種々雑多な環境の中にありながら、そのひとりひとりがみずから充ち足りたいのちを生き抜くとき、はじめて、全人類のいのちが、すばらしいハーモニーを響かせるのです。ですから全人類が調和のとれた平和な幸福な世界を作り

上げるためには、私たちのひとりひとりが、しあわせでなければならないのです。私たちの中のたったひとりの人間でも、その生きるいのちが、空虚なから回りをしてはいけないのです。

ああ、満ち足りた充足のいのちの営み！　よくぞ生まれて来たと、自分のいのちを祝福するような幸福感！　皆様、しあわせはどこにあるのでしょうか？

しあわせでありたい！　切実な思いをこめて、こう自分自身にささやいてみましょう。今まで気がつかなかったような気がしますのに、実は私の心の奥底では、あたかも飢え渇くように、この一つのものを求め、それに憧れ、それに引かれていたことに、今更のように、驚かされるのではないでしょうか？

チルチルとミチルの兄妹は、青い鳥を探し求めて、思い出の国、希望の国をさすらいました。私たちもこれから、しあわせの青い鳥を求めて、思索の旅に出ることにいたしましょう。と言っても、それは、そんなに遠く、私たちの外の世界をさまようことではありません。ただ、私たちの生きているこのいのちにからみつく、さまざまな雑念の笹籔をかき分けながら、このいのちの一番奥底から湧き出て来る、静かな、しかしやむことのない一つのささやきを聞き分けたいという心の旅路です。ただ、謙虚に、真剣に「しあわせはどこに？」と、私たちの探求の歩みを続けたいものですね。

では皆様、また来週のこの時間に！

第八話　守銭奴のなげき

八月十八日号のある週刊雑誌に「夏休みのない青春――金につかれた当代学生気質」と題して、学資を得るための学生アルバイトの実態が、現地ルポの形で報告されていましたが、その中に、こんな記事がありました。面白いので原文のまま読んでみましょう。

……関西の名門K学院に学んでいるT君（二三才）は、ジャズ歌手である妹の、パトロンから十五万円を借り出し、株に手を出して大いに当てた。なんでも思惑が当たって、半年足らずで四十数万円になったそうである。すると、今まで、事業の失敗で、学費も出してくれず、勝手に学校へ行きなはれと言っていた両親の目の色が変わった。

父親がまず、息子の顔色を気にしながら、

「利子をつけるさかい、十万ばかり借してもらえんかいな。」

と申し出たというのである。T君は即座に

「あかん。絶対にあかん。コレはな妹の手を通じて借りてきた金や。日頃は薄情なことを言うと

いて、金がある時ばかり、なんや、その態度。ボクはな、この金で、仲のいいおなごと九州くんだりまで旅をして、残りは滞納している授業料にするんやぜ。」

と言ったという。さすがに息子のこの言葉は生活力を失った親父の胸には痛く響いたらしい。激怒して、聞くに耐えない罵声を浴びせているおやじに向かい、T君は冷静に、つづけてこう言った。

「それで……父ちゃん、利息って、なんぼつけるんや……。」

もはや、この親子には救いがないようである……。

以上がその原文でありますが、なるほど、この親子の浅ましい姿には、救いようのないみじめさがあるようですね。お金は仲違いの元とはよく言われますが、金ゆえに親子の縁を切り、親と子が互いに憎しみ合って生きるという愚かな姿も、しかし現代ではあまり珍しいことでもなくなったようです。黄金の魔性に魅せられて哀れな末路を辿る人たちのなんと多いことでしょう。収賄議員や汚職官吏、金庫破りに、にせ金造り、はては金ゆえの選挙違反など、人間の欲望の醜さが、フツフツと音を立て臭気を放って沸り立っているようなこの世相です。……いったい、お金というものは人をしあわせにするんでしょうか？　それとも不幸にするものなのでしょうか？

お金ゆえに、人の世に醜い争いや憎しみの絶えないのを見ていますと、ああ、お金なんていうものが世の中になければよいのに……とフトそう思いたくもなりますね。

けれど、もちろん、お金は必要なものです。現在の世界の経済機構が根本から廃止されない限り、お金というものは私たちのいのちの手段なのですから、どうしてもなければならぬことは言うまでもありません。けれども、それでは、人間は、どれほど、お金を持っていればよいのでしょうか？　私はここで、一度はっきりとその標準を出してみたいと思います。

まず、結論から先に申し上げますと、人間が、人間としての、つまり人間らしい生命を生きるために充分なだけのお金がなければなりませんが、それ以上は、必要ではないばかりでなく、むしろ、人間を不幸にするものだということです。

では、人間らしい生命とは、どういうものでしょうか？　私は、これを二つに区別いたしましょう。

第一は、人間としての「ゆとり」を持った生活、第二は、人間としての「誇り」を持った生活と。

人間としての「ゆとり」を持った生活というのは、――人間には理性があり、従って、未来を考えて生きるものです。よく、江戸っ子は宵越しの金を持たぬなどと申しますが、現代のように

生活が複雑にせちがらくなって来ますと、宵越しの金、つまりあすへのたくわえなくしては人間は不安でたまらなくなります。この未来への備えの中には、まず住居が……全家族が健康に住むに足る住居が、たとえ自分のものでなくとも、いついつ追い立てをくうかもわからぬという心配なしに確保されていなければなりません。次に愛情の絆によって自分が扶養の義務を背負った全家族……年老いた両親や妻子を含む全家族の日々の食物と衣類とが充分に供され得なければならないのみならず、不測のできごと、たとえば、病気災害などのための充分の医療費と、存分に働いた後の静かな老後の生活の安定、それは、一家の支柱である自分が突然死亡するようなことがあっても後に残された愛する妻子が路頭に迷うことなく、安心して今後の生活の手段を講ずることができるための何がしかの資本が蓄積されていることが必要です。それらの富のたくわえが、たとえ自分の手でできなくとも、勤労を提供している会社なり、あるいは国家なりが、それを何らかの保険の形でもって保証してくれるなら、それは結局富のたくわえと同じものになることは言うまでもありません。これらの未来の保証が確保されたとき、はじめて人間は、人間としての「ゆとり」を持って、安心して生活することができるのです。

第二の人間としての「誇り」を持った生活とは――たとえ、今お話し申し上げたような未来への保証が与えられるとしても、それがために、朝早くから夜遅くまで馬車馬のように働き通し

て、夜帰宅して食事をすませると何をする気力もなく、ただ眠ることしか考えられぬような生活、また、一家の主婦にしましても、掃除、洗濯、食事の準備、子供の世話、繕物などに朝から晩まで追い立てられ、疲れ果てて寝床に入るという毎日毎日が続くようでは、人間らしい精神的な生活の誇りというものがありません。人間が動物と異なっているところは、その精神活動にあるのですから、週に一度、あるいはせめて月に一、二度家族揃って楽しく愛情に満ちた団欒の一日を取るとか、あるいは夜の静けさの中で、あるいは読書に、あるいは芸術の観賞に、一生を通じて教養を高めて行く心の喜びがなければ、人間の生活とはいえないでしょう。私は、そういう生活を人間としての「誇り」を持った生活というのです。

以上申し上げたような生活が実現するためには国の統治に当たる政府の強力なすぐれた政治力に待たねばなりませんが、しかし、それと同時に、国民ひとりひとりの自覚と誇りと努力とが、また絶対に必要なのです。生活を合理化して体力と時間の余裕を見つけることは、少しの工夫と熱意があれば、今すぐにでもできる人がたくさんおられると思うのですが、それを、少しお金が余れば、すぐに酒を飲み、競輪や勝負事にすってしまい、少し時間があるとパチンコ屋に走るという生活を繰り返していたのでは、いつまでたっても人間らしい生活はできるはずがありません。

けれど、私は今夜は、何も生活の合理化についてお話をするつもりではありません。人間らしい生活、人間としての「ゆとり」と「誇り」とを持った生活、これは、すべての人が望み、かつそれに向かって努力せねばならぬことであり、それがために必要な富の蓄積は、私たちの人生にとって必要なことだと言いたかったのでした。お金は、そのための手段なのですから。

ですから、人間らしい生活を営むために充分なお金があれば、もうそれでいいのではないでしょうか？　それ以上のお金が何のために必要なのでしょう。必要でないものを……それ以上の富を望むとき、実は、その時から、あなたの人生の不幸が始まるのです。

「お金の方は、もうこれでよい。後は、私の人生を深め、私のいのちを充足したものにして行くことだ。」

と生活の目標を、もっと高い所に置き代えるという、その潮時をしらないなら、欲望というものには限りがありません。欲は欲を生み、いつもイライラとしてねたみ深く、どこまでいっても満足することを知らない。……いつかお金というものが生命のための手段であることを忘れ、お金そのものが、あたかも人生の目的でもあるかのような錯覚に陥り、お金に仕え、お金に翻弄され、お金のどれいとなり下がるのです。お金もうけと聞けば目の色を変えて飛び出して行くくせに、自分の血肉を分けた兄弟の不幸には全く不感症になり、出すものは舌を出すのもいやだと

いう守銭奴……生きることのしみじみとした深い満ち足りた喜びとは、そんなところにあるものではありません。

皆様は、こんな話をご存じでしょうか？　ある貪欲なおじいさん、コッコッとお金をためては、それを小判に代え、壺に収めて床下にかくしておき、毎晩雨戸を閉めてから、コッソリそれを取り出してニコニコしながら数えるのでした。が寄る年波には勝てず、老衰して、きょう、あすのいのちとなったとき、おじいさんは何を思ったのか、お餅屋につきたての柔らかい餅をたくさんに注文しました。ポカポカと湯気を立てている注文のお餅が届けられると、おじいさんは、ピタリと雨戸を閉めて、閉じこもってしまいました。それっきり、二日経っても三日経っても雨戸が閉じられたままなので、近所の人が雨戸を押し破って踏み込んでみますと、どうでしょう。おじいさんは、小判を一枚ずつ、柔らかなお餅にくるんでは、それを丸飲みしようとしたのでしょうか、七つ目の餅が、小判もろとも、のどにつかえて死んでいたのでした。死んでも小判をこの世に残す気になれず、胃袋の中につめて、冥土まで持って行こうとしたのだそうです。

けれど、お金というものほど、薄情な友だちはありませんね。元気な時は、あんなに一生けんめい大事にしてやって、お金に仕えてやったのに、いざ死ぬ時が来ると、振り向いてもくれないのがお金というものです。

皆様、富の与える幸福の限界を悟りましょう。しあわせとは、満ち足りたいのちとは、私たちの死ぬときに、私たちに未練を持たせ、死んでも死に切れない執着で私たちをみじめに悶えさせるものではないはずなのです。

生きるためにある程度の富の蓄積は役に立ちます。けれども、富が人間の世界からすべての苦悩を消してくれるだろうなどと、富を、その力以上に買いかぶることをやめましょう。人間の苦悩はもっと深い傷跡です。その傷跡を癒すものは、もっともっと深いもの……そして、私たちのいのちが求めている「しあわせ」というものが、その傷跡の痛みをもおおい包むものだとすれば、ほんとうの「しあわせ」というものも、もっともっと深いものなのだろうと私は思うのです。

どうやら、夜もふけて参りました。では、皆様、お静かにおやすみなさい。

第九話　術策と金力で獲得したもの

Boys, be ambitions！　青年たちよ！　大志を抱け!!　これはもう皆様ご承知の通り、故クラーク博士が札幌農学校を去るに際して日本の青年たちに残した遺言であります。青年たちはアンビシオンを……すなわち大志を持たねばならぬ。洋々たる未来を目指し、どんな偉大な人間にでもなり得るその可能性を内に宿して、青年たちの胸は果てしない希望に大きくふくらんでいなければならぬ、との博士の言葉は、真に日本の青年たちにとって貴重な遺言でありました。

過去を持たぬ青年、未来に生きる青年には夢がなければなりません。現代の日本の青年たちの中からこそ将来の日本を背負って立ち、日本の国に栄光をもたらす人材が輩出するはずなのですから。もしも、青年から夢を除いたなら、青年らしい若さは影を消しましょう。夢は若さの誇りであり、同時に、未だ世の汚れを知らぬ純真な熱情の印でもあります。

けれども、悲しいことには、若い人たちが、学業を終えて世間に出て、段々と年をとると共に、この夢は一つまた一つと破れ去り、かつて希望に大きくふくらんだ胸はむざんにしぼんで行

くのです。

現実はそんなに甘いものではなかった。結局、安月給に甘んじて生涯下積みの人生を送るのが自分の宿命なのだとあきらめる人々は、希望を失うかわりに、せめて悪賢い処世術と金もうけの知恵を取り入れて平凡な市井人の生活に入るか、あるいは、親から譲られた田畑を黙々と耕す代償として、お酒を飲んで「憂」さを晴らす術を覚えます。

そういう人々の中にあって、自分だけはあくまで若き日の夢を実現して見せると気負う人たちは、自分自身にこう言い聞かせるでしょう。

「純真な熱情だけでは、この偽り多い世の中にただ生きて行くことさえむつかしい。困難な生存競争に打ち勝って、自分の夢を実現させるためには、策略と陰謀とが必要なのだ」と。そして、いわゆる「蛇のごとき賢さ」をもって着々とおのが地歩を築き上げて行きます。けれど、一つ一つ地歩を固めながら実現して行くという夢は、若き日の、あの燃え立った純真な情熱が描いた夢とは、およそ似ても似つかぬゆがめられた醜い姿に変わり果てています。

総選挙の、あの騒擾の中で、全国の有権者諸君の前に突如として出現する「お辞儀をする機械たち」……青年たちが若い胸をふくらませて、政治家たらんと志したとき、その中のだれが、このような姿を夢見たでしょうか？

しかしやむを得ないのでしょうね。政治家になるためには、心にもない公約をどなりたて、未だかつてだれにも見せたことのない愛想笑いをほおに浮かべ、したこともないお辞儀を百万べんも繰り返す……それが処世の術なのでしょうから。

代議士当選三回ともなると、ソロソロ大臣病という病気にとりつかれます。そして組閣の前夜には自選他選の大臣病患者が、ただでさえあわただしい夜を一層あわただしいものにすることでしょう。かくて終戦後、おびただしい数に上る大臣が製作され、あわただしく大臣の椅子に上り、また下りて行きました。夏の海のうたかたのように、名もとどめず実も残さず消えて行ったことでした。

私は、選挙の度に思うのですが、国会議員といえば国民がその代言を頼んで議政壇上に送るものなのですから、「有権者の皆様、どうぞどうぞ私にご同情くださいまして清き一票を！」と候補の方から有権者に頭を下げて頼むような候補者ばかりでなく、有権者の方から、「どうぞ私たちのためにお願いします。」と候補者にお百度踏んで出てもらうような、そういう選挙が、たまには広い日本のどこかであってよさそうに思うのですが、そういうあたり前な話を、あまり聞くことがないのは全く不思議……と皆様はお思いにはなりませんか？

これはまた少し話が脱線したようです。話を元に戻しましょう。こういうわけで、青年の純真

な夢は跡形もなく消え失せ、それが人生なのだという淋しいあきらめの一生を送るのが大部分なのでしょうが、ではいったい、なぜ、青年の夢は消えなければならない運命にあるのでしょうか？　私はこう考えるのです。

それは、クラーク博士の、「青年たちよ、大志を抱け！」との、あの「大志」という言葉の意味をはき違えているのではないか？　と。

たとえば、例を今お話しした政治家にとってみましょう。青年はまだ世の汚れに染まぬ清らかな目を開けて、現在の国のありさまを眺めます。その純真な瞳に映るものは、策謀とかけ引きとに終始する狡猾な処世術にたけた、いわゆるおとなの世界の矛盾です。よし、僕がおとなになったら……と青年の熱情は、そういう一切の社会悪や矛盾をこの世界から追放するすばらしい政治家になろうと決心します。それはりっぱな夢なので、この社会の矛盾を取り除くものがいつの日にか出現するとすれば、それは、こういう青年らしい熱情の持ち主の中からこそ出るはずだからです。けれども、青年の、その大志の中には、社会に奉仕しようという没我的な熱情と共に、その当然の報いとして、世間の賞讃と輝かしい脚光を浴びた自分自身の姿もある……と言えば、そんなことは当たり前だとおっしゃるでしょうか？　けれど、問題はそこにあるのです。太閤秀吉の処世訓であったと思いますが、自分がぞうり取りであった時には完全なぞうり取りになる。足

軽の時には、だれもまねのできないようなすぐれた足軽になる……というような言葉がありますように、現在の自分の境遇の中で、最大限に自分を生かしつつ、自分の人間としての価値を内面から高め深めて行くことを忘れて、ただ、外面だけにでき上がった権力の座に憧れるとき、そのときから、青年の夢はくずれ始めるのです。自分自身にそれだけの価値もないのに、高い地位と人々の賞讃を追求するとき、どうしてもそこには、策謀とかけ引きが必要になりましょう。かつての青年たちの中で、術策に長けたものが、外面的には、若き日の夢を実現しているように見えますが、しかし、ふと気がつくとき、自分がかつて、若き日の熱情をもって、あれほど憎みきらった、あのおとなのエゴイズムの世界に自分自身が跳梁しているみじめな姿を発見するでしょう。おとなの世界は依然として醜い権力争いの場であり、そして、今は、自分もその醜い争いの渦中に巻き込まれているのです。若き日の夢に政治家たらんと志した、かつての青年が、そういう姿で、ついに憧れの議政壇上に立ったとき「ああ、私はついに若き日の夢を実現した。」などとは、おこがましくも言ってほしくはありません。だれも、君を尊敬してはいないのです。国民が君の前に頭を下げるのは、君が偉大であるからではなく、君の持つ権力の前に、ぬかずくのです。いつか君が、その権力の座を追われるとき、国民は君の名も覚えてはいないでしょう。

皆様、このことは、もちろんただ政治家ばかりではなく、あらゆる地位、あらゆる権力にも当てはまるでしょう。自分自身の内面から高められた人間の価値に与えられた地位ではなく、ただ術策と金の威力で獲得した地位は、また同じように、他人の策謀と金の力で奪い去られることができるものとさとらねばならないはずであり、その自覚と不安とにおびえ、せっかく得た地位を奪われたくないと、更に策謀を弄することになり、醜い権力争いはますますその醜さを加えて行くことになる……皆様、生きることの「しあわせ」とは……満ち足りた生命の喜びとは、そんなものではありません、などと言う必要もないでしょうね。権力、地位、名声、うたかたのような名誉を求める生活は、私たちの人の世の命を更に更にゆがんだふしあわせな世界にするだけなのだと見極めることは、そうむつかしいことではないでしょうから。

一八一〇年でしたか、ナポレオンが夜陰に乗じてひそかにエルバ島を脱け出して、フランスに進軍して来た時の模様をしるしたフランスの新聞ル・モニトールの記事が、一つのエピソードとして伝えられています。

最初は「食人鬼、ひそかにその巣窟を脱出せり」と、その恐怖を伝えたル・モニトール紙は、数日後には、ようやくナポレオンを人間扱いにして「暴君、リヨンを通過、パリを去ること六〇里の地点に進出」と、その口調を変えた後、今度は暴君が、本名のボナパルトとなって「ボナパ

ルト急速に前進を続けつつあり」。次に、いよいよパリ入城が確実となるや、ガラリと口調が変わって「ナポレオン、フォンテーヌブローにご到着」ということになりましたが、とうとう「皇帝陛下には忠実なる臣下を従え、昨日、チュイルリーに入御遊ばされた」ことになったという話です。

が、その皇帝陛下も、モスコー攻略で一敗地にまみれ、フランス国民からも見棄てられてセントヘレナに孤独な生涯を閉じたことはご承知の通りでありまして、これ以上駄足をつけ加える必要もないと思います。

ただお金もうけ、お金もうけと、必要以上の富を追いかけて朝から晩まで狂奔しながら、いっぱしの大事業家とうぬぼれている人々の生命が、その内面では、カラカラと渇き切ったうつろな響きを上げて空回りしているのと同様に、人間としての内面的な値打ちもなしに権力の座に憧れる人々の姿もまた、道化た猿芝居にも似て、私にはみじめなものに見えるのです。きのうはデパート、きょうはオペラと、孔雀のように美しく着飾った貴婦人の傲慢にふくれ上がった胸の中の、空胴を吹き抜ける冷たい風の音が私には聞こえるような気がするのです。

皆様、私たちが見い出さねばならぬ「しあわせ」という青い鳥は、富や権力や名声の中にはいないのです。けれど皆様、私たちのひとり残らずが、しあわせを求めるべく生まれながらに宿命づけられているということが真実なら……私たちすべての人間が、この生命の奥底に、どうしても打ち消すことのできない「しあわせへの憧れ」が根強く宿っているということがほんとうなら……どこかに、そう、どこかに、私たちのいのちを満たす「しあわせ」があるはずなのです。幸福の青い鳥を求めて、今しばし、心の遍歴を続けることにいたしましょう。

今夜は、どうやら、時間が来たようです。では、皆様、また来週のこの時間に。それまでどうぞ、ごきげんよう。さようなら。

第十話　性の解放のもたらすもの

みちのくの夏もどうやら終わりを告げ、一足一足近づいて来る秋の気配を感じるころになりました。ラジオをお聞きの皆様も、夏中のいろいろなプランを終え、今は改まった気持ちで毎日のお仕事にお励みのことと思います。今は少し肥り過ぎて暑さざらいの私ですが、それでも夏が巡り来る度毎に、若き日のわが家の夏の楽しい思い出が次から次へと浮かび出て、よい思い出を持ったこの身のしあわせがしみじみと感謝されるのです。

けれども、このごろの若い人たちは……となにも年寄りらしく愚痴るわけではありませんが、このごろの若い人たち、もちろん、若い人たちと言ってもその中のごくわずかな特殊な人たちでありますが、夏が来る度毎に、その一部の若い人たちの無軌道振りが、社会面をにぎわわすのが戦後の通例になったようです。嘆かわしいことだ……などと私は道学者振りはいたしません。むしろ、そういう人たちの、何か考えの足りなさ……それも若い人たちの責任というより、しっかりと自分たちの心を引きつけ、強力に導いてくれるものがないばっかりに、何をどうすればよい

のかわからなくなって、正しい軌道をはずれて行く、その青年たちの姿に……そうです、しかも、彼らが真剣であればあるだけ、私は、そういう若い人たちの無思慮な姿に、何かおとなである私自身が鞭打たれてでもいるような責任を感ずるのです。

何でしたか、最近の週刊雑誌にも「驚くべき十代の桃色遊戯」と題してリポート記事が出ていましたが、私はそれを読んで、その主人公の少年たちにではなく、全く別なものに、憤りを感じました。

戦後、忠君愛国の思想のよりどころを失った日本国民の前に、高々と、新しい道徳として、性の解放を叫んだのはいったい、だれでありましたか？　一部の愚かな文芸家や、それに追従する評論家たち、それがジャーナリズムの背景に支えられて「今まで不当に抑圧された性は、今や解放された」と叫んだのを日本国民はよもや忘れはしないでしょう。そして、米軍の監督のもとに、すべての検閲は廃止され、みだらな裸体雑誌や煽情的な映画などが市場にはんらんし始めました。それが新しい道徳というものならば、少年少女の桃色遊戯こそは、新しい道徳の黎明を告げる希望の鐘の響きにほかならないはず、だれがそれを無軌道呼ばわりできるでしょうか？

学生補導係に注意された少年たちが「僕たちは好きな者と、勝手に好きなことをやっているのだ。おとながやっているのに、なぜ僕たちだけが悪いのか？」と逆襲してくるというのも、実

は、もっともなことではないでしょうか？　会社の重役になって金ができたので、本妻のほかに二号や三号のお妾を持っている人、あるいは少しでもお金ができると酒屋に入り浸って妻や子供の世話さえろくにできないような人たちが、自分の子供の前に手をついて「おれはだめな人間なんだ。だが、せめてお前たちだけはおれのまねをせず、女狂いやアル中にならないでりっぱな人間になっておくれ。」

と、頭を下げ涙を流して告白するなら、話はわかります。が、そういう人たちが、このごろの若い者たちの無軌道振りにはあきれかえるなどとは言えた義理ではないはずです。若い人たちのそんな行為が無軌道なら、もう充分に分別のあるはずのおとなたち自身の行為の方が、もっともっと無軌道だと言わねばなりません。

どうも、これは少し言葉が過ぎたかもしれません。許してください。私は何も他人の行為を非難したり、罵倒したりするつもりではありませんでした。ただ、今日の日本に、何かが見失われている……それが見失われたばかりにいったい、何が人間を幸福にするものかわからなくなって、国民みんなが暗中模索しているのではないかということを、皆様と一緒に考えてみたかったのでした。

仏教では、色即ち是れ空なるものと申しまして、人間の持っているもろもろの欲望というものを、ただ、人間の迷いに過ぎぬと見ました。色は匂えど、散りぬるを……すべては無情の風の中にあきらめ去ろうとしました。もちろんこれは、深い東洋的な無の哲学の中に、深められ、浄められたりっぱな思想でありましたが、近代の強い人間性の自覚の前には、あまりにも消極的なものとして影を薄めて行ったようです。あるがままの人間性、そこには、否定したくともできない数々の欲望が……中でも食欲と性欲という二つのものが、歴然とおのが存在を主張しています。すべての人間に共通した欲望というものがあるという事実は、それが大自然の摂理によって与えられたものであるという事を意味しますので、これらの欲望は必要なもの、有意義なものであるはずです。私はこれらの欲望が正しいものだと思いますし、人間はだれでも、その欲望を満足させる権利を持っていると信じています。けれどもあるものが正しいということは、それが正しく、その意義と目的とに従って用いられるときに言えるのです。たとえば、お父さんが子供に野球のバットを買ってやったとしましょう。それはりっぱな運動用具で、それを所有することは少しも悪いことではありませんが、それは野球の時に、それでボールを打つために用いねばなりません。もしも、子供が、そのバットを悪用して、友だちをなぐる道具として用いるなら、お父さんは子供にバットを買ってやったことを後悔するでしょう。

欲望というものも、それを、その意義と目的とに従って正しく用うるときにのみ、それがりっ

ばな、むしろ、神聖なものとなるのです。今、食欲と性欲とを例にとってみるなら、食欲は私たちの生命保存の義務を、性欲は人類保存の義務を、人間がただこれを義務としてのみうるさく感じないで、むしろ喜々として進んで果たすようにと、大自然の不思議な摂理の中に織り込まれた手段であるとは、だれも疑う人はないでしょう。動物はお腹がいっぱいになったら、もう食物に口を出そうとはしませんし、交尾期が過ぎたなら、メスの動物が近づいても振り向きもいたしません。本能が、その欲望の使い道を巧みに導いているからです。ただ人間だけは、それを、ただの本能としてだけではなく、更に精神的なものにまで高めることを知り、遠来の客と共に一献傾けることの中に深い友情のつながりを見い出し、性の行為を男女の愛情の表現として用うることを覚えました。それはそれで正しいことなのですが、だからと言って、この二つの欲望の本来の目的、すなわち、生命保存の義務と、人類保存の義務を果たすための推進力としての目的と意義とを見失ってはいけないのです。ですから第一義的ともいうべきその義務を真向から拒んで、ただ、他の目的のためにのみ、この欲望の快楽を貪ることは、自然の道にはずれた行ないになるとはきわめて当然な結論でありましょう。

けれども、元来、食欲や性欲は非常に強烈な本能なので、ともすると、ただ、その快感と享楽とにのみ走りやすいので、本来の正しい意義に沿い、正しい目的に従うと同時に、更にそれに精

神的な要素をも加えて、それを人間らしい誇りをもって聖く用いて行くためには強力な理性のわくが必要となるのです。そこにこそ、理性的動物と呼ばれる人間の値打ちがあるのでしょう。

戦後、盛んに唱えられた「性の解放」とはいったいどういうことでしょうか？　私たちはサーカスに行って猛獣使いがライオンや豹などの猛獣を巧みに扱うのを、ただ、感心して眺めていることができます。なぜなら、がんじょうな鉄の檻がめぐらしてあるからです。けれど、もしあの鉄の檻の一角がくずれたとしたらどうでしょう。獰猛な動物がその野性に返り、猛然と唸り声をあげて観客に躍りかかり、楽しかるべきサーカスは目もあてられぬ阿鼻叫喚の巷と化しましょう。人間の持つ動物としての本能もそうなのです。もしこの人間の世界から「理性」という鉄柵が取り払われるなら……ああ思っただけでもゾッとします。が、青少年の性的犯罪から、酒ゆえの家庭悲劇の数々、果ては新聞紙上をにぎわわす痴情の果ての刃傷沙汰など、現代の世相は、まさに檻を破って飛び出した猛獣のかもしだす阿鼻叫喚の世界を彷彿とさせるものがあると、皆様はお気づきにはなりませんか？

人間の動物性が理性の鉄柵をうち破るとき人間は、最早欲望の主人ではなくて、欲望のどれいとなるのです。私は、たまに、遠来の客を迎えて美酒を汲みかわすあの喜びを知っています。けれども、もし、私が、もうやめなければいけない、もうこれ以上はいけないのだと、自分自身に

言い聞かせながら、なお、それでも、どうしても、盃を口から離せないとなると、もう、これは喜びではありません。私は酒のどれいとなるのです。

これ以上深まってはいけない。自分の夫、あるいは妻となる相手ではないと知りながら、激しい肉欲の渇きに、ついによろめいて、越えてならぬ堰を越えたとき、その瞬間に、清らかな愛情は消え去ります。お互いに寄せあったほのかな尊敬と愛情とは、ただれた肉欲とお互いの憎しみに席を譲るでしょう。一度、不倫な愛欲におぼれたなら、どうして次の欲望を制御できましょう。こうしてひとりの異性から他の異性へと、愛欲の満足を求めて転々と渡り歩く、愚かないのちの営みからは、身も心も疲れ、汚れ、ただれ果てたみじめな思い以外に何が生まれて来るでしょうか？

山の彼方の空遠く、幸住むと人の言う。
我、友どちとめ行きて、涙さしぐみ帰り来ぬ。
山の彼方になお遠く、幸住むと人の言う。

と、英国の詩人カール・ブッセは悲しく歌いました。

山のこちら側は隅もなく探して見た。しかし富も名声も快楽も、私の生命を満たしてはくれなかった。だが山の向こう側、まだ行ったことのない未知の世界にこそしあわせがあると人々は言っていた。そこで、私は友だちと連れ立って山を越えてはみたものの、山のかなたも山のこちらも何の変わりもなかったのだ。私の求めているもの、私をほんとうに満ち足りたものにしてくれるしあわせが、ほんとうにどこかにあるのだろうか？　と詩人は悲しく自分に問うのです。

富も、名声も、快楽も、あってよいもの、しかし、それは私たちの生命の目的ではないとすれば、しあわせは、どこにあるのでしょうか？

山の彼方の空遠く、幸住むと人の言う。
では皆様、また来週のこの時間まで。

さようなら。

第十一話　燻銀のような人間美

山の彼方の空遠く、幸住むと人の言う。
我、友どちとめ行きて涙さしぐみ帰り来ぬ。
山の彼方になお遠く、幸住むと人の言う。

皆様、山のこちら側、私の手の届く世界は一応たずねてみました。富、名声、肉欲の快楽、と人々が、とにかく「しあわせ」と呼んでいるものの正体を探ってみました。けれど、ほんとうのしあわせ、私の存在を満ち足りた生命の喜びで押し包んでくれるほんとうのしあわせは、そこにはなかったのです。

それでも私たちの心は呼び求めています。それでもなお、人々は希望を持って、待っています。幸福の青い鳥の訪れを……。山の彼方になお遠く、幸住むと人の言う……と歌い続けながら……。

では、どこかに、そのような幸福があるのでしょうか？　ある！　あるのです!!……と断言する前に……ではどこに？……と種あかしをする前に、私は、もう両三度にわたって、皆様とご一緒に考えてみたいことがあるのです。

皆様は、こんな話を聞いたことがおありですか？　あの、有名なレオナルド・ダ・ヴィンチというイタリー・ルネッサンスの名画家が遺した最大の傑作の一つである「キリストの最後の晩さん」と題せられた名画にまつわる一つのエピソードです。キリストは捕えられて十字架にはりつけにされて殺される、その前夜、最愛の十二弟子を集めて最後の晩さんをとりました。キリストを中央に、十二人の弟子たちがその左右に居流れて食卓に着いている、しみじみとした別れの宴が、ダ・ヴィンチの繊細な絵筆によってみごとに描き出されているのですが、この名画にまつわる一つのエピソード……と申しますのは、ダ・ヴィンチは最初にキリストの顔を描こうとして、そのモデルを探しました。気高くこうごうしい神の子キリストの面影を彷彿とさせるような美しい青年の姿を求めて探ね歩きましたが、なかなか理想通りの美しい顔形というものは、そうはないものです。月日は容赦なく流れてモデルを探し歩く行脚の旅が続きます。そういうある日のこと、イタリーの片田舎の小さな教会堂に足を踏み入れたダ・ヴィンチは、その教会の祈禱台にひざまずいて静かに祈っているひとりの若者を見つけました。何気なく近づいて、フトその横顔を

眺めたとき、ダ・ヴィンチは飛び上がらんばかりに喜んだのでした。それが長の年月、旅から旅に探し求め、夢にまで描いた彼のイメージにピタリと合った美しい清らかな面影だったからです。彼が、その青年をキリストのモデルに頼んだことはいうまでもありません。ピエトロ・バンジネルリと名乗るその青年の、伏し目がちにモデル台に坐っただけであたりに漂う犯しがたい清らかさと気高さとを取り入れて、ダ・ヴィンチはみごとに、神の子キリストの姿を描き上げました。それから十二人の弟子たちの顔に移って、仕事はおもしろいようにはかどりましたが、最後に、あまり描きたくない顔が一つ残ったのです。それは、皆様もご承知と思いますが、キリストは、そのとき、そこにい合わせた十二人の弟子のひとり、イスカリオテのユダスという男に裏切られて敵の手に渡されたのですが、そのユダスの顔でした。ダ・ヴィンチは、この裏切り者ユダスの顔を、思いきり、醜い顔に描き上げようと考え、今度は前とは反対に醜い顔のモデルを探し始めました。あるとき、彼は、ある下町の酒場をのぞこうとして、出合いがしらにひとりの酔っぱらいにぶっつかりましたが、ハッと顔を上げ、その酔っぱらいの顔を見た途端、ダ・ヴィンチの足はすくんでしまったのです。なんという冷酷な顔、地獄から脱け出して来たかと思われるような憎しみに光るその瞳……けれどもダ・ヴィンチは、それこそ、自分の求めていたユダスの顔だと気づきましたので、震える足を踏みしめながら、その酔っぱらいに多額の謝礼を約束して、

彼を自分のアトリエに伴い、さっそく、彼の顔をモデルにして裏切り者ユダスの顔を描き始めましたが、顔の輪廓をザッとスケッチし終わったと思うと、ダ・ヴィンチは、どうしたのかポトリと絵筆を取り落とし、すでに前に描き上げたキリストの神々しい顔をしばらく見つめていました。と、突然、何を思ったのか、その酔っぱらいに向かって叫びました。

「君！　君はだれだ？　君の名前はなんというのだ？」

酔っぱらいは、ニヤリと笑って答えました。

「おれか、おれの名前は、ピエトロ・バンジネルリというのだ。」

ピエトロ・バンジネルリ！　ダ・ヴィンチはアッと声をあげました。ふたりは同じ人間だったのです。キリストの顔のモデルになったあの美しい青年と、今、目の前にいる身の毛もよだつようなこの男と……。よく見ると、その顔の輪廓、鼻筋、口元、全然変わってはいない、全く同じなのです。だのに、数年前、キリストの顔のモデルになったときの、あの美しさは跡形もなく消え失せ、今は、世にも醜い形相となり果てていたのです。顔の外側が変わったのでないとすると、いったい、どこが変わったのか？　という一つのなぞを残してこのエピソードは終わります。

ですが、こんなお話をしている間に、大分時間が経ったようです。少し先を急ぎましょう。

さて皆様、人間はだれでも、醜いものよりも美しいものが好きだということは争われない事実

でしょうね。人間の魅力の一つは、その容姿の美しさにあるのですから、異性間の愛情もある程度までは人間の外面的美しさが対照となります。もちろん、その美しさは、なにも女性だけに限ったものではないので、ラジオの商業放送を聞いておりましても「美人は夜作られる」というキャッチフレーズが出ると男性の方でも、負けてはおれぬとばかり「美男子は朝作られる」などというスポットが流れ出て来るのですから、美しくありたいという願いは男性にも女性にもあるようです。けれども、なんと申しましても、美しさは女性の誇りでもあり、生命でもありますので、男性に比べて女性の方がはるかに、そのために苦労をしておられるようです。私のような無精者は、その意味でやはり男に生まれて来てよかったと思っています。ヤレ、パーマだとかセットだとかハイ・ヒールだとか、あるいは、バストだとかヒップだとか、いや全く大変なことだと思います。女性の皆様が美しくあらんために払われる献身的な労苦と、あの絶え間のない努力を考えますとほんとうに頭の下がる思いがするのです。

いつでしたか、何気なく机の上に投げ出されてある新聞に見るともなく目をやりますと、下の方に「娘たちよ、美しかれ」という大きな文字が目にとまりました。更によく見ますとその上の方に「母たちよ、御身らも、また、美しかれ」とありました。すばらしい文句だなあと、その新聞を手にとってよく見ると、それは、「マダム・ジュジュ」の広告だったのでした。

美しくあるための化粧品に使われる金も相当なものでしょうね。

ところで、こんなことを言うとラジオを聞いておられる女性方から、きついお叱りを受けるかも知れませんが、女の方たちは、いったい、何才ぐらいまで、ほんとうに美しいのでしょうか？もちろん人にもよりましょうが、そんなに長いことではありませんね。やがて、間もなく……それは思ったよりもずっと早く、凋落の秋が来るのではありませんか？　朝の化粧に鏡をのぞいていて、小びんに二、三本のしらがを見て驚かれるのも、目尻に小さな皺ができているのにハッとされるのも、そんなに遠い先のことではありません。楽しいときは早く過ぎ去るもの……そのときになって、私はもう美しくなくてもよいのだと、きれいに思い切れる人は、そうたくさんはないでしょうね。行く春を少しでも長引かせようと、更にお化粧に憂身をやつすことになる、「二十五才以下の人はつけてはいけません」などという化粧品の広告の殺し文句に縋り付きたくなる…けれど、しらがを染めてみても、しわを伸ばしてみても、一枚一枚、無心の木の葉が散り始める秋の訪れを防ぎきれるわけのものではありません。「人生とは、そういうものなんでしょう。私の青春は終わったのですから……」と淋しくおあきらめになりますか？　けれど、私は世の女性方に申し上げたいのです。美しくありたいという願いは正しい願いでした。だのに、早くも人生は淋しいものと、その美しさへの憧れを絶ち切らねばならないとすれば、それは、あなたの生命

のどこかにまちがいがあったからではないでしょうか？　そう、どこかに、小さなまちがいがあったのです。

はっきり申し上げますと、美しくありたいとの願いを、あなたは、ただ、外側の目に見える肉体の美しさだけに託しましたね。けれどほんとうは、その願いを内側にも向けるべきだったのです。あなたの目を内側に向けて、あなたの美しさをまず内面にたくわえるべきであったのです。

たとえば、いつか、ずっと前にもお話しましたように、高い教養を持ちながらそれを謙虚に包むことを知り、深い大きな愛情を内にたくわえながら、それにおぼれぬだけの理知にも生き、女らしいしとやかさの内に強靱な意志と信念とを宿しつつ、柔和で、貞潔で、しかも、ひたむきな熱情を持つ……そういう内面的な輝きは、それを内に、隠そうとすればするほど、おのずから外に溢れ出て来るものなのです。それが人格のかおりなのです。そこにこそ、人間独特の、ほんとうの人間的な美しさが輝くのです。

肉体の外側の美しさには限りがあります。けれど内面の美しさには限りがありません。年と共に、磨きのかかった、燻銀のような、品位のある内面の美しさが輝き出て来るのです。もしも、あなたが、あなたの美しくありたいとの願いを内側の、そういう内面的な美しさに託していたのであったなら、あなたは決して、その美しさから裏切られることはなかったのでしょう。

レオナルド・ダ・ヴィンチの名画にからむあのエピソードの主人公ピエトロ・パンジネルリが、気高くこうごうしいキリストのモデルであったと同時に、冷酷な醜さの権化とも言える裏切り者ユダスの顔のモデルでもあったという、あのなぞを考えましょう。人間は、顔形はそのままに、美しくも醜くもなれるものだという、この神秘に目を向けましょう。

人間をほんとうに美しくするもの、それは、容貌や化粧品ではなく、もっと別なもの、もっと深いもの、つまり、肉体以外の何ものかなのですね。

皆様、人間は複雑なものだとお思いになりませんか？　それは、親から授かったこの生命、やがて死んで墓にうずまるこの肉体という、ただの物質だけでできているものと簡単に割切ってしまえない、何か複雑なものなのです。人の世は動物の世界ではありません。生まれて、食べて、寝て、育って、子供を生んで、やがて、死んで行く……それだけの世界ではなく、何か、もっともっと高いもの、もっともっと深いものを秘めているのが、人の世の生命なのです。

山の彼方の空遠く、幸住むと人の言う……山の彼方……それは案外に、私たち自身の一番深い奥底に広がっている未知の世界であるかも知れませんね。

では皆様、また、来週のこの時間に……夜もふけたようです。静かにおやすみなさい。

第十二話　無限への息吹き

先日は、レオナルド・ダ・ヴィンチのお話をしましたので、今週は、そのついでに、少し「芸術」というものに就いて考えてみたいと思います。

一昨年十一月、私は約七カ月にわたる欧米の旅を終えて、米国のロスアンジェルスからプレシデント・クリーヴランドの船客となり、日本に向けて二週間の船旅につきました。七カ月のあわただしい旅で十数カ国を駆け回り、毎日曜日どこかの教会で説教をしたり、講演をしたりしている間は、あまり気にもかからなかったのですが、いよいよ船に乗ることになり、二週間もすれば日本の土を踏むという時になって、日本の読物から、従って日本の思想界から遠ざかっていたこの七カ月のブランクが、今更のように、私をあわてさせました。で、私は、乗船間際になって、ロスアンジェルスの日本街を走り回り、ここ、三、四カ月以来の古雑誌を買い求めました。そしてクリーヴランドのデッキ・チェアに寝そべって、それを貪り読むことになったのであります。ところがその中の、多分一昨年七月号の中央公論だったと覚えているのですが、ある著名な作家

の「芸術は何のためにあるか」という一つの論文を発見しました。私は何気なく、その論文に目を通し始めましたが、読み進むほどに「これはとんでもない話だ。」と気づき、も一度始めから念を入れて読み返して見ました。が、何度読み返しても同じことで、その論文の言わんとするところは、判然としていて、疑う余地もありません。それは真に驚くべき暴論というのほかはなく、私は、その論旨のあまりの言語道断さに、しばしがほどはぼうぜんとしたのでした。ことわっておきますが、私は、その論文の著者に対してなんら含むところのあるものではありません。のみならず、その作家の作品、ことにエッセイのたぐいのものは真に興味深く読ませてもらっています。ことに氏の持つ近代的なパラドクスとギャグの楽しさには、いつもほおえまされているものです。けれども大文豪トルストイをあれほど悩ましめた「芸術論」ともなると、これは単なるギャグや思いつきなどで論ぜられるべきものではなく、もっと真剣な悩みをもって取り組まれられなければならぬもの、いわば、おとなの問題だと思います。

ところで、同氏の論文は相当に長文ではありますが、同氏自身がそれをみごとに要約されていますので、今、それをそのまま取り上げてみましょう。

その論文で、その作家は「人間は性欲や食欲や、他人を押しのけて他人を従わせたい権力欲や、情緒の中に浸っていたい感情などを持っていて、それらの欲望を思うように味わいたいと常

に求めている。これらのエゴイズムとして一括されるもの、すなわち、人間の内部にある『悪』と言われるところの諸々の衝動が元来の純粋な人間なのである。」と断定します。が、「しかし、これらの衝動を、そのまま発揮させると、殺人、姦淫、独裁政治、肉体的破滅が生まれることを人間は知っているので」それらを押さえるものがなければならないところから、私たちが「宗教、道徳、科学、法律などの名で呼んでいるところの文化体系の全体が生まれたのであるが、それらは人間の生活をより安全、より便利にするための手段にほかならない。」そこで、それらの手段があまり強く人間の本性を押さえつけると、その反動として、その文化のわくからのはけ口を求め「これらの手段に対抗して、人間の生命の本来の力を主張するものが『芸術』なのである。」というのです。つまり、芸術とは、いわゆる、文化に対抗して、人間が人間の動物性を主張するところに生まれるものだという論旨であります。

私が、プレジデント・クリーヴランドのデッキ・チェアで、これを読んでいて、ほとんど叫び声をあげるばかりに驚いて思わず上半身を起こしたのは、ちょうど、そのとき、この論文の「芸術は何のためにあるか」という演題からの連想の結果でしょうか、思うともなく、私の頭の中で、数カ月前に訪れたイタリーの古い修道院にある美しい壁画を思い出していたからです。中部イタリーのフロレンスの、サヴォナロラが住んだ部屋があるという年古りたサン・マルコ修道院の小

さな独房――独房なのですから三人も入ればいっぱいになる小さな石造りのへやですが、その独房の壁に、ほとんど無造作にと言っていいくらいの淡々たる筆致で――と言っても、実は手のこんだフレスコ画なのですが――一見、真に何気なく描かれたように見えるフラ・アンジェリコの壁画の前にたたずんだときの、あの感激を私は生涯かけて忘れはしないでしょう。

ああ、今でも思い出すだけで、心の底まで洗い清められるような、あの感動……。私は、たったひとりで、音もなくヒッソリと静まった、その独房の一つ一つを訪れながら、魂の奥底から、ゆすぶられるような激しい感動を覚えたのです。すでに五百年という年月が、画家と私との間を隔てているという事実は消え失せて、今、フラ・アンジェリコが話しかけているのです。いや、その描かれた絵そのものが描かれた当時のままに、五百年後の私に呼びかけているのです。私は、五百年前に生きたひとりの人間、フラ・アンジェリコの不滅の魂の息吹きをそこに感じたのでした。

というと、皆様は、私がクリスチャンだから、それらの宗教画のもたらすふんい気に感動したのだろうと言われるかも知れませんが、そうではないと、私は断言できます。同じくフロレンスのミュゼウムにあるミケランジェロのあの有名な青年ダヴィドの裸像の前に立ったときのあの感動も、私の終生忘れ得ぬ印象の一つであります。奥まった丸天井の円形部屋の中央に立つその裸

像……人間の身の丈のおよそ二倍ほどの大きさの青年ダヴィドが、これから巨人ゴリアデに立ち向かおうとする緊張した瞬間の姿を捕えたミケランジェロの傑作です。身に一糸もまとわぬ、きわめてリアリスティックな裸身像ですが、私は、そのへやに一歩足を踏み入れたとき、思わず、アッと声をあげました。圧倒されたのです。そのへや全体に充満している生命を感じたのです。目には見えない、しかし、そのへやの隅から隅までを占領している巨匠ミケランジェロの魂の生命を感じたのです。すばらしい！　私は全身がおののくような、しびれるような感動に包まれるのを感じたのでした。皆様、それが「芸術」なのです。

「芸術はなんのためにあるか」という中央公論の一論文の論題から、私が、思うともなしに、そのときの感動を胸に呼び起こしていたとき、「文化というわくに押さえつけられた人間の動物性が、性欲とか食欲とか支配欲とかの悪と言われるもろもろの衝動が、そのわくに対して、はけ口を求めるのが芸術である」という、その論文を読んで、私がどんなに唖然としたか、皆様には想像がおできになるでしょう。

いったい、その論文の作者は、一度でも、これらのほんとうの芸術作品の前に立ったことがあるのでしょうか？　なにも遠く外国に名画を求めるまでもありません。日本の茶の湯の、あの幽玄な「わび」や、きびしい秩序の清潔な美を造形する日本の生花の高い精神性を、一度でも考えたことがおありなのでしょうか？　日本が世界に誇る最高の芸術とも言われる、無表情な能面が、測々として見る人の心に忍び入る……たとえば、あの蟬丸のたえいるような慟哭のもたらす深い内面性に、一度でも触れたことがおありなのでしょうか？　不吉な運命の訪れに怯えつつ、それとの激しい精神的闘争とその勝利とを高らかに歌い上げた、ベートーヴェンの第五やブラームスの第一交響曲に、静かに聞き入ったことが、果たして一度でもおありなのでしょうか？　そして、それでもなお、「芸術とは理性に反抗する人間の動物的本能の産物である。」などと言われるのでしょうか？

いや、とんでもないことです。実は、あの論文には大きなまちがいがあります。それは、あの論文が「元来の純粋な人間」という言葉で呼んでいるところの「人間の本性」についての誤謬であります。あの論文では「性欲や食欲や支配欲など、いわゆるエゴイズムとして一括されるもの、すなわち、人間の内部にある悪と言われるもろもろの衝動こそが、元来の純粋な人間」すなわち、それこそが人間の本性なのだと断じていますが、実は、これは、そのまま、他のすべての動物に当てはまる特徴です。ですから「元来の純粋な人間」という言葉の代わりに、「動物の本性」と入れかえた方がよくわかります。つまり、こうなるでしょう。「性欲や食欲や支配欲など……人間の内部にある悪といわれるもろもろの衝動こそが、動物の本性なのである」と。

だが、人間の本性とは、人間が他の動物と違っているところの根本をいうのです。そして、それをこそ「元来の純粋な人間の姿」と呼ばねばならないのでありまして、それは人間を動物から異ならしむるところのもの、すなわち人間の精神性にあるのです。

押さえつけられているのは人間の動物性ではなくて、理性のわくの中にありながら、なおも力強くうごめいて、ともすれば人間を安易な動物的生活に結びつけようとするその動物性によって、今にも窒息しそうになっているのは人間のその精神性なのです。

けれども人間の精神は、……強靱で、崇高な人間精神は、押さえつけられようと、踏みつけられようと決して消え失せることはありません。人間の平凡な動物的生活の透間をねらっては、そのわくを打ち破って、無限の世界に羽ばたこうとする、永遠の彼岸に生き抜こうとするのです。この人間精神の無限へのあこがれ、永遠への思慕……ああ、それこそが、輝かしい芸術となって、人間を、人里離れた幽玄の世界に運び行くのです。

この地上の三つの次元に縛られて、あくせくと、その動物的生活を営み続ける人間というものを、この次元を越えた「永遠」なるものに連ならしめるもの、「無限なるもの」に結びつけるもの、それが、それこそがほんとうの芸術なのであります。

先週のお話で、私は人間を複雑なものだと申しました。ほんとうに複雑なものなのです。他の動物と全然異ならぬ動物性を持ちながら、しかも、天使のように天高く天翔けろうとする何物かを持っているのです。時間と空間とに縛られて生きながら、しかも、無限と永遠とにあこがれる何物かを内蔵しているのです。そう、それが人間というものなのですね。

皆様、今静かに皆様のお耳に流れ込んで来る美しいメロディをご存じでしょう。そうです。シューベルトの「アヴェ・マリア」ですね。キリストの母マリアを……「めでたし恩寵に満ち溢れています君、世のありとある女のうちにて、いとも祝福されています君……」とたたえる讃美のしらべです。人類の敬虔な魂たちが、二千年この方、口をそろえて叫び続けて来た一つの祈り「アヴェ・マリア！」……この言葉を、楽聖シューベルトの若い魂が感動に震えつつ、美しく歌い上げたこのしらべ……なにか、ほのぼのとして、私たちの魂のふるさとを思わせるような気がしないでしょうか。

どうやら、みちのくに、初秋の夜がふけて来たようです。では皆様、お元気で、また、来週！

第十三話　強きものと弱きもの

皆様、今は少し古くなりましたが、戦争直後から数年間、巷に流行したいわゆる流行語の中に、ドライとウエットという言葉がありました。ドライな考え方とか、ドライ娘などという言葉が盛んに使われたものでした。そして、どちらかというと、ドライと反対なウエットという言葉が古い思想を代弁するものとして、一種の侮りをもった意味で用いられ、それに対してドライという言葉がなにか新鮮な新しい生き方を代弁するもののように考えられたものでした。

このドライとかウエットとかいう言葉の意味は、もちろん皆様ご存じの通りで、それぞれ、英語の、乾燥した、乾き切った、パサパサとしたという意味と、それに反対な湿った、ジメジメとしたという意味の言葉でありまして、それが、物事の考え方や生活態度に応用されて、ドライとは、すべて物事を金銭的なあるいは現世的な損得の概念で、数学的に割り切った、きわめて唯物論的な考え方や生活を意味し、反対にウエットとは、なんのもうけにもならない、一文の得にもならないとわかっていながら、義理や人情や、実在もしない理想論などに引かれて生きる、数学

的にはさっぱりと割り切れない生き方を指すことになったようです。

アメリカにこんな笑い話がありました。ある若い婦人が、自分の夫にだまされたと言って法廷に訴え出ました。原告側の婦人は言うのです。

「自分は主人と結婚したばかりですが、結婚するまで、主人は自分の年齢を七十五才だと言っていて、私もそうとばかり信じて結婚したのに、実は、主人は私を偽っていたのです。」

そこで判事が、

「それでは、ご主人は七十五才だと言っていたのに、ほんとうはもっと年寄りだったのですか？」

と尋ねますと、婦人は、

「いいえ、とんでもない。それならなにも文句はないのですが、実は、主人は六十五才だったのです。七十五才というから結婚したのですが、六十五才なら結婚するんではありませんでした。」

と答えたというお話です。この小話の意味はおわかりになるでしょう。日本にも戦後、チョクチョクと、この種の勇敢なお嬢さんがあったようです。若いお嬢さんたち——と言っても、もちろん良家の子女ではないでしょうが、

「お嬢さんの理想の結婚相手は？」

と尋ねられ、平然として

「お金持ちのおじいちゃん！」

と答えたお嬢さんたちがあったようです。おじいちゃんだから間もなく死ぬでしょう。死ねば遺産がころげ込む。さて、それから、おもしろおかしく人生を楽しむのだという、真に割り切った考え方、つまり非常にドライな考え方なのですね。

もちろん、これはドライという言葉を、も一つドライに割り切った用い方であるかもしれません。ドライな考え方という言葉の中には、そのよい面、すなわち、もっと深い生活の知恵が含まれていることを私は否定しませんが、戦後の流行語としてのこの言葉の用い方には、やはり唯物論的な意味を含ませた場合が多かったようです。

その反対に、ウエットというと、たとえばひとりの愛人を思い、その愛人とは結婚によって結ばれることができなかったにもかかわらず、そのひとりを、おのが生涯におけるただひとりの人と考えて、そのひとりの愛情の想い出におのが操を捧げて生きるといったような生き方、外目には、つまり唯物論的な損得の立場から見るなら、真になんの足しにもならぬ愚かな生き方としか思えぬ、そういうふうな、物事の考え方や生き方を指していうのです。

ところで、先年、ヨーロッパを旅行中、私は一つの興味深い話を聞きました。どこでしたか町

の名は忘れましたが、何でも、ドイツとの国境近くにあるフランスの一寒村に、今度の大戦中に戦死した、フランスのゲリラ部隊十数名の墓があるのですが、その墓に混じって、ひとりの無名のドイツ兵の墓が一つ立っているのです。そしてすでに、戦争も終わって十数年経った今日も、なお、その無名ドイツ兵の墓の前には、だれが供えるのか手向けの花の絶えたことがないとのことです。

いったい、そのドイツ兵とは何者なのかと尋ねると、村の人々はひとみに涙を光らせながら、次のように話してくれることでした。

それは、第二次大戦も末期に近いころのことでした。戦争勃発と共に、電光石火のようなドイツ軍の進撃の前に、あえなくつぶれたフランスではありましたが、祖国再建の意気に燃えるフランスの青年たちの中には、最後までドイツに対するレジスタンスに生きた勇敢な人々がありまして、ここかしこに神出鬼没なゲリラ戦を展開しては、ナチの将兵を悩ましておりました。が、武運拙くと言いましょうか、十数名のゲリラ部隊がついに敵の手に捕えられました。残虐なナチの部隊長は、なんの詮議もなく、直ちに全員に銃殺の刑を申し渡しました。ゲリラ部隊の隊員の数と同じだけのドイツ兵がずらりと並んでいっせいに銃を構え、自分の目の前のフランス兵にねらいを定めて「撃て！」という号令を待ちました。と、間一髪、ひとりのドイツ兵が、突然叫び声

をあげました。

「隊長！　私の前のフランス人は重傷を受けて、完全に戦闘能力を失っています。こんな重傷兵を撃ち殺すことはできません！」

今まで、かつて反抗されたことのないナチの隊長は怒りに目もくらんだように、口から泡を吹きながら叫び返しました。

「撃て！　撃たないなら、お前も、そいつと一緒に撃ち殺すぞ！」と。

けれど、そのドイツ兵は二度と銃を取り上げませんでした。ソッと銃を足下におくと、静かな足取りで、ゲリラ部隊の中に割って入り、重傷を負うて、うめいているフランス兵をかかえ起こすと、しっかりと抱き締めました。次の瞬間、轟然といっせいに銃が火を吐いて、そのドイツ兵とフランス兵とは折り重なるように倒れて息絶えて行ったというのです。

ところで皆様は、このドイツ兵を、どうお思いになりますか？　ドライな考え方からするならば、これほど、ばからしい死に方はありませんね。この男が死んで、だれが、どんな得をしたというのでしょうか？　だれも。そうです。ほんとうにだれも得をした人はありませんでした。その男が撃たなくとも、どうせだれかが撃ったでしょう。しかもあたら将来あるこのドイツ兵自身までも殺されるのです。その上、戦争中のできごとです。戦争中は隊長の命令が絶対的な力を持

っており、死をもって強制されたのですから、自分にはなんの責任もありませんし、戦争犯罪に問われることもなかったでしょう。どっちみち殺されるゲリラ隊員なのですし、撃てばせめて自分の生命が助かるのですから、撃ってもよかったのでしょうね。

そうです。撃ってもよかったのです。けれど、皆様、撃ったなら、どうなったでしょう？　確かにそのドイツ兵の生命は助かりました。けれど得をしたのは、そのドイツ兵ひとりの生命です。ナチの残虐の消えがたい思い出と共に、ひとりのドイツ兵の生命が長らえ得たのです。

しかし、そのドイツ兵は撃ちませんでした。のみならず、自分も殺されて行きました。ところでなにか得があったかとお尋ねになるなら、こう答えましょう。ひとりのドイツ兵の死はそれを目撃した人々に忘れ得ぬ思い出を残したのみならず、ナチの残虐行為の一つはこの思い出によって洗い浄められ、その話を伝え聞くほどの人々の心に、ほのぼのとした生きることの希望を与えました。ナチの残虐にもかかわらず、人間の持つ良識と善意とを全世界の人々の心に立証したのです。このような人がひとりでも人の世にいてくれたということで、私たちは人生に絶望しないですむ。今は人々が猜疑と憎しみでいがみ合ってはいても、人間の心の奥底にこのような生き方をする可能性が残っている限り、いつの日にか再びほんとうの心からの平和がやって来ると信ずることができ、人間というものに信頼をおくことができる……これが、このドイツ兵の死がもた

らした贈物なのでした。どこの生まれか、名も知らぬ、年もわからぬこの無名の敵国の一兵士の墓の前に戦後十数年を経た今日、未だに手向けの花の絶えることのないという一つの事実こそ、彼の死の贈物に対する人類の感謝のあらわれでなくて何でありましょう。

皆様、残虐なナチは、その生みの親ヒットラー総統と共に滅びました。そして、ナチの軍靴に蹂躙され、アッという間にこの世から抹殺されてしまったはずのあのドイツ兵の思い出だけが、未だに人々の心の中に暖かく抱き締められているという事が、何を意味するか、おわかりでしょうか？

私たちはともすると、目に見える力、何かを生産する富の力、何かを破壊する武力、他人を屈服せしめる権力、そういう外見的な力だけを偉大なものとして尊重し、それだけが実在するもの、現実的なものと考えて、その他のものは、非現実的なもの、あってもなくてもよいものというふうに考えがちですね。そして、前者、すなわち力を征服者、勝利者とたたえ、後者を弱者、無力者、敗北者と考えがちですね。けれども、ほんとうに人間の世界を、人間の世界らしく、美しく作り上げて行くものは、この二つのうちの、果たしてどちらだと皆様はお考えになりますか？

古代のローマ大帝国は、さしもに権力をほしいままにした大帝王たちと共に、歴史の流れの中

に滅び失せました。しかし、その崩壊の騒音の中で静かに生きた聖オーガスチンの懺悔録は、未だに、読む人の心に深い潤いをもたらしています。大詩人ラシーヌや劇作家モリエールたちは、当時の風習に従い、自分の作品を時の権威者に献呈しました。しかし献呈された権力者たちの名は、今、だれが覚えているでしょうか？　が、献呈した弱者は今でも生き続けています。

歴史の流れは無情です。大災害、戦争、地震、経済的危機などの中に、すべてのものを分解し破壊して行きます。けれど、それらの世俗的騒擾をよそに、音楽家は作曲を続け、詩人は歌い、学者は学び、そして、宗教は無数の聖者を生み続けます。彼らは弱者です。この世の権力者は彼らをただ一言でこの世から抹殺できるでしょう。けれど、生き残るものは権力者ではありません。この世を人の世として完成するもの、それは征服者ではなくて、弱き者、私たちがともすると非現実的な存在と考えている小さな人々のうちに満ち溢れ、充足した魂のいのちなのであります。

皆様、古代ローマが滅んだように、バビロニアやカルタゴがその帝王たちと共に滅び失せたように、現代の二大強国、アメリカやソヴィエトも、いつか滅び失せましょう。ヒットラー、ムッソリーニ、スターリンの名も忘れられると同様に、現代の英雄たちの名もいつか忘却のかなたに消え失せることでしょう。だが、それらとなんの関係もなく、人間の世界は、人間の世界らし

く、しみじみとしたものを内に宿しつつ着々と形造られて行くでしょう。いや、行かねばならないのです。そして、それを形造るもの、それは、小さく、だれの目にもとまらなくとも、内に輝きを放って、聖く真剣に生き抜く人間の魂のいのちなのであります。

人間は複雑なもの、そして人間の世界も、また複雑なものを含んでいるようですね。

では、皆様また、来週のこの時間に。

第十四話　三百五十円のいのち

皆様、今まで両三度にわたってお話し申し上げてきたこと――人間の内面的な美しさ、芸術というもの、あるいはドライとウエットな生き方などについてお話し申し上げてきたことから、私は皆様がおのずから一つの結論をお引き出しになったのではないかと思います。あるいは結論とまでは行かなくとも、私が何を話そうと意図しているかということを、おぼろげにでもお気づきになったのではないかと思います。それは、人間とはきわめて複雑なもの――やがて土に帰って行くこの動物的な肉体（からだ）だけで、すなわち物質だけでできていると簡単に割り切ってしまえない何ものかである――という一つの事実なのであります。

今世紀の初頭から、すばらしい勢いで発展して参りました科学の成功に目がくらんで、私たち近代人は、ともするとすべてを科学的に割り切りたい、つまりすべてを目で見、手で触れ得る世界に返したいと思うようになり、また目で見たり手で触れたりできる世界、つまり科学で立証された世界だけが、唯一の実在なのであり、それ以外の世界、科学の対象となり得ない世界は、非

実在つまり一種のまやかしの世界だと思う、そういう唯物論的な世界観を持つようになりました。この問題についてはまたいつか時間を改めて、ゆっくり考えてみたいと思いますが、きょうはただ、私たち人間という存在だけに問題をしぼって、こういう唯物論的な考え方を少し、解剖してみることにいたしましょう。

仮に、人間を科学的、唯物論的に割り切ったらどうなるでしょうか？　それはむつかしいことではありません。フォイエルバッハというドイツの唯物論者が、はっきり言っていますが、人間とはおのが食するところのものであるということになります。すなわち私たちの食べる食物が消化吸収されて血となり肉となり、全身の細胞を形造って行くのですから、私たちは、つまり私たちが食べるものでで き上がっていることになります。ある学者は、私たちの肉体は頭のてっぺんから足のつま先まで、すべての細胞がすなわち、私たちの全身全存在が、二週間ないしは一カ月で完全に新陳代謝によって、入れかわると言っています。ですから私というものを、ただ肉体の面からだけ眺めるならここ一カ月から二週間位までに私が食べた食物の内容物でで き上がっているということになります。人間というものが、ただそれだけのもので、それ以外のなにものでもないということになると、私の考えたことや、私が今お話し申し上げている、こういう言葉や思想はすべて私の食べた食物の変形に過ぎぬということになります。また、ほんとうに唯物論者は

まじめにそう考えて、人間の思想や発明や科学する力などを、脳細胞の分泌物だと断言するのです。そうなると問題は簡単ですね。人間の値打ちは人間の肉体を分析してみれば、はっきりわかります。ある科学者の調べたところによりますと、人間の肉体は、まず、晒布一枚を洗うに足る水分、一杯の茶わんのコーヒーを甘くするだけの糖分、数箇の馬のひずめを打つに足る鉄分、二、三本の鉛筆の芯となるだけの黒鉛などがあって、それらを総計すると、丸公で九五セントになったという、つまり一ドルにならないところがみそですが、日本円に換算しますと、およそ三百五十円ということになります。それが人間ひとりの値打ちとなると、どうも私たちはあまり上等な存在ではないと言わねばなりません。けれど、どんなに安く見積もられても、人間の肉体を分析すると、それだけしかないのですから仕方がありませんね。これが唯物論者の結論なのです。

ところで私たちは人間というものの複雑さをご一緒に少しは眺めて来たつもりです。人間は複雑なもの、動物のように欲情するかと思うと、人間独特の内面的な美しさに引かれたり、激しい憎しみに燃えていがみあうかと思うとすばらしい芸術的作品を残したり、肉体は富み栄えて絹に包まれ美食に飽いていながら、心の奥底ではいやしがたい不満に悩みうめくのです。この複雑さはいったい、どこから来るのでしょうか？　それは人間をただの動物として、肉体という物質だけで割り切っては永久に解決のできないなぞでありましょう。それを解く鍵はただ一つ、人間の

その複雑さの源である一番奥底の人間の本質に目を向ける以外にありません。

さて、それでは人間の本質……人間とはいったい、なにものなのでしょうか？　正しい哲学ははっきりと人間を定義して、「人間は理性的動物である」と申しています。人間は確かに動物の一種に違いありません。が、人間を他のすべての動物から区別するところは、人間には理性があるということなのです。そこで人間の動物的生命の主体、すなわち主人公は、この物質的肉体であることは明きらかなことですが、では理性的活動（はたらき）の主人公はいったいなにものなのでしょう？

人間の理性的活動と呼ばれるものに、知恵と意志という二つのものがあることは、皆様ご承知の通りであります。

あの終戦直後の乗物の殺人的混雑と、それに伴なう道義の頽廃には真に目をおおわしめるものがありましたが、時として美しい情景に出合うこともありました。ひとりの、一見なんの教養もない職工が、見知らぬ老婆を助けて席を譲るのです。老婆は一応は辞退した後で、さすがにうれしそうにていねいに感謝して腰をおろし、それから、まるで自分の息子をいたわるかのように、その職工にほおえみかけながら、その荷物を受け取って自分のひざに抱きとってやります。なんでもない、きわめて当然なことではありますが、周囲のすさんだ状況の中にあって思わず、ハッとさせられるような心打つゆかしさに、私はちょうど見失った宝を見つけたときのように、心は

ずんでフトひとり言を言うのでした。「ああ、これだ。この礼儀と愛情！　敗戦の現代日本に欠けていたのはこれだったのだ！」と。

ひとりの職工とひとりの老婆と、そして席を譲る一つの行為……私の目から入って来た姿は、それだけです。けれども、次の瞬間、私の知恵はその職工と老婆の姿を遠く乗り越えて、現代の敗戦日本に欠乏する「礼儀」と「愛情」のとうとさを見たのです。それが、人間の知恵の働きなのです。

ある学生は、学生の分際でいつもいつも学校からの帰り道、映画館に入ったり、カフェーに立ち寄ったり、ときにはダンスホールに入り浸ったり、というのでついに校長の面前に呼び出され、学生の本分を忘れ、その義務を怠って、学校の名誉を傷つけたというかどで、退学処分に付されました。というこの数行の文章の中に出て来る数箇の単語、たとえば学生の分際、本分、義務、名誉などという、言葉はありますが、しかし、そういうものがどこかに、形と色とをもって実在するでしょうか？　いいえ、それは形も色もにおいもない目にも見えず手にも触れ得ない、非物質的な私たちの「思想」あるいは「考え」つまり私たちの知恵の産物なのであり、物質や感覚の世界を遠く乗り越えた彼岸の世界の問題なのです。そして、私たち人間の知恵は他の動物たちのあずかり知らぬこの彼岸の世界に生き、働き、そこで成長発展して行くものなのです。こうして

ニュートンは一つのりんごが木から落ちるのを見て、万有引力の法則を発見しました。ルベリエは天王星の軌道の細かな計算から、必ず、も一つの星がなければならぬことに気づき、海王星の存在を洞察しました。哲学者アリストテレスは、目に見える結果としての天地万物から、その原因を追求し、ついに目に見えぬ第一原因としての神の存在を推論しました。これらは動物的な、肉体という物質とはなんの関係もない人間のも一つの姿……知恵という精神活動の主体としての、人間精神の実在を雄弁に物語り、みごとに証明しているのです。

更に、人間には自由意志という理性の力があります。さきほども申しましたように、人間は動物の一種なのですから、動物としての本能を持っています。すなわち食欲や、性欲や、生存欲や、支配欲などの本能でありまして、この本能の力の強さを知らぬものはないでしょう。この本能、この欲望があるからこそ、動物は生きるのであります。ところが、人間の持つ自由意志はこの最高の動物的生命力と言える本能の上に君臨して、本能をもおのが意志に屈服せしめようとします。かつて、いかに数多くの青年たちがおのが祖国の名誉のために、洋々たる前途をなげうって国に殉じたことでしょうか。友は、その友情の道義を裏切りたくないばかりに、おのが恋愛をも犠牲にすることに誇りを感ずるのです。かつての戦争中の欠乏の中で、母は子供たちの喜ぶ顔を見るためには、自分の最少限の食物をも与え尽くして悔いなかったのでした。と言っても、そ

ういう英雄的な行いが、なんの抵抗も感じないでやすやすとできるはずがありません。そこには、あくまでおのが権利を主張する本能の強烈な抵抗があり、その本能に逆らって道義に生きるためには、激しい血の滲むような戦いがあります。人間は複雑なものという、その複雑さの一つは、この一個の人間の内部における本能と理性との戦いにあると言えましょう。しかし、その戦いについに理性が勝利を得たのです。人間の持つ動物性が、その上に位する、も一つの力によって屈服せしめられたのです。屈服せしめられたのが人間の動物としての肉体であるならば、それを屈服せしめたのが同じ肉体であるわけがないという、この事実こそ、人間の肉体以外のも一つの主体、すなわち人間精神の実在を見事に立証していると言わねばなりません。

物質を乗り越えて、無形の真理の中に突き進んで行く人間の理知……動物的本能に打ち勝ってその上に君臨する自由意志……このすばらしい精神活動の主人公は、土から造られてやがて土に帰って行く人間の動物性とはなんの関係もない、独立した一個の実在、すなわち私たちが精神、あるいは心、あるいは霊魂と呼ぶところの目には見えませんが、あくまで現実的な実在なのであります。

人間の持つ理解しがたい複雑さは、人間というものが一個の存在でありながら、やがて土に帰ってゆく物質としての肉体と、感覚を超越した霊魂という全く相異なった二つのものからでき上

がっているという、この事実を考えるとき、その不可思議ななぞは釈然として氷解するのです。

皆様、ソッと胸に手をおいてみましょう。生きていますね。心臓は鼓動し肺は息づいています。それは、あなたの肉体のいのちです。けれど残念なことに、いつかはその心臓の鼓動もやみ、肺の呼吸は止まり、目も見えず、耳も聞こえなくなりましょう。肉体のいのちは、やがて終わるのです。

けれど、更に心の耳をすませて、あなたの一番奥底の声に耳傾けて見てください。時間と空間とを超越し、無限なるものに向かってあえぎ続ける、あなたの魂の息吹きにお気づきにはなりませんか？

深淵のような、限りのない価値をもつ、あなたの魂の実在にジッと目をとめて、ああ、生きて来てよかったと、お思いにはなりませんか？

科学万能の現代です。けれど、それに眩惑されて私たちのほんとうの姿を見失ってはいけないと思うのです。

では、また来週、皆様ごきげんよう。

第十五話　思い出話

皆様、ここしばらく少し理屈っぽいお話が続きましたので、きょうは中休みの意味で、ちょっとした思い出話を申し上げてみたいと思います。どうぞ、楽な気持ちで聞いてくださいませ。

そうですね。もう二十年近くも昔のことになりましょうか、私は長上の命令によって関西の神戸の教会に勤めることになりました。実は、私は神戸の生まれなので私にとってはすべてがなつかしいこきょうなのでした。神戸に赴任して間もなく、私は教会の伝道婦から、Kという家のお嬢さんが、もう何カ月も胸をわずらって寝ているのですが、私が神戸に来たことを知って、とても会いたがっているという話を聞きました。Kの家の長男というのが、私と小学校の同級生で四十数年前のカトリック信者といえば、同じ小学校の生徒の中では、ほんとうに数えるばかりしかありませんでしたので、Kは私にとっては信仰を同じうする貴重な友人でありましたが、この友人も胸を病んで、ある夏、須磨の海岸で若い生命を終わったのでした。今、同じ病気に伏せっている少女というのは、その妹なのです。Kの妹ともなれば、何をおいても見舞ってやりたい信者の

ひとりだったのです。

少女、千代子というその少女は、私の記憶に残る幼な顔をかすかにとどめながら、すでに十八才の美しい娘に育っていましたが、数カ月前から病みついた病身を、床に横たえたままで私を迎えてくれました。

「ご免なさい、神父様。ほんとうに久し振りにお会いする神父様を、こんなかっこうでお迎えして……。」

千代子は、はにかみながら、そう言って、それでも十数年振りに会う喜びを包みきれないように、浮き浮きとした調子で、その後のことなど語って聞かせてくれた後で、

「ほんとうにご免なさいね。でも冬の間は寝ていなきゃいけないのですって。けれど来年の春が来たらお床上げをしますの。全快祝いには神父様をお呼びして、私の手料理をうんとごちそうしますわ。」

と、つけ加えたのでした。それは、その年も暮近い十一月の半ばのことでした。最初の訪問を終え、その家を出ようとして私は玄関の上りがまちで、その母親K夫人を捕え、なにげなく、

「病気の方は大したことがなさそうですね。」

と申しました。ところが、夫人はちょっとあたりをはばかるように声を落として、

「それがねえ、神父様、そうじゃないんです。あれの兄が同じ病気だったのですから、私たちも少し注意をすればよかったのですが、とても丈夫で運動の選手なんかしていたものですから、つい油断したのが悪かったのでしょうか、医者はもう手おくれだと言うんですよ。来年の春までは持つまいって。……ただ、あの子だけが、それを知らないのです。」

ああ！　そうだったのか、と私は、今しがた耳にした少女の声「来年の春にはお床上げをしますの……」とささやいた、少しはずんだ少女の声を悲しく自分自身で繰り返しながら、帰路に着きました。

千代子の病状は、しろうと目には大した変化は見えませんでした。そして、毎週の訪問に「早く春が来ればよろしいのにねえ。」と、きまったように繰り返す千代子の言葉を聞きながら、やがてその年も暮れて行きました。千代子はひとり静かに枕にほおを寄せて、正月のざわめきを聞いておりましたが、そのころから病状の悪化が少しずつ目に見えて来たようです。

ある日、私が訪問を終えて暇を告げようとしますと、母親が私をソッと物かげに呼んで申しました。

「神父様、お医者さんの言葉では、もう三カ月は持つまいとのことです。ところで神父様におりいってお願いがあるのですが……神父様もご存じのように私の夫は熱心なカトリック信者で、ほ

んとうにその信仰にふさわしいりっぱな臨終を遂げてくれましたし、私の長男も母親の私の口から言うのもへんですが、私自身頭の下がるような美しい死に方をしてくれました。ところで、あの娘も生まれながらの信者なのですから、信仰に生きるものとしてこの世に未練を持ったままで、醜い死に方をしてほしくはありません。どうぞ神父様、お願いですから、あの娘によい臨終の心構えを教えてやってくださいまし。神父様なら、きっとおできになりますわね。」

美しい臨終……霊魂の不滅を信じ、永遠の生命への希望に満たされて、明かるくこの世を去る……そう、それがカトリック信者の特徴だと言っていいのです。そして、信者の霊魂の司牧に当たるカトリック神父の重要な仕事の一つは、自分がそのような美しい臨終を遂げることができると同時に、同信の信者たちにも同じように、りっぱな最期を遂げさせることにあると言ってもいいでしょう。私はカトリック神父としての自分に課せられたこの苦しい仕事を、引き受けることを夫人に約束して、その家を出ました。

美しい臨終……道を歩きながら、私はそうつぶやいて、そのときフト思うともなしに、それより六、七年以前に死亡した、私の姉の臨終のありさまを思い浮かべました。というのは、京大医学部を出て神戸で小児科医を開業していた、ある医師に嫁いだ私の姉のことなのですが、姉は、カトリック信者として最期まで強い信仰に生きましたけれど、医学者としてのまちがった誇りから、宗教に対しては故意な無関心をよそおっている夫の態度に、生涯心を痛めていたようでした。その姉が半年ばかり病みついに揚げ句に、腸狭搾という病気の併発を見て、危篤状態に陥りました。長いわずらいに衰弱し切っている身体には開腹手術は、思いも及ばぬことでしたが、それでも最後の手段を見い出そうとして、当時、関西では名の聞こえた名医たちが集まって、立ちあい診断をし真剣に協議しましたが、そこで得られた結論は「絶望」という一語だったのです。医師たちの協議を終えて義兄が、姉の枕元に引き返して来たとき、姉はこう申しました。

「あなた、私の病気は直るのでしょうか。それとも、もう望みがないのでしょうか。心の準備がいりますので、ほんとうのことを教えてくださいまし。」

その問いに義兄は、はっきり答えました。

「卒直に言うが、お前のからだには施す手がないのだ。だから、もう助からぬものと思っておくれ。」

ところが、そばでこの短い会話を耳にした義兄の両親たちが、アッとばかり目の色を変えて騒ぎ始めました。

「まあお前、なんということを言うのだ。病人に向かってそんな残酷な……」

けれど、義兄は泣き騒ぐ両親を尻目に毅然として、こう宣言したのでした。

「お父さんたち、心配しないでください。私の妻はカトリック信者なのです。あなた方にはわからないんです。」

私たちは、ハッと胸をつかれた思いで義兄の顔を見ました。そのときの義兄の面にはそこに居合わせたすべての人々を沈黙させる、なにか冒しがたいものが輝いているようでした。その翌日、病状は急変して臨終が迫って来ました。苦しい息の下から、姉は、かすんだ目をあけて「マリア様のお顔が見たい。」と叫びました。義兄はサッと立って、隣りのへやからラファエルの聖母の額を持って来ましたが、姉の目の見える所に置こうとして、一瞬とまどった後で、そこら辺にあった釘のような物を手にとると、姉の病床の足もとに巡らしてあった、金無垢のびょうぶにグサとそれを打ち込み、それに額をつるしました。ひとりの人間の臨終の場ではありましたけれど、義兄の父親がそれを見て、どうでもがまんがならぬというように、小声で義兄に向かい「なにもお前、金びょうぶを破らなくとも……」と小言を言いかけた瞬間、義兄の鋭い言葉が一座の人の心を打ちました。

「金びょうぶがなんだと言うんです。こんなものはいつかなくなってしまうんだ。だが、この世には永遠になくならないものがある！」

臨終の苦しみをあえいでいた姉に、この言葉が聞こえたのでしょうか、「アア」と、心からの

安堵のため息にも似た大きな息をはくと、夫にニッコリ笑いかけ、笑いかけたままでフッと、こと切れたのでした。ついでですが、義兄は姉の死後、未だ幼なかったふたりの忘れ形見を両手に毎日曜日、欠かさず教会に通う熱心なカトリック信者になりました。その義兄も、今はすでに故人ですが……。

話が脇道へはずれましたが、私は義兄が「私の妻はカトリック信者です。」と大見得を切ったあの言葉と、今しがた耳にしたK夫人の言葉とが、まるで符ちょうを合わせるようにピタリと一致して、一つの真実を大きく叫んでいるのを感じながら帰路に着いたのでした。

だが、それからの私は実はみじめでした。よき臨終の準備をさせる……言葉は簡単ですが、すべてを神の御手にゆだね去った平安な気持ちにさせるということと、あくまでも病気に打ち勝とうという闘病心を起こさせねばという、おもんばかりとが入り乱れて、事はそう簡単ではありません。そうこうするうちに、一月も過ぎ、二月もはや半ばを過ぎようとしていました。ある朝、家人に言葉をかけて病室に入ろうとする私を「ちょっと……」と呼びとめた夫人は、声をひそめて「神父様、この前お願いしたこと、どうぞ急いでくださいませね。足が……」

と自分の両手で大きな輪をつくりながら

「……こんなに、むくんで来ました。お医者さんは、もう十日位と言っていますので……」

と言うのです。私は改めて事態の切迫したことを知らされ、少しゆううつな気持ちで病床の枕元にすわりました。

「ねえ、千代ちゃん。きょうはちょっとお話ししたいことがある。あのね、ナザレトのおとめマリアに天使が現われて、救い主の母になりますか？　と言われたとき、マリア様がなんと答えたか知っているでしょう。そう、『私は神様の婢女ですから、なんなりと神様のお望みのままに！』と言いましたね。この第一の『お望みのままに』という言葉で、神の御子がおとめマリアの胎内に宿るという大きな神秘ができ上がったのでしたね。それから三十三年経って、今度はイエズ様があすは捕われて十字架に磔になるという前の夜、ゲッセマニの園で血の汗を流してもだえながら、三度まで繰り返された言葉を知ってるでしょう。『天の父よ！　この苦しみを私から遠去けてください。けれど、どうでもそうしてくださいとは申しません。すべてはお望みのままになりますように』この第二の『お望みのままに』という言葉で、神の御子が十字架にかかって人類の罪を償われたという大きな神秘ができあがったのでしたね。ところで、私たちのひとりひとりがほんとうに、これらの神秘によって霊魂の救いを受けるためには、第三の『お望みのままに』という言葉が言われなければならないのですが、今度はいったいだれがそれを言う番なのでしょうね？」

私の話の間中、大きな目をあけてまたたきもせず、まじまじと私の顔を見つめていた千代子は突然、私の言葉をさえぎりました。

「わかりました。神父様、今度は私が言う番なのですわ。」

そして千代子は目を閉じると静かに、しかし深い調子をこめて、口ずさみました。

「神様、私はあなたの婢女、どうぞお望みのままになさいませ。」

そして、目をあけるとにっこり私に向けてほおえみかけ、

「神父様、これでいいのでしょう。」

と言ったのです。

それからの十日間、千代子は朗らかに生きました。ともすれば暗くなろうとする家族の気持ちを引き立てようと、ちゃめっぽい、いたずらを考えては家中に笑いをまき起こすのは、死んで行こうとする十九才のおとめ自身であったのです。千代子は迫り来る死を見つめ、死を抱き締め、希望と喜びとを形見にこの世を去りました。臨終の苦しい息の下から、枕辺に寄りそう人々に残した最後の言葉を私は終生忘れないでしょう。

「ねえ、泣かないで、私、お待ちしていますわ。」

これが千代子の遺言でした。

では、皆様、さようなら。

第十六話　魂のいのち

皆様、秋もようやく深まって来たようです。秋は思索の秋と言われます。生きることのわずらわしさに心奪われて、ともするとあまりにも物思うことの少ない一日一日が過ぎて行きます。でも秋はものを思わせるのです。ふけ行く秋の夜、静かに、過ぎた年月を、そしてまた私たちの行末を考え、生きている私の生命がこれでよいのかと反省するのも、秋の聖い仕事の一つでありましょう。

さて、先週は中休みの意味でちょっとした思い出話をいたしましたが、これからまたしばらく、私たちの幸福探求の思索の旅を続けることにいたしましょう。

私たちは、私たち人間というものの持つ複雑さを掘り下げて、人間の本質を理性的動物――すなわち動物的な生活の主体としての物質である肉体と、理性的活動の主人公としての魂、あるいは霊魂といわれるものとの結合――であると見ることによって、私たち自身の生命の第一のなぞを解いたのでしたが、今しばらくこのなぞの鍵を他のすべてのなぞにも当てはめてみましょう。

私たちはすでに、富み栄えるということが、ただそれだけでは決して人間を真の意味において、幸福にはしてくれないことを見ました。またただ支配欲という本能にかられて、術策によってかち得た権力というものも、更には、異性との無軌道な性関係で、人間の持つ性欲の本能を存分に満たし得たとしても、それだけで人間はしあわせにはならないことを考えました。動物なら、それでよいのです。食物と寝る場所と、そして生理的な本能を満たす手段とが与えられてさえいるなら、動物はそれで満足しています。けれど人間はそれだけではしあわせにはなれないのです。

なぜだろうか？　と、問うまでもありません。いつかも申し上げた通り「しあわせ」とは満ち足りることです。充足することです。私たちの生命が満ち充つることです。とするなら、どんなに身は富み栄え、位は人臣の限りを尽くし、愛妾に取り囲まれて性の悦楽をほしいままにしようと、それで人間がしあわせであるはずがないのです。なぜなら、そのとき満ち足りているのは、動物としての肉体の部分だけであって、人間を形成するもう一つの面、すなわち、魂が満たされていないからです。

満ち足りた魂のいのち……存分に満ち足りて、内に光と力と熱とを蔵した輝くばかりの魂のいのち……それを摑まぬ限り、人間は、人間のすべてが人間として満ち足りたとは言えないのです

し、何としてでも、その魂の満ち足りた生命を生きぬ限り、人間はしあわせにはなれないのです。ちょうどお腹がおいしいごちそうでいっぱいになった時の満ち足りた食後の満腹感と同じように、人間の魂も精神的な、より高尚な霊的糧によって内に満ち溢れる充足感を求めています。ああ、それこそ人間が生まれ落ちた瞬間から、オギャーと泣く呱々の声に始まる人生の旅路において、飢え渇くがごとくにあえぎ求める幸福なのであり、最後の息を引き取る間際まで、この充足を求めて幸福を探し求める行脚の旅を続けるのが、すべての人間に課せられた宿命なのであります。

皆様はレーニンの言った「宗教はアヘンである」という有名な言葉をご存じでしょう。徹底した唯物思想の上に組み立てられた共産主義という一つの社会機構は、人間精神の実在を否定し、魂の充足という幸福感を抹殺して、人間をただの動物と見なすことによって、その論理を展開しているのです。現代の世相の中ににじみ出ているすべての不幸を、資本主義という一つの社会形態の罪に帰し、この誤った社会機構を闘争によって打ち破り、搾取者も被搾取者もなく、すべての人々が富を平等に分配されるという共産世界を打ち立てることによって、人間を幸福にしようとします。

もちろん、私は資本主義の持つ欠陥を否定するものではありません。のみならず先ごろなくなられたローマ法王ピオ十二世と共に、カトリック教会は資本主義世界における個人財産の使用権

の濫用を糾弾し続けて参りました。けれども、現代の人間のすべての不幸の原因が、ただ社会組織の欠陥だけにあると主張する説には、私は賛成できないのです。

共産主義は富の平等を主張します。世の中に金持ちも貧乏人もなく、すべての国民が完全に平等な富を持つということは、なるほど、口で言えば、いかにも美しく聞こえますが、こんなことが実際に行なわれるためには、人間の持つ自由意志を根こそぎ奪い取るような恐ろしい警察の強権発動がなければならぬということを理解することは、そんなにむつかしいことではないと思います。たとえば、かりに今、全国民の持っているものを全部取り上げ、改めて全国民に平等な給料を払い始めたと仮定しましょう。人間は自由意志があるのですから、そのもらった給料をどう使うかは、国民ひとりひとりの自由であるはずです。たとえば、甲はその給料一杯の生活をして、何も残さぬようじょうずに使い果たすでしょう、乙は何かの思惑があって生活費を極度に切りつめて、少しずつ財産を残すことができますし、丙はお酒を飲みぜいたくな生活をして借金を作るかもしれません。こうして二、三年もたてば、甲は依然として無一物、乙は相当の財産を残し、丙は借金で首がまわらなくなっているでしょう。借金に苦しむ貧乏人と財産を残したお金持ちとが早くも出現して来るわけです。もしも、そういうことがないようにしたいと思うなら、いっそのこと、もらった給料はその月のうちに必ず全部使い果たさねばならぬ。さもないと監獄にぶち

込むぞという法律でも作って、警官が目を光らせていなければならないでしょうね。

それはそれとして、今、かりに一歩譲って、富の平等ということが、なんらかの方法で実現できたと仮定してみましょう。だが、果たして人間がそれで、どれだけしあわせになれるでしょうか？

今、階級闘争といって赤旗を振っている人々が、共産主義の世界ができ上がると、そのとたんに、皆、孔子様のように悟りすました聖人になるとでもいうのでしょうか？　共産主義の世界では、人々は絶対に他人と争わず、けんかもせず、なまけもせず感情に走ることもなく、青年男女は絶対に性的な誘惑に陥らず、結婚した男女は決してよろめくことなく、他人の妻を思うこともなく、警察も監獄も必要のない完全無欠な人間になるとでもいうのでしょうか？

とんでもないことですね。富が平等に分配され、搾取者も被搾取者もない世界が出現したとしても、そのとたんに人間の動物性が抹殺されるわけではありません。人間は依然として、食欲や性欲や支配欲などの本能を持っているでしょう。共産世界においても、青少年は押さえきれない性（セックス）の衝動に悩むことでしょうし、その衝動のおもむくままに、互いに越えてはならぬ垣根を越えて、良心のかしゃくに悩むこともありましょう。共産世界においても、人々の心には依然として憎しみが宿り、醜い争いが絶えないでしょう。共産世界においても依然として、愛情の裏切りや忘恩やねたみや軽べつなどが、横行するでしょう。共産世界においても依然として、夫婦間の

愛情の冷却や倦怠期が訪れ、そのすき間に乗ずる三角関係などが、人々の心を暗くするでしょう。共産世界においても――科学の進歩によって現在ある流行病などは、影を消すかも知れませんが――しかし依然として、病気が、そして死が不吉な影で人々の心をおびえさせ、愛しあうものを冷酷に引き離して行くことでしょう。今、私たちが持っている、こうした不幸の数々の中で、ただ「貧しさ」がなくなるというだけで、それ以外のすべては依然として、私たちの心をむしばみ続けることでしょう。のみならず、私たちの貧しさがなくなった代償として、今の私たちがせめてこれだけはと大事に握りしめている、ささやかな喜びの一つがなくなるのです。それは「自由」ということです。共産主義世界においては、各個人の自由意志というものは、国家という強大な権力者によって搾取されてしまうのです。ということは「共産主義が着々と効を奏しつつある」と豪語しているソ連の、あの陰惨な国内事情や、自由を求めて立ち上がったハンガリーの不幸な愛国者たちの上に襲いかかったソ連の残虐無比な鉄槌を一目見ただけで、明きらかなことでありましょう。共産主義陣営に加わった東ドイツから、毎日毎日数千の人々が自由を求めて西ドイツへ流れ込んで来るという事実が、何を物語っているでしょうか？　それでもなお、人々は富が平等に分配されたから、私たちは幸福だと、うそぶくでしょうか？

とんでもないことだ！　と、も一度申します。私たちの求めている幸福とは、そんなものではないのです。また、私たちの心をむしばむ不幸とは、そんなことで消え失せるものでもないのです。幸福とは、そして不幸とは、もっともっと内面的なもの、奥の深いもの、いわば人間の魂の奥底の問題なのであります。

もちろん、私は搾取者も被搾取者もない世界、働きたい者にはいつでも職が与えられ、病気になっては、すべての人が安心して療養でき、生涯の勤労の報酬として安らかな老後を送ることができる……そういう世界が一日も早く来ることを念願しますし、なんとかして国民皆の力で、そういう世界を出現させるべく努力せねばならぬと思います。しかし、それは憎しみや闘争によって、かち得られる世界ではないはずです。また一つの社会機構を国家という強権がむりやりおしつけてでき上がる世界でもないのです。それは全人類が愛しあい、いたわりあい、なごみあう平和な道義の上に始めて築かれる理想の世界なのです。もちろん、それには時間が、かかりましょう。けれど、私たちのひとりひとりが満ち足りた魂のいのちのしあわせを生きるということは、そういう世界の実現への一番近道なのであると同時に、またそれ自身が私たちの今生きているこの現在の生命の目標でもあるのです。ということは、そういう理想の世界が来た時に、始めて人間はしあわせになるというのではなくて、そういう世界を実現しようと、たゆみなく努力しつつある現在においても、私たちはこの環境の中において、今、幸福であり得るのですし、また幸福

でなければならないということなのであります。

しあわせは満ち足りた生命だと申しました。けれども、今の私たちには貧しさや病気や、その他の社会環境から来るところのさまざまな不如意な事柄があって、今すぐ私たちのからだの生命が満たされることができないとしても、せめて、道義的な魂の生命を満ち足らしめることによって、内面から溢れ出て来る幸福感によって、肉体の不幸の影をおおうことができるのです。

身は美食に飽き絹に包まれ、高位官職にありながら、しかも心の中にゾッとするような空虚を感じて生きる、うつろな生命ではなく、たとえ、貧しく、またいえぬ病いにさいなまれていようと、心満たされて、ほのぼのとした喜びに生きる魂の幸を……ああ、私の生命が、その奥底から、むせびつつあえぎつつ求めていたものは、それなのだったと悟りましょう。そして、この富でも権勢でも快楽でも、満たし得なかったこの貪欲な魂をどうしたなら満たすことができるのかを…皆様、生きる生命は短いのです。その短い貴重な生命の真剣な叫びを、真剣に聞き取ろうではありませんか？

虫のすだく声が聞こえます。どうやら秋の夜がふけて来たようです。では、皆様おやすみなさい。

第十七話　ただ一つのこと

生き生きと内面的に充実した魂の生命とはいったいどのようにしてつかまえることができるのでしょうか？　きょうからしばらくこの大きな深い問題と取り組むことにいたしましょう。これは確かに大きな問題です。人々は一生に一度は、「真の幸福」となるはずの、この魂の充足を求めはするのですが、それがあまりに大きく深い問題なので、しまいには何だかわけがわからなくなって、この幸福探求の道をあきらめてしまうようです。けれども、これをつかまぬ限り人間はしあわせになれないとするなら、私たちはどんなことがあっても絶望することなく、この思索の旅を続けねばなりません。ちょうど考えるには一番適当な秋の半ばです。しみじみと自分の心に問いかけながら、ご一緒に私たち自身の魂の奥底に入り込んで行くことにいたしましょう。

さて、魂の生命にはいつかもお話しましたように、知恵と意志という二つの精神的活動の能力があります。そして知恵は知るために、すなわち「真理」を追求するために、意志は愛するために、すなわち「善」を欲求するためにあるのです。「知る」ということはうれしいことですね。

知りたい！　私たちは物心つくころからこの知りたい！　という欲望にかられます。子供は何でも尋ねるものです。「なぜ？」「どうしてなの？」「それからどうなるの？」まことに昔の哲学者が申しましたように、「人間とは『なぜ？』と問う動物」なのですね。

遠く歴史を振り返ってみますと、人間は実にたくさんのことを知って来ました。何万年かの昔、人間がようやく石をもって簡単な武器や生活の道具などを作った石器時代から、エジプト、ペルシャの古代文化の時代を経て現代に至るまで、なんとたくさんのことが学ばれ、研究され、そして神秘のベールをはぎとられて、白昼にさらされて来たことでしょうか？　いや、何万年もさかのぼるまでもないこと、西暦紀元が始まってからのわずか二千年の間に、人間の知恵はなんとたくさんの知識を獲得して来たことでしょう。日食や月食を見て天変地異の前兆だと言っておののき、雷（かみなり）におへそを取られると言って恐れた時代が、そんなに遠くない昔にあったと考えるだけで少し気がへんになるようです。地球は丸いものではなくて平らかなもの、そして地球のまわりを太陽が回っているのだ、などと言ったら今の小学校の子供たちでも、プッと吹き出すでしょうね。

私たちは知ったのです。無気味な日食の神秘を……、地球自身が電気を帯びて放電しているのだという雷の鳴り轟くわけを……、そして天の川と呼ばれる夏の夜空の銀河の意味する銀河系の宇宙のなぞを……。人間の知恵ははてしもなく巨大な大宇宙の中に、そのメスを突き込んだのでした。

動物の死体には、ひとりでにうじがわくと昔の人はまじめに考えました。もっと昔の人々は病気はすべて神のたたりだと信じました。けれど私たちは知ったのです。腐った肉片や便所の中にうじがわく訳を……、そしてDDTや予防ワクチンで伝染病の経路を閉ざす術（すべ）を知りました。更に私たちは動物の肺や胃や腸など、すべての内臓器官を白昼に取り出し、それがどのようにして成長し、どんなに不思議な生殖作用によって、次の世代を生み出すかを、すなわち生命の最も奥深い神秘をあばいたのでした。

知識が、とくに自然科学の分野において新しい知識が発達すると共に、それに伴ってその新知識を基礎とした新しい応用科学が、これまた恐ろしい勢いで発達して来ました。日本においては、ついこの間まで人々が頭にチョンマゲを乗せ、江戸から京まで東海道五十三次をかごに揺られて一カ月、親子水盃（みずさかずき）を取りかわして旅をしたという時代がありましたのに、今日（こんにち）では東京、大阪間、飛行機に乗って一時間と四十分、汽車に乗ってさえビジネス特急六時間半の夢があっさりと実現しているのです。テレビがカラー時代に入り、映画はすべてワイルド化し、レコード界はステレオ時代を迎えようとしています。大都会には自動車がはんらんし、各工場のオートメー

ション化はもとより、各家庭にも電気冷蔵庫や電気洗濯機が主婦の仕事をスピードアップしています。あらゆる国々の航空会社の網の目のように交錯した航空路が、世界中の空をおおっています。戦後立ち遅れた日本ではありましたが、今や、日本をも含めて私たちの住むこの地球の上には、滔々として最も高度な文明の波が押し寄せているように思われます。これがここ数十年来、人間の知恵の成し遂げた成果でありました。そして、人間自身が自分自身の成し遂げた人知の進歩の跡を振り返って、ただぼうぜんとして驚嘆しているありさまであります。

さて、皆様、ここで少し立ち止まって考えてみたいのです。皆様、どうぞ私の次の問いに卒直に、はっきりと答えてみてくださいませんか？　皆様は、人間というものがこの文明の進歩発達につれて、少しは以前よりも、ましな存在になったとお考えですか？　どうでしょう。ほんとうに卒直に言ってどうお答えになりますか？

なるほど、野蛮な食人種や首狩民族はいなくなりましたね。けれども、夜中に他の部落を襲って、その首長の首を血祭りに上げるというのと、なんの戦闘能力も持たない老人、子供を含めん十万という人類の命を、そのせっかく築き上げた平和文化の産物もろとも一瞬にして阿鼻叫喚と廃墟に帰してしまう原爆を人類の頭上に落とすというのと、どちらが野蛮だとお思いですか？食人種の部落と部落とが鋭い槍の刃をといで、虎視眈々として夜襲の隙をうかがっている無気味なありさまと、ボタン一つで他国の全国民をズタズタに引き裂いてしまうミサイルの製造の競争に、躍起となっているいわゆる先進国同志の現状とを見比べて、どちらが野蛮で残酷で無気味だとお考えになりますか？　いや、まさか、いくらなんでも、そんなことは起こるまいと思いますから、それは考えぬことにしましょう。日本の中のできごとだけでたくさんです。勤務評定や道徳教育を政府のメンツにかけても、やりおおせてみせると張り切る、その政府のメンツもさることながら、それを阻止しようとして、子供たちの人格形成のための教育と指導に当たる教師たちが、児童の登校拒否を策謀したり、スクラム組んでの摑みあいから、鐘や太鼓を持ち出しての騒音妨害など、更には、先生たちに教えを受け、その指導によって知識を学ぶために大学に入ったはずの大学生たちが、教室を占領して教授に暴行を働き試験拒否を唱える世相です。また、国民の血税による数千万円がどこかに消えてしまったり、売春禁止法案もあってなきがごとく、闇の女が肉欲の市を開張し、色恋沙汰、刃傷沙汰の絶える間もない現代の世相を眺めて、「人間というものが、科学の進歩や知識の発達につれて、少しでも昔よりは『しあわせ』になった。」と皆様はお考えになりますか？　あるいは「昔よりは少しでも『賢く』なった。」とお考えでしょうか？　私には、少なくとも私にはそうは思われないのです。人間は依然として不幸です。そして人間は依然として愚かです。もしかすると、何も知らなかった昔よりも、もっと愚かに、もっと

不幸になっているかもしれません。少なくとも昔の人々は原爆や水爆の恐怖を知らなかったのですし、人類お互いが現代ほど激しい憎悪と猜疑でいがみ合った時代もなかったでしょうからね。

皆様、知りたいという欲望は無意味にあるものではありません。人間の胃袋が食物を欲求するのは、それによって栄養を摂取して、成長して行くためでしょう。魂が真理を追求するのも、それによって、魂の糧を取り入れ魂が成長し、胸ふくらむような内面的に充足した魂の生命を生きるためであるはずです。その魂の糧を忘れ、ただ知りたいという欲求だけに追われて、必要でもないことをいたずらな好奇心を満足させるために、知ってみたところで魂は依然として飢え渇き、人間は依然として不幸で愚かであるでしょう。

必要でもないものを……と申しました。そうです。人間はよけいなことを少し知り過ぎたようです。と言っても、私は決して科学を軽べつするものではないことをおことわりしておきますが、しかし同時に、これだけは、はっきり断言いたします。今、人類は、その英知を絞って月にロケットを飛ばそうとしています。近い将来成功するでしょう。そして、未だかつて人類が眺めたことのない月の裏側を知るでしょう。だが、はっきり申しますが、それが……月の裏側を知ったからといって、それがいったい、なにになるのですか？　それで人間の魂が満たされ、人類がしあわせになるというのですか？　一度、月の裏側の秘密をあばいた人類は、休む暇もなく今度

は他のもっと遠い天体、火星や金星などの探求を始めるでしょう。そして、そしていったいどうなるのですか？　私は重ねて申しますが、決して科学を軽べつするものではありません。しかし、月ロケット一つを作る費用があったなら、数百万の住むに家なき人々に暖かな家を与えることができる、あるいは、サハラ沙漠を肥沃な緑の平野に化することができる、というのに、それだけの金を使って、今、急いで月世界を探険する必要がいったい、どこにあるのでしょうか？　それよりもなによりも前に、全人類が今、すぐにでも、その知恵を正しく用いて知らねばならぬことが、一つ、そう、たった一つあるのです。ほんとうに魂の糧となる真理が、ほんとうに魂を満たすことのできる真理が……。そのたった一つの真理を見落としては、人間がなにを知ってもむだなのです。否、知ることはかえって人々を不幸に陥れることになるのです。

ああ、そのたった一つのことを見忘れているというところにこそ、人工衛星や、月ロケットなどの、輝かしい科学の勝利が、そのまま直ちに、人類殺戮の恐るべき武器と変化する恐怖が潜んでいるとも言えるのです。たった一つのことを人類は見落としている。その、見落としている、たった一つの事実によって裏付けされぬ限り、人類の知恵は、もうこれ以上進んではいけないのです。

皆様、人間の知恵がもうこれ以上愚かな迷いを続けぬように、今、改めてこの見落とされた一つの真理に心を向けようではありませんか。といっても、それは、月の裏側を見るほどにむつかしいことではありません。ただ、謙虚な気持ちになりさえするなら……そうです。もしも、あなたが、それを謙虚な気持ちで学びたいと望むなら、冷たく澄んだ秋の夜空の星々が、また、野に茂る秋の七草が、そして、あなたのお家の庭の片隅で、コロコロとすだく秋の虫が、あなたにそっとそれを教えてくれるでしょう。

天地万物が……心ない天地（あめつち）の森羅万象でさえもが、それを知っているのです。ただひとりそれを知ろうとしないのは、わずかな人知の成功に思い上がった傲慢な人間だけのようですね。

では皆様、また来週まで、ごきげんよう

さようなら。

第十八話　驚いてみたい！

国木田独歩の小説の中に、次のような短篇ものがあったと記憶しています。なんでも数名の青年たちが集まって、座談に花を咲かせているところでした。そのうちにひとりの青年が言いました。「君たち、今、一番なにがしてみたいと思うかね。」次々といろいろな答えが飛び出しましたが、最後になにも言わないひとりの青年に皆が尋ねました。「君はなにかしてみたいことがないのかい。」その青年は、そう言われてゆううつそうにただ一言答えます。「僕かい、僕のしたいことはただ一つ、それは『驚いてみたい』ということだ。」と。

「驚く」！　そういえば現代人は「驚く」ということをどこかに置き忘れてしまったようですね。フン、となにを見ても鼻先で軽くあしらってしまう不感症、それも現代病の一つかもしれません。

現代人の目からは、とにかく「不思議」というものは影を消してしまったようです。昔はいろ

いろな不思議が多かったようですが、「幽霊の正体見たり枯尾花」で、不思議と思ったものが科学的に研究してみると、不思議でもなんでもない至極あたりまえの、天然自然の現象の一つなのだと納得する、科学的な知能が発達した現代人には、すべてのものが自然の法則というわくの中のできごと、何一つそれからはずれたものは、言いかえれば非科学的なものは存在しないのだという考えが、しっかり植えつけられているようです。だが、驚くことを忘れた気持ちは淋しいと思います。驚いてみたい！　素直な気持ちで、アッと驚いてみたいと言った、あの独歩の小説の主人公の気持ちに、私も同調できるような気がいたします。

ところで、科学の発達した現代では、もう私たちを驚かせてくれるものはなに一つないのでしょうか？　あらゆることが、なんの不思議もないあたり前のことばかりなのでしょうか？

皆様、今は秋です。やがて万物死滅の相をとる暗い冬が、ほんとうの空をおおうことでしょう。しかし、それから数カ月、やがてまた、一陽来復の春が……うららかな春がやって来ますね。そして、東北の野や山にも短い期間ではありますが、短いだけにその短い春を思いきり楽しもうとするかのように、色とりどりの花が咲き乱れます。春になったら花が咲く！……これはきわめて当然なことですね。それこそ自然の法則のわくの中のできごとに違いありません。けれど皆様、かりにですね、地球上が植物もなにもない荒涼たる荒野原であって、皆様の中のどなたかが、

始めて一番最初の花を見つけたとしたら、どんなに驚かれることでしょうね。まして、思わずその花を手に取って見て、その花弁の中の生命の神秘に気がついたら、どんなにか驚かれるに違いありません。けれど、毎年毎年、春になったら花が咲くのだということになると、それはもうあたりまえのことになるのです。そして、言うのです「春になったら花が咲くのはあたりまえだ！」と。けれども最初のただ一度が驚くべきことであって、それが繰り返されたなら、もう別に驚くべきことではないというのは、どういう理窟でしょうか？　ただ一度のことが驚くべきことであるなら、それが一度ではなく、毎年毎年繰り返されるということは、なおさら驚くべきことではないのでしょうか？

さて皆様、「驚き」とは、思いがけぬものを発見したときの、あるいは予期したものではあっても、それを思いがけぬ所に、思いがけぬ時に見い出したときの、心のときめきを意味します。ところで、野に咲く可憐な草花の一つ一つに、私たちは何を見い出すでしょうか？　科学者の、――驚くことを知らない科学者の、冷静なひとみを開いて、一本の野の草を解剖してみましょう。

まだ堅いつぼみである間は、小鳥などに傷つけられないようにと、ちょうど姫君に仕える騎士のような力強い萼がそれを守っていますが、やがて、つぼみは成長して美しく開花します。どん

な巧みな織姫も作れぬ柔らかな膚ざわりと、美しいニュアンスに富んだ色調の、その花弁を、そっと押し開いてみますと、おしべとめしべに花粉がこぼれて、そこに花の生命のいとなみの神秘が潜んでいますね。と、フト、どこからかえもいわれぬ芳香が漂って来ます。そう、それは、そのはなびらの底にたくわえられた芳わしい蜜のかおりです。と、その蜜の甘いかおりに吸い寄せられるように、一匹の蜜蜂が飛んで来て、喜びに羽をふるわせながら、花弁の中に頭を突込み、むさぼるように蜜を吸います。が、やがて片時の後には蜜蜂は他の花に飛び移って行きました。花は、それで目的を達したのです。蜜のかおりのわけがわかりました。ご覧なさい。蜜蜂はちゃんと、その小さな足の裏に花粉をつけて、それを隣りの花に運んだのでした。こうして蜜蜂やちょうちょうなどの小さな協力者のおかげで、おしべとめしべの花粉ができ上がり、やがて子房の中に種が宿ります。短い春を美しく飾ってくれた花々は、やがて色あせ枯れ落ちますね。しかし、その時にはちゃんとりっぱに、次の春のためのしたくができ上がっているのです。

蜂やちょうを招き寄せるための、あの甘い蜜を草花はどのようにして作るのでしょうか。も少し科学的な研究を続けてみましょう。葉のもっている葉緑素という力が、空気中から炭酸ガスを吸い込み、地中から草の根が吸い上げた水分と合して含水炭素を作り、それを澱粉化し糖分に変化し、その草花が数万年昔、先祖から受けついだ秘伝ともいうべき、特殊な材料をまぜ合わせ

て、**その花独特の芳香を持った、かぐわしい蜜に仕上げるのです。草の蕊は実はりっぱな砂糖工**場だったのですね。こうして、おいしい野の宴を用意して蜂やちょうなど、野の賓客を招待しますが、ごちそうになった小さな客たちは、そのお礼にと花粉の交配を手伝うのです。

ところで皆様、あなたの科学者としてのひとみが、解剖のメスを追ってそこまで一つの花の神秘の扉を切り開いたとき、その切り開かれた神秘の奥底で、じーっとあなたを見つめている一つのものに、つき当たったことにお気づきになりませんか？　いや確かにあなたは、それに気づかれたはずです。あなたが真の科学者であるなら——世の中にいかなるできごとも、それに相当する原因なしには起こり得ないと信ずる冷静な科学者であるならば、あなたの目は、否でも応でも、その一つのものを見い出されたはずです。そう、あなたは「そのもの」を見ました。そのものはまたたきもせず、じーっと、切り開かれた草花の生命の神秘の奥底から、あなたの目を見つめています。「そのもの」はあなたの科学する心が、「そのもの」を見い出すことを待ちわびていたのです。あなたのひとみと「そのもの」のひとみと、目と目とが、ピタリと合いましたね。けれど、そこであなたはちょっと、戸惑いをして少し困って目をそらしました。あなたの心を追いかける「そのもの」のまなざしを振り払うように、頭を振り手にした花をポトリと地面に落として、あなたは、そっと、そこを立ち去ろうとします。だが、いけません。どうか、お待ちなさ

い。この貴重な一瞬を取り逃してはいけないのです。待ってください。そして、少し考えてください。私は先週「もしあなたが、あなたの知らねばならぬ、たった一つのことを、謙虚な心で学びたいと望まれるなら、秋の七草があなたにそっとそれを教えてくれるでしょう。」と申しました。花はこう言っているのです。

「どうです？　私は賢いでしょう。私の子孫を残すために、私はあなたの想像もできぬようなすばらしいことを知っています。だれがそれを教えてくれたと思いますか？」

さあ、今度はあなたのお答えになる番です。この小さな名も知られぬ野の草花の一つに、こんなすばらしい賢さを与え、こんなに大事に守り育ててくれるものは、いったい何ものなのでしょうか？　花びらの奥底の「そのもの」は、あなたをじーっと見つめながら、あなたの答えを待っています。あなたはおずおずと答えますね。

「何だか、よくわからないけれど、それは人間の知恵をはるかに越えたはてしない知恵を持つものだ。そして、それは人間の知恵のように冷たく、とぎすまされたものではなく、暖かな、限りなく暖かな愛に包まれた知恵のようだ。」

が、そこで、あなたの科学者としての傲(おご)りはちょっとつまずき、そして、あわてて言い足しますね。

「だが、何にも不思議はない。それが大自然の摂理というものなんだから――」と。

大自然？　よろしい、名前などはどうでもよいのです。けれど、あなたのいう大自然が、すばらしい知恵と限りない愛情とを持っているということは、絶対に疑い得ないことです。知恵と愛、……私たちは人間の魂の問題のところで、この二つこそが魂の持つ霊的活動の能力(ちから)だと考えました。そうです。この大自然――とあなたが呼ばれたものは、知恵と愛とを持つ限りない霊的主体なのだということになります。ところで、なぜ……なぜ、それを「神」と呼んではいけないのですか。私たちが何気なく足の下に踏みにじろうとした野の草花の一つを手にとり、この小さな草花の一つ一つでさえもが、目には見えぬ神の限りなき知恵に導かれ、限りなき愛情にみとられてあることを知り、その草花の一つの中にも、神の創造の御手の跡があまりにも歴然と印されていることを悟って、思わず愕然としてその花を手から取り落とすとき……、ああ、この心からの驚きこそ、私たちの魂が求め求めていた、たった一つのものなのです。そしてこの草花たちが可憐な唇をいっぱいに開けて、人間に悟らせようと叫んでいた「神」という一語こそ、全人類の知恵が何よりも先に知らねばならぬ、たった一つのものなのです。

野のありとあらゆる草花を、分類し、総合し、それに名前をつけたり、またその名前を暗記したりすることは、いわゆる植物学者にまかせておきましょう。そういう知識は、私たちの魂の成

長と充足とになんの関係もありません。ただ私たちに必要なただ一つのことは、一つの草花の中にも潜み給うものを――科学者のメスの切り開く植物の生命の神秘の奥底に、じーっと私たちを見つめ、私たちから見い出されることを待ちわび給うものを――その一つのものを見い出して、そっと謙虚に口ずさむことです。

『神は存在するのだ！』と。

皆様、神が存在する！　ということが、やがて私たちの魂を満ち足らしめ、限りなくしあわせにしてくれるためには、もちろん、まだ、もっともっと「神」について知らねばならぬことがあります。けれど、野の草花の一つでさえもが、神の限りなき知恵と愛情とで、守られているということを知っただけでも、なんとなく、ほのぼのと明かるい希望が胸の底から湧き起こっては来ませんか？　ただそれだけで、なんとなく、生きているこの世の生命が姿を変えたようにはお思いになりませんか？

皆様、きょうも静かに暮れて行きます。人の世のさまざまな騒音も静まり、秋の夜がやって来ました。どうぞ、今夜、おやすみになる前に一度、目を閉じて静かに、そっと、次の一語を口ずさんでみていただきたいと思います。

「神は存在する！」と。

では皆様、来週まで　さようなら。

第十九話　虫けらの知恵

皆様は、こんな話をご存じでしょうか？　それは有名な昆虫学者ファーブルの著書の中に読まれるある種の昆虫の生態であります。その昆虫というのは、日本でくまん蜂と呼ばれる蜂の一種なのですが、この蜂は産卵期になりますと、自分の体よりもずっと大きな、たとえば蟬のような他の虫を襲います。そしてとびかかるや否や間髪を容れず、その昆虫のおなかのある一点を、自分の針で一突きします。その一点というのが目に入らぬほど小さな場所ですが、実は、その昆虫の運動神経の中枢に当たるので、刺された昆虫は、ずっと生き続けてはおりますが、ただからだを動かすことができなくなってしまうのです。その身動きできなくなった昆虫の生きたおなかのひふの下に、蜂は卵を生みつけます。やがて卵からかえった蜂の幼虫は、運動神経のまひした昆虫の生きたからだをえさとして成長して行くのです。これは、そのくまん蜂が大昔から繰り返して来た産卵の方法だということです。

また、くもの一種で「落とし戸ぐも」と呼ばれる昆虫の、巣を作る技術をご紹介しましょう。

このくもは柔らかな土地を選んでそれを掘り、深さ八糎、直径一糎半位の細長い円筒形の巣を作るのですが、その時、その内面をしっくいで固めてから、その出口に「落とし戸」を作るのでたいへん有名です。その戸をちょうど円筒形の上部にぴたりとはまるように、円形に作り、そして、三十本ばかりの繊維でもって、その戸の一方を円筒形の上部にしっかりと結びつけますから、戸はちょうどちょうつがいで とめたようになり、押し上れば開き、放すと閉まる「落とし戸」になります。ところで、も一つ不思議なのは、そのちょうつがいと反対側にある円筒形の上部に、三十個ぐらいの半円形の穴が並んであけられるのです。それは意味のないことではないので、外部から侵入者が入り込もうとすると、くもは頭の上の落とし戸をしっかりとつかまえると共に、あまった足をこの穴に引っかけて、あけられぬようにがん張るのです。つまり、侵入者を守るための足がかりとして、この穴は実に不思議な役割を果たしているということです。

最後に、も一つ、面白い例を上げておきましょう。かっこう鳥に属するある種の鳥は、決して自分の卵を自分で暖めようとしないで、必ず他の鳥、主としてうぐいすでありますが、他の鳥の巣を捜してそこに卵を生み落として行きます。すると、うぐいすはそれを自分の卵と一緒に暖め、かえし、そしてえさを与えて一人前のかっこう鳥に育つまでめんどうを見てやるというのです。かっこう鳥はなんと狡猾でなまけ者だろうと人々は笑っていたのですが、実は、そうではなかっ

たのです。そのわけをかっこう鳥自身知ってはいないでしょうが、それには深いわけがあったのでした。かっこう鳥は大自然の広大な王国において森の番人という役目を受け持ったのです。森の木を食い荒らす無頼漢のような毛虫を徹底的に追い払う役割をになったのです。かつて、この毛虫の害は非常に恐ろしいものであって、そのまま放置しておきますと、鬱蒼と茂った森林も数週間で丸裸にされてしまうくらいに、猛威を振るったと言われています。けれど、情容赦もなくこの害虫を食い尽くしてくれる、かっこう鳥がいてくれるおかげで、天然の宝庫は無疵に守られるのですがそのためには、かっこう鳥は自分の卵を自分で暖める時間も持たないのです。けれどもし卵をかえさなかったならば、かっこう鳥の種族はたちまち断絶してしまうでしょう。そこで、かっこう鳥は卵を自分で暖めるという任務から解き放され、他の鳥が代わってそれを暖め、かえし、育ててくれることになり、かっこう鳥は安心して、森の小さな盗人たちの討伐に専念することができるのです。

さて皆様、以上三つの例を取り上げてみましたが、第一の例は、種族保存のための攻撃の最も巧みな手段を示しており、第二の例は、防御のためのすばらしい知恵を、第三の例は、相互協定の妙味を現わしています。攻撃し、防御し、そして、ときには相互に協定を結んで助けあう。しかも、そこに現われた驚くべき賢さ……真に大自然の姿は、ひとみをすえて見れば見るほど、それを細かく分析すればするほど、なんとも言えない造化の妙を示していて、ただ驚嘆するばかりです。

ところで、このような生物の知恵を私たちは本能と呼んでいます。生物学の教科書をひもとくまでもなく、すべての生きものには、本能と知能という二つの働きがあって、本能が非常にすぐれているものは知能が低く、知能の発達のていどに反比例して本能の方が弱まっていることは、ご承知のとおりであります。知能とは、習い、覚え、反復しつつだんだんと進歩上達するものですが、本能は、模倣にも教育にもよらず、生まれつきに備わっている能力であると言われます。

皆様に、ここでご注意願いたいことは、私たちはだれでも、そのことをその点まではなんのちゅうちょもなく、はっきりと認めるのですが、それから先のことについては、なんの疑問も起こそうとはしないということです。どうして、もう一歩進んでそこに「なぜ?」という問いを発してみようとしないのでしょうか?

昔、イエズス・キリストを裁いて十字架の刑を宣告したローマ総督ポンシオ・ピラトは、自分の目の前に引き据えられた捕われのキリストの口から「私は真理に証明を与えようとて来たのだ。」という言葉を聞き「真理とはいったい何なのか?」とキリストに問い返しましたが、ふとした好奇心でそう聞いてみただけなので、別にキリストの返答を待つつもりもなく、そう聞き返

しただけで、そのまま席を立って、官邸の広場に集まったユデア人の騒ぎに出かけてしまい、ついに永遠に、キリストの答えを聞かずじまいになりました。ちょうどそれと同じように私たちも、たとえば小さな昆虫の持つ、想像を越えた本能の働きに驚嘆し、その本能が親の仕事の模倣でも教えられたのでもなく、実に生まれながらに備わっている驚くべき能力なのだと認めながら、そして、当然、心の中では「いったいどうして?」という疑問の声の起こるのを聞きながら、も一つ真剣にその疑問に対する答えを求めないままに、ついに永遠に一つの重大な真理を見落としてしまっているのではないでしょうか?

本能は「習得した知恵」ではなく「注入された知恵」といわれます。「注入された知恵」……よくわかっていただきたいと思います。この注入された知恵のよって来る原因を、突きとめようとして、ある人々は、ソヴィエトの生物学者パヴロフの「条件反射」という唯物論的学説に基づき、非常に複雑な反射活動として説明するという、むだな努力を重ねているようです。けれども、これは絶対に意識外の反射活動によって説明できるものではありません。くまん蜂が他の昆虫のおなかにある運動神経の中枢……それを捜し出すのには、深い学問と経験とを積んだ最も巧みな外科医でさえも、困難を感ずる、その目にもとまらぬ一点を、ただ一突きで当てるという知恵や、落とし戸ぐもが、その巣を作るのに最も適した土壌を探り、そして、落とし戸を引き開けられな

いようにと足がかりになる穴をあけたり、果ては、かっこう鳥がその任務に邁進できるために他の鳥が協力するという状態が……つまり、生物の身体のある一部の神経が刺激されて、無意識的な反応を示すという限られた活動ではなく、その全存在が一つの意図を持ち、一つの目的に向かって、完全無欠ともいえる仕事をやり遂げるということは、パヴロフ流の条件反射等のあずかりしらぬところであるということは、少し注意して研究すればすぐにでも知れることなのです。ですから、……実は、私は、このお話を準備しようと思って、現在高等学校で使用されている、五、六種の文部省検定による生物学教科書を手許に揃え、この問題について、教科書がなんと言っているかを確かめてみました。そのうちのただ一冊だけが、相当のスペースをさいて、それを反射活動で説明しようとしているだけで、他のすべての書物は、「本能と知能」の項で、ただ、本能を生まれつき備わった能力であると断定することだけで満足しています。私は、これらの書物が文部省検定の教科書なのですから、もちろん、それから先のことは、それを教える教師の力量に委ねられてあるということが、きわめて賢明なことだ、とは思います。けれども、もしも、教師たちが、それから先の「なぜ?」を、も一つ真剣に突きつめるだけの勇気を欠いているなら……そして、新しい文化人というレッテルをはぎ取られることを恐れて、それをパヴロフ流の反射活動の複雑なものだというような、教師自身よく理解できるはずのない説明で、ごまかそうとする

なら、次の世代の日本も今日と全く同様に、全人類が知らねばならぬ、たった一つの真理を見失ったままの、昏迷の日本になるだろうと、私は、それを恐れるのです。

有名な昆虫学者ファーブルは敬虔なキリスト教徒でした。ある時、生意気盛りの学生たちが教授を捕えて

「先生のような大科学者が、なぜ、神の存在などを信じていられるのですか？」

と失礼な質問を発しました。が、ファーブルは柔和な微笑をもって答えました。

「私は、神の存在を信じてはいないよ。」

学生が、驚いて

「でも先生は毎日曜日、教会に通って神を礼拝していらっしゃるではありませんか。」

と言ったとき、ファーブルは静かに学生をさとして、こう答えたということです。

「信ずるとは、目に見えないものをあると思うことだ。私にとって、神はただ信仰の対象であるだけじゃない。小さな、目にもとまらぬ小さな昆虫を通じて、私は、この目で神を見、この手で神に触れているからだ。」と。

私は、今、ふと、パスカルの有名な言葉を思い出します。

「生半かな学問は人間を神から引き離す。しかし、真の学問は人間を神に結びつける。」

と言った、あの有名な言葉を……。

唯物思想がはびこり、科学万能の人知の傲りが支配している現代において、神の存在を認め告白することは、あるいは勇気のいることであるかもしれません。けれど、神を見失った人類が、わずかここ一世紀ほどの間に、陥ち込んで行った底なし沼のような混乱と不安とは、もうそろそろおしまいにしたいものです。

いつか、私は、全人類の知らねばならぬ、たった一つのことを、もしも、あなたが謙虚な気持ちで学びたいと望まれるなら、あなたのお庭の片隅でコロコロとすだく秋の虫が、あなたにそれを教えるでしょうと申しました。秋も深まって、やがて死に絶えて行く前に、おのが種族を残そうと異性を招く、秋の庭のロマンチックなラヴ・ソング……それは同時に、この世に生命を与えられた小さな秋の虫たちが、口を揃えて奏で上げる、神の栄光の讃美の歌でもあるのです。天地万物と共に、大自然の中に美しく謙虚に溶け込んで、全人類こぞって神の栄光をたたえる平和な日の訪れるのは、ああ、そも、いつのことでしょうか？　その喜びの日の訪れの一日も早からんことを祈りながら、今夜はこれでお別れします。

では皆様、さようなら。

第二十話　神秘の奥に潜むもの

いつでしたか、私は皆様に、もしもあなたが、私たちの知らねばならぬ、たった一つのことを謙虚な気持ちで学びたいと望まれるなら、秋の夜空に冷たくまたたく星々が、あなたにそれを教えるでしょうと申しました。

夜空の星々、音なく静かにまたたき続ける夜の大空の中に、昔の人々はたくさんの夢と神秘を織り込みました。なんとたくさんの人たちの魂が、夜の空を仰いでは、大空に向かって話しかけ、また、ひとり、深く物思いにふけったことでしたか。けれども、近代科学は、この夜の空から、一枚、また一枚と神秘のベールをはぎ取りました。人類はこの大宇宙を征服し始めたのです。

私たちの母なる大地を、太陽をめぐる九つの遊星の一つとして冷静に理解してから、科学する人類の目は、遠くはるかな天空にはてしなく伸びて行き、神秘をこめた星々の正態を一つずつあばき、夜空を飾る神秘のかわりに、一つ一つの星の大きさ、その構造、その運動などを明確に算

出しました。それは、神秘のかげなどなに一つとどめ得ない冷たく明確な物質科学の世界でありました。天の川を周辺とする平べったい、長円形の銀河系宇宙、つまり、私たちの地球が属するこの恒星宇宙は、およそ四百億の太陽からできており、直径は約十万光年、すなわち、一秒間に三十万キロメートルを突走る光が、十万年かかって到達するだけの距離を直径とする一つの比較的小さな宇宙であることは、今や自明の事実となりました。更に、この銀河系宇宙の壁を突き破った人間の理知はこのような宇宙が、はてしのない空間の中に無数に存在していることも確かめました。たとえばアンドロメダの大星雲もその一つでありますが、それは私たちの銀河宇宙に最も近く、およそ六十八万光年の距離に、細長く輝いて見えます。現在、人類の持つ最大の目とも言われる、ウィルソン天文台の百吋望遠鏡で見える限りでは、これらの銀河宇宙は、五億光年のかなたにまで、まんべんなく均一に散在しており、その数もおよそ一億に上ると言われます。

あまりにも私たちの想像を絶するこの恐ろしいほどの大宇宙から、今、逆に、私たちの姿を眺めるなら、一億に上る恒星宇宙の中の、直径十万光年の比較的小さな私たちの銀河宇宙、その宇宙の中の四百億の恒星の一つであって、目にもとまらぬような一点に過ぎぬ太陽、その太陽の周囲をめぐる九つの遊星の一つである地球の上にうごめく虚無にも似た二十数億の人類の中の一員、それが、私の姿なのですが、全く虚無にも似たこの人類は、まず月を眺め、太陽を捕え、地

球と兄弟分である太陽の遊星群の存在を明らかにし、更に、この銀河宇宙のなぞの壁を突き破って、はてしない大宇宙の中に、その科学の目を向けたのでした。真に、人間理知の輝かしい勝利に、私たちは圧倒される思いがします。

けれども皆様、こうして、はてしない大宇宙の探究に立ち出でた人間の理知ではありましたが、その人間理知の前に立ちはだかった一つのもののあることをご存じでしょうか？

人間理知は、大宇宙の神秘のベールを一枚一枚はぎ取りながら、その実、一歩一歩、最後の最大の神秘に近づいて行ったのです。人間理知の天空への探究は、実は、その最後の神秘を見い出さんがための行脚の旅であったと言ってもよいでしょう。では、いったい、その最後の神秘とは何なのでしょうか？

今、ご一緒に、少しばかり、天文学のいうところを聞いてみましょう。

近代天文学の教えるところによりますと、この大宇宙は、始めから今と同じ姿を持っていたものではなくて、徐々に変化して来たもの、また、いまも変化し続けているものだということは明らかです。その変化というのは、スペクトルの「赤方変位」という現象によって知られるように、すべての銀河宇宙は、お互いに、離れ離れになり、二度と再び相集まる可能性の全くない超スピードで、はてしのない空間の中に飛び散りつつあるということです。言い換えれば、約四百億の

太陽でできており直径十万光年という私たちの銀河宇宙をはじめとする約一億のこれら巨大な恒星宇宙の一つ一つは、ちょうど、恐ろしい速さで四方八方に飛散しつつある、炸烈した爆弾の破片のごときものだと言えましょう。

この最初の炸烈がいつごろ起こったかということは、さまざまな科学的研究によって、およそ、今から二十億ないしは三十億年以前のことと考えられます。ですから、今でこそ五億光年という恐ろしい距離にまで広がっていますが、今から二十億あるいは三十億年以前の大宇宙は、ガモフという学者の説によりますと、その半径がわずかに太陽の直径の八倍位の大きさの球状の、超密度、超温度の中に、ひしめき合っていたということになります。

ひしめき合っていた……と申しましたが、そういう状態は、ちょうど、爆弾に点火されたときの状態と同じで、実は一瞬の状態に過ぎません。そのような状態になった瞬間、それは、大爆発を起こして、現在、私たちが知っているような膨脹する大宇宙となり、ほとんど光の速度にも匹敵するような恐ろしい速さで、四方八方に飛び広がり始めたと見ねばならないのです。

ところで、この巨大な爆弾に点火したものは一体何ものだったのでしょうか？

爆弾自体が、自分自身に点火することができないと同様に、ある物質を、それが炸烈せずにはおれぬような超密度、超温度の中に圧縮するためには、必ず、第三者の力が必要となるのです。

圧縮という言葉自体が、それを意味しています。

さて、人間の理知は、大宇宙の神秘に挑んで、その探究を続け、ついに、現在一億を数える銀河宇宙が五億光年のかなたにまで広がっているこの大宇宙も、今から二十、ないし三十億年以前には、その半径が太陽直径の約八倍位の球状の中に、想像を絶する恐ろしい密度と温度をもって圧縮された一瞬があったことを知ったとき、実は、その時に、人間理知は、その役目を果たしたのです。今、人間理知に残されたことは、謙虚に認めることです。「然り」と肯定することだけです。ただ一つのものの存在を。

ただ一つのもの、そうです。いかにはてしないと言っても、しょせん限りあるこの大宇宙に、場所と熱と運動のエネルギーを与え、飛び散りながら徐々に冷え行く破片の中に、生物のための美しい団欒（だんらん）の場所を備え給うた無限なるものの存在であります。

有限な物質であるこの大宇宙には、始まりがあった！　と賢明な科学者は、正しい推論の後に、こう結論しています。始まりがあったということは、その一瞬間前には存在していなかったということです。そしてだれも、なにものも、自分自身を創造することはできません。

この大宇宙に始めあらしめたもの、そして大宇宙と共に、その中に住まい、すべてのものに存在を与えたもの、私たちは、それを天地万物の創造主、すなわち、神と呼ぶのです。

皆様、いつか、静かに、夜の空を仰いでください。きらきらとまたたく無数の星々、ほとんど、それらのすべては、私たちの太陽と同じほどの、いや、太陽のなん百倍、なん千倍、なん百万倍も大きい太陽たちなのです。そして、そのあるものは、地球から、なん千光年、なん万光年の距離にあるのです。そして、ついに、そういう銀河宇宙が望遠鏡で見える限りでも、五億光年のかなたにまで広がっているということを考えてください。この大宇宙のはてしのない広がりが、少しでもあなたに理解されるなら、あなたは、思わず、身のすくむような恐怖感に襲われるでしょう。けれど、けれども、たとえ、それがどんなにはてしなかろうと、ついに、それは、有限なる世界であり、時間と空間とに限られてある世界なのであって、この広大無辺な大宇宙の背後に、音もなく、静かに天地万物一切をみとり給う無限にして永遠なるものなしには、大宇宙も永遠に虚無であったということに思い至るとき、あなたは思わず、その無限なるものの前に、ひざまずき合掌したくおなりになりませんか？

ひざまずいてください。そして、そっと手を合わせてみてください。もしもあなたが、この世に生まれ落ちてから今日の日まで、そういう姿を取ったことがおありにならなかったとするなら、あなたはきっと、不思議な気持ちをお感じになるでしょう。

不思議な気持ち……そうです。それは、なにかしっとりとした、母のひざに抱かれた遠いふる

さとを思わせるような安らかな気持ちです。それは、あなたを少しも卑屈にしないどころか、むしろ、ひざまずき手を合わせることに、あなた自身の尊厳を見い出したような気持ちです。

けれど、そういう気持ちに不思議がられることは少しもありません。なぜなら、それこそ、人間の正しい姿、ありのままの姿なのであり、そして、それが人間の最も高貴な姿なのだからです。太陽は確かに大きく輝かしく、大宇宙は更にはてしなくすばらしい。その宇宙から見るならば、人間は真に小さなみじめな微々たる存在、いわば風にそよぐ葦に過ぎません。けれども、人間は大宇宙よりも、はるかに尊く、はるかに偉大なのです。なぜなら、パスカルが申しましたように、この葦は「考える」からですし、フランスの詩人ラマルチヌが歌いましたように、人間だけが考えて、見い出して、そして、神のみ前にひざまずいて、手を合わせることを知っているからです。天地万物の有限なる神秘のなぞを突き破って、人間だけが無限なるものに結びつくことができるからです。

皆様、以上三回にわたり、神の存在について語り続けて参りました。人間が、偏見と先入観とを投げ捨て、謙虚な赤裸な、そして驚くことを知る幼児のような気持ちになるなら、神を見い出すことは、そんなにむつかしいことではないと思います。

さて、巨万の富を山と積み、位は人臣の限りを尽くし、肉欲の快楽のあらん限りを楽しみ尽くしてみても、いつもいつも心の底に感ずる冷たくうつろな空虚、私たちは、それが、人間全体が満たされていないからだと考えました。しあわせというものが、人間全体の満ち足りた充足感から来るものとすれば、ただ肉体という一部の面をいかに満たしてみても、それよりも、もっと大切な人間の魂の充足を忘れるなら、人間はしあわせであるわけはありません。大切なことは人間の魂に充足の生命を与えることでありましょう。

皆様、私たち人間は、さきほども申しましたように、ほんとうに小さな微々たる存在、六尺に満たぬこのからだです。けれども、人間の持つ魂は、有限なるいかなるものをもってしても満たすことができないほど、大きいのです。人間の魂を満たすことのできるものは、ただ一つ、無限なる存在だけなのです。六尺に満たぬこの人間が、ついに、無限なるものを以ってでなければ満たされぬほどに大きく作られているという、人間の宿命を、じーっと謙虚に見つめようではありませんか？

では、また来週まで、皆様、さようなら。

第二十一話　テ・デウム！

それは、昭和二十一年五月のことでした。インドネシアの原住民カトリック信徒の司牧という任務の委嘱を受けて、昭和十九年の末から約一年半を過ごしたセレベス島におさらばを告げて、私は、二千人にも余る他の日本人と共に、リバティ型の輸送船に身を託して一路故国へ向かいました。私を迎えた日本、終戦後まだ一年を経ていない日本の姿はきびしいものでした。至る所に焼跡が残り、道行く人の面にも疲労とみじめさがにじみ出ている敗戦国日本でした。まだ爆撃の洗礼の始まらなかった日本を去った私には、一年半振りに見る祖国の姿は、私の想像をはるかに上まわったものでした。

ところで、私は上陸後、直ちに、大阪のカトリック司教館に帰国の挨拶をすませますと、取るものも取りあえず、私が日本を出るまで、主任司祭として働いていました大阪市の川口の教会の焼跡を訪れてみました。

その焼跡の、むざんな廃墟の真中に、私はしばらくは物も言えず、ただぼうぜんと立ちつくしました。憲兵や特高の白眼の中に、それでもなんとかかとか、信者の信仰を守り抜こうとして悪戦苦闘したなつかしい思い出の場所も、今はただ、そのあたり一面、目もあてられぬ焼野原と化していたのです。だが、私の胸の奥底から、つき上げるように、慟哭の嗚咽がもれ出ようとした、そのとたんです。私の脳裏に、突然、一つのありさまが、なぜか不思議に、はっきりと、色もあざやかに浮かび上がって来ました。その時は、確かに強烈な印象を受けたに違いないのですが、なぜか今まで忘れるともなく、私の記憶の底に薄らいでいた一つの光景が、突如として、他のすべての記憶を押しのけて、表面に突進して来たといった感じで、私は、驚いてその思い出された記憶に、はっきりと目を向けました。

それは、終戦直後のセレベスでのできごとです。南方はるかな孤島にあって、祖国の敗戦の報に接した私の心は、人間として苦悩しました。私自身が生きては帰れぬかも知れぬという不安より、私の心を占めた思いは、やはり、祖国日本のになわねばならぬ暗い不吉な将来の宿命に対する不安でありました。意識したつもりはありませんが、私はやはり暗く沈んでいたのでしょうね。原住民の信者たちが、次々に私を訪れては拙いながらに心のこもった慰めの言葉をかけてくれるのでしたが、そういうある日のこと、ひとりの青年が勢いよく飛び込んで来るなり、私に申しました。

「オランダ人神父様からのことずてです。『あした三時から学校の大ホールで戦勝感謝式がありますから、小林神父様にもぜひ出席してください。』ということです。ね、神父様、あしたは一緒に行きましょうね。」

私は驚いて青年の顔を見ました。

「なんということだ。まるで楽しいお芝居にでも出かけるように嬉々として、敗戦国民の私を戦勝感謝祭に誘いに来るのか。この男、少し頭が足りないんじゃないかな。」

私が頭の中でこんなことを考えている間も、その青年は、私が「ウン」と言うまでは、なん回でも性懲りもなく、しつこく、同じことを繰り返しているのです。私は少しめんどうくさくなって、

「うん、行くよ。」

と答えました。

翌日、私は重い腰を上げました。そして、その青年と一緒に出かけました。さしもの大講堂も立錐の余地がありませんでした。

「神父様、一番前に神父様の席が取ってありますから、前の方へ行きましょう。」

と、うるさくすすめる青年の手を振り切って、私はそっと一番最後列の椅子の一つに、小さく席

を取りました。やがて、オランダ人司教の司式のもとに、聖体降福式というカトリックの宗教儀式が始まりました。私はひざまずいて、ただ無感動に目を閉じていました。式の半ばに会場がざわめき、参会者全部が起立しました。そして、カトリックの感謝式には必ず歌われる感謝の歌、テ・デウム（神よ、我ら御身をたたえん）というラテン語の聖歌が、司教の先唱に続いて、轟然と、実に耳も聾せんばかりに轟然と全会衆によって、いっせいに高らかに歌われ始めました。

私はそっと目をあけて、周囲を見まわしました。ほとんどすべてが私の知っている顔です。私を、ひとりの神父として、いわば彼らの霊的父として心からの愛情と尊敬とを示してくれた愛する信徒たちです。その信徒たちが、今、我を忘れての恍惚の中に、

「テ・デウム、ラウダムス・テ・ドミヌム・コンフィテムル（神よ、我ら御身をたたえ、御身を我らの主とぞ仰ぎまつる）」

と、声を限りに歌いに歌っているのです。そこには、日本もなければ、オランダもなかった。あるものは、ただ人類の間に戦いと憎しみとが終わりを告げたことに対する、神への心からなる感謝と法悦だけなのでした。

そうだ。敗戦国の日本人といえども、この大きな喜びを神に感謝して悪いはずがあるだろうか……私は、今にして、私をむりやりここに引張って来たインドネシアの青年の深い心情に触れた

ような気がしました。私は自分の愚かさを悔いて頭をたれました。が、次に私が我に返ったとき、私は、自分もまた、声を限りに神への感謝を歌っている私自身を発見したのです。私は、両の目から溢れる滂沱たる涙を拭おうともせず、隣りの青年を振り返りました。青年は私の顔を見て、にっこりほおえみましたが、ふと、私の涙に気がつくと、みるみる青年のまぶたにも涙があふれ出てくるのを私は見たのです。そして、ふたりは肩を並べ声を合わせて、長い感謝の歌を歌い続けたのでした。

……私は、ふと、我に返りました。今、私が立っているのは、常夏の国インドネシアではなく、日本の大阪の焼野原の真中でした。だが、私の耳には、まだまざまざと、あのテ・デウムが余韻を引いて鳴り響いていました。私は静かに、しかし、はっきりとした確信をもって、つぶやきました。

「そうだ。これでいいのだ！」と。

皆様、その時から早くも、十二年の年月がたちました。そして、今、敗戦の傷痕もいえ、国民の生活水準も戦前を上まわるまでに復興した今日、私は、かつての十二年前の五月、大阪川口の焼跡に立った時のことをしみじみと、なつかしく思い出すのです。と言っても誤解しないでいただきたいのですが、それはすでに、過ぎ去った苦しみや悲しみを、過去のこととしてなつかしく思い出すという意味ではありません。むしろその反対に、私は、あの時のことを、なつかしく、できたら、もう一度、あの時に帰りたいと思うのです。あの当時、生活はお互いに苦しいことでしたね。そして、戦前は想像もできなかったような忌まわしい犯罪が行なわれ始めて、私たちの眉をひそめさせましたね。けれども、私は信じていたのです。これは敗戦という古今未曽有の試煉を受けた日本のいわば虚脱状態なのだ。だが、この虚脱状態から脱け出したときにこそ、聡明な日本国民は、きっとこの敗戦という試煉が与える大きな教訓を見い出してくれるに違いない。明治の開化以来、ただ、欧米先進国の表面のみを見ならい、ただ物質文明の面だけを追いすぎ、あまりに物質主義の日本ではあったけれども、その物質主義日本のつぶれ去ったこの廃墟の中から、今度こそ日本は、神をおそれる道義日本としての新しい誕生を、第二の建国の姿を見せてくれるに違いないと、私は信じたのです。そう信じた時、私はうれしかった。そして、私は、大阪の焼野原でひとりそっとテ・デウムを、……あの「感謝の歌」を口ずさみ、神に感謝を捧げたのでした。

皆様、その時から十二年という歳月が流れ去りました。そして、日本は……？　世界に燦として輝くはずの道義国家日本の新しい建国の姿は……？　ああ、それは私の甘いロマンティックな一場の夢にすぎなかったのでしょうか？

けれど皆様、それは決して日本だけの責任ではないのですね。人類が神を見失ってから数世紀を経ました。科学の進歩に眩惑されて傲慢になった人類は、神なしでやって行けると信じました。そして、宗教のかわりに新しい時代の脚光を浴びた旗印（はたじるし）として近代的ヒューマニズムを、その中に、博愛主義と自由と平等という文字を大きく染め抜いて掲げました。

まだ神への信仰の余燼がくすぶっていた間は、なんとか持ちこたえたようです。第一次欧州大戦における毒ガスの悲惨が、将来の戦争においては毒ガスを使用しないという協定を結ばせるまでに、人類はまだ幾分人間の良識を持ち合わせていました。しかし、それから三十年を経ぬうちに、人類の精神的な貧しさは、急ピッチに深まりました。あの、恐ろしい原子爆弾が広島の空に炸烈した時こそ、人間の良識が完全に破産を宣告された人類史上実に記念すべき瞬間だったのです。それから更に十年、今や、宗教に与えられない人間の良識……神への信仰によって一つに結ばれない人間の相互信頼も、どうやらどん底に辿り着いたようだ……とお思いにはなりませんか？

人間は、ここ数世紀にわたって、充分に人間の自力を試みてみました。そして、無限なるもの、永遠なるものへの結びつきを自ら絶ち切ったとき、人間というものが精神的に、道義的に、どれほど貧しくなれるものかを身をもって体験しました。もう、よいかげんに人類の放蕩生活にやせがまんを張るのをやめて、父の家に帰るべき時が来たのではないでしょうか？

私は、いつか、この放送で、人類が知らねばならぬたった一つのことを知ろうとしない限り、人類の知恵は、もうこれ以上進歩してはいけないのだ、と申したことをご記憶でしょうか？　神への信仰によって裏付けされない科学の進歩は、いつも、人類の破滅という無気味な毒を内に宿しています。狂人に刃物を持たせたような、一触即発の危険から人類を救いたいと思うなら、人類は、も一度、神を見い出さねばならないのです。

皆様、「神」という言葉はただ一語……しかし、その中に全宇宙の秩序と美と、そして、全人類の心と愛と、そして、あなたと私のひとりひとりのしあわせを含むこの一語、無限の厚みと深さと奥行を持つこの一語を、心して静かに、謙虚に口ずさみましょう。「おお、神よ！」と。そして、も一度人間の尊厳を取りもどそうではありませんか？

ではきょうは、これでお別れします。また来週のこの時間に。

さようなら。

第二十二話　現代の奇蹟

一昨年の五月、私はヨーロッパ旅行の途路、南フランスのルルドという町を訪問しました。ルルドといっても、日本人にとってはカトリック信者を除いては、別になんの記憶も意味もないでしょうが、ヨーロッパや米大陸では、フランスのルルドという小さな町の名を知らぬ人はありません。南フランスはピレネー山脈のふもと近く、四方を山に囲まれた風光明媚な田園都市……といってもいわゆる観光地ではないのです。観光地ではないのですが、世界の各国からこの町を訪れる人は一日数千人、多い時には万をもって数えられます。大部分はカトリック信者でありますが、そういうおびただしい人々が毎日毎日、どこからかきてどこかに去って行く巡礼の町、おそらく世界五億のカトリック信者のすべてが一生に一度は、自分の足で踏んでみたいと願うあこがれの聖地、それがルルドなのです。

いったい、なにごとがあってこの南フランスの一寒村ルルドが、そんなに有名になったのでしょうか？

それには、こういう話があるのです。それはちょうど今から百年前のことでした。その当時のこのあたりは、名もない貧しい村々にすぎませんでした。このルルドという村の中をガーヴ河という一本の川が流れ、その流れのほとりに、人々がマッサビエールと呼んでいたほら穴がありました。ちょっとした小高い丘の斜面が川のほとりで急に断崖となり、そこに幅五、六間、奥行三間位のほら穴を形造っていました。ちょうど百年前の二月十一日のこと、当時十四才になるベルナデッタという少女が、いとこたちや友人たちと薪拾いに行こうとして、なにげなくこのほら穴の前まで来たとき、突然、このほら穴の右上の小さな窪みに、キリストの母、聖母マリアの姿が忽然として現われるのを見たというのです。この超自然的現象は前後十八回にわたって繰り返されましたが、そのなん回目かに、ベルナデッタは出現の聖母マリアの指示に従って、足下の地面を手で掘りましたところが、そこからコンコンと水が湧き出て、それが泉となり、その泉の水に浸ることによって、瀕死の病人が突然奇蹟的になおるというようなできごとが起こり、それ以来、このルルドは現代の奇蹟として、全世界の注目を浴びることになったのです。現に、私が参りました時も、オランダやドイツ、ベルギー、スペイン、イタリーなどから、瀕死の重病人や身動きできぬ不具者などを満載した特別列車がすでになん本もルルドの駅に到着していました。また、このほら穴の前には寝椅子に横たわったまま、ずらりと並んで熱心にロザリオをつまぐっている

おびただしい数の病人たちの姿を目撃したのでした。

カトリックの教義の中では、マリアというひとりの女性は、もちろん私たちと同様、神の一被造物にすぎませんが、神の子キリストにこの世の生命を与えた生みの母として、また、神の恩寵に満たされ、世にも祝福された、めずらかな女性として、更にはまた、罪の汚れを知らぬ清浄そのもの、最高の自己完成の姿を成就した理想の人間像として、心からの尊敬を捧げられています。この聖母マリアの、神のみ前における祈りのとりなしによって、不具の身から、不治の病からいやし給えと奇蹟的な全快を求めて、世界各国から群がりつどう病人の群。それと共に一生に一度は聖母出現の聖地をおのが足で踏みしめ、その出現の場所をこの目で仰ぎたいとねがう数千、数万に上る人々が、毎日毎日引きも切らずに押し寄せて来る巡礼の聖地……それは、実際にこの目で見ないことには想像もできない情景ですが、それがルルドなのです。ことに、今年はその聖母出現の年から数えてちょうど百年目に当たるというので、今年に入ってからすでに五百万人以上の人々が、ルルドを訪問したと伝えられています。

皆様は、きっと私の話を聞いて、カトリックという宗教を、旧態依然とした、迷信臭い、いわゆるご利益宗教の一つのようにお考えになったかもしれませんね。私も、このお話をしながら、聖母マリアの出現だとか、奇蹟的全快だとかいうことが、カトリックの信仰と全く縁のない皆様

に、そのまますなおに信じていただけるとは思っておりません。また一面から見るなら、日本の合理主義にとっては、確かに迷信臭く見え、また、戦後の日本に発生した新興のご利益宗教を髣髴とさせるものがあるかもしれません。が、それにもかかわらず、私はあえて、それが迷信でもなければご利益宗教でもないことを言おうと思って、このお話を始めたのでした。もうしばらく私の話を聞いてください。

このルルドでは毎日、雨さえ降らなければ毎日です、午後の四時からカトリックで聖体行列という宗教行事が、数千、時には数万の人々の参列のもとに行なわれます。その行列の間に、聖体を奉持した司教がずらりと寝椅子に横たわったまま並べられた病人のひとりひとりの前に足をとめ、ひとりひとりの上に、奉持した聖体で十字を切り、神の祝福を祈るのです。ときとして、ほんとうにときとしてのことですが、奇蹟的全快が見られるのは、その瞬間なのだと言われています。私も、実は心の中では、あわよくば珍しい奇蹟を目撃したいものと、心に念じましたが、その日には奇蹟はありませんでした。しかし、考えてみると、奇蹟などは、どうでもよかったのです。私は、病気が突然に全快するという、そのような目に見える奇蹟こそ目撃しませんでしたが、目に見えない、いわば精神的な奇蹟とも言われるものを無数に目撃したのです。というのは、その日の聖体行列も終わり、私は、暮れなじむピレネー山麓の夕風を受けて、しばらく、ほ

ら穴の前にたたずんでいました。その時、ルルドの駅を発車するらしく、一声、かん高く汽笛の音が、静けさを破って響いた、と思ううちに、一本の列車が、ガーヴ河を隔てたかなたに姿を現わしましたが、ちょうど、ほら穴の前面を過ぎると思うころ、突然、列車の中からいっせいに、「マグニフィカト」という讃美歌の調べが、朗々として流れ始めました。見ると、それは重病人たちを満載した特別列車でした。奇蹟を求めて、不自由な身に苦痛を耐えて、はるばると、このルルドにまで運ばれて来た病人たちなのでしょうが、三、四日の滞在の後、彼らは、またしても困難な旅路を続けて、病む身をそのままにふるさとに持ち帰るのです。それにしても、その身動きできぬ病人たちが今、列車がルルドのほら穴の前をよぎり去るよと聞かされて、いっせいに歌い出した讃美の歌声と感謝の叫びです。皆様、皆様には、その意味がおわかりでしょうか？　だが、皆様がおわかりになろうとなるまいと、毎日毎日、この南フランスのルルドには、おびただしい病人たちが希望に胸ふくらませて群がり寄り、そして数日の滞在の後、来た時の希望はかなえられなかったにもかかわらず、全く別種の、感謝と感動と希望とに満たされて去り行くのです。「マグニフィカト！」それは、「わが魂は神をあがめまつり、わが心は救い主なる神によりて喜びにたえず、見よ、今より万代に至るまで、人みな我を幸いなる者となえん。云々」という、ラテン語の讃美歌なのです。いやされなかった病人たちを満載した一本の列車は、列車全体が讃

美の歌のこだまと化して意味深い余韻を、聞く人の心の奥底に響かせながら、南フランスの夕靄の中に消えて行きました。

病をいやされたいと望んだからこそ、はるばる山河を越えて苦しい旅路を続けた彼らでした。来るときには、病むことが苦痛であり、不具の身に生きることの重荷が、のしかかっていました。しかし、今は病がいえるかわりに心がいやされたのです。病む身はそのままに、生きることの悲しみと苦しみが取り除かれ、心満たされて、ほのぼのと讃美と感謝の歌を歌いつつ家路に着く彼らにとって、ふるさとの姿は同じであってしかも同じではなく、生きる姿は変わらぬながらに、全く一変した生命が始まるのです。それは病がいやされるよりも、もっと大きな恵みであり、もっと驚嘆すべき奇蹟、いわば、次元を異にした精神的奇蹟ではなかったでしょうか？

皆様、彼らは悟ったのです。このルルドの聖地に滞在し、謙虚に祈りつつ、神と触れあうことによって、生きることの意義を知ったのです。人間存在の目的を理解したのです。そして同時に、病むことの中に、深い神の摂理を見たのです。

生きることの意義と、その目的……それは哲学ではありません。それは人間自身がその知恵をしぼって考え出したものでもありません。もしも、神が存在し、そして、私が神の被造物なのだとすると、私の存在の目的は、私を創造し給うた神の意中にあること。そして、その神の意志を

知る道はただ一つ、すなわち、神の啓示を、つまり神ご自身の言葉を信仰という器をもって受け取ること以外にはありません。全人類が知らねばならぬ人間存在の目的という、永遠の真理を、神より受けて人類に伝え、この真理を通じて神と人とを結ぶもの、それこそが、宗教というものなのですから……。

キリスト教という宗教は、キリストを通じて神より受けた不変の真理として、人間存在の真の目的を教えます。それは、神の愛によってこの世に生まれでた私たちが、不滅なる霊魂をもって再び神の愛なる永遠の生命という限りない幸福の懐に帰り行くべく召されているとの祝福された人間存在の驚くべき啓示であります。

皆様、私たちがこの世に生まれて来たのは、この世において富み栄え、肉欲の快楽をむさぼるためではなくて、神を愛し、神を愛するがゆえに、人間同志が互いに愛しあうことによって、愛の中におのれを完成しながら、ついに、再び神の愛の懐なる永遠の生命に帰り行くため、実にそのために生まれて来たのだという、この上なく高貴な人間の宿命を信じて受け取るとき、皆様、生きるということは、なんと、満ち足りたことではないでしょうか？　働けど働けど、今現に貧しくあるという生活の苦しみにあえぎつつも、また、再びいゆる希望とてない病む身を病床に横

たえたままであろうとも、この世の生命が、永遠の生命に直結していると信じて、おのずから感謝の叫びと、神をたたえる讃美の歌が口をついてもれ出るとき、皆様、私たちの生命はなんと生きるに値いするとお思いにはなりませんか？

ところで、私たちの幸福探求の行脚の旅もどうやら終わりに近くなって来たようです。が、もうしばらく、もうしばらくご一緒に考えあって行きましょう。

ではまた、来週のこの時間に。

皆様、さようなら。

第二十三話　自由の掟

皆様、きょうは、こういうことを考えてみましょう。一つ、皆様の頭の中で、昼も太陽の光を通さぬ、鬱蒼たる大森林を想像してください。その黒闇々の大森林のまんなかに、あなたがただひとり、没然と置かれたと考えてください。どこからか、こういう声が響いてきます。

「あなたの待ち望んでいた自由の世界だ。あなたは今、完全に自由なのだよ。右へ行こうが左へ行こうが前へ進もうが後へさがろうが、寝ていようと立っていようと、あなたの望み次第。さあ、あなたの完全な自由を思う存分享楽するがよい。」と。

「ただし、――と声は続けます――ただし、右へ行けば底なし沼に足を取られ、そのままずるずるとのみ込まれるかもしれない。左へ行けば大蛇の巣窟があるかもしれぬ。前へ進めば猛獣のえじきに、後へさがれば毒ぐもの巣にかかるかもしれない。が、それにしても、今、あなたを束縛するものはなにもないのだ。法律も警察も、あなたを束縛することはできないのだ。さあ、思いきり、この自由の空気を吸うがよい。」

と。

さて皆様、仮にあなたが、そういう立場に置かれたとすれば、あなたは、「ああ、私は自由だ！」と、あなたを束縛するもののない気楽さを、ほんとうに気楽なことと思われますか？　多分、いや確かに、そうではないでしょうね。鼻をつままれてもわからぬ漆黒の闇に、あなたは自由であって、しかも自由でないことを痛感されるでしょうね。束縛のない世界を自由の世界と呼ぶなら、この暗黒の森林は、あなたにとって自由の天地であるはずです。その意味では自由でありながら、しかもなにかが欠けているのを感ぜざるを得ないでしょうね。

戦後、「自由」という思想が、日本に飛び込んで来ました。戦争中、なにごとにつけてもあまり自由でなかった私たち日本人は、急に、「さあ、お前たちは自由なんだよ。」と言われてもちょっと、戸惑った感じでしたが、それでもだれよりも先に、この自由に飛びついたのは、やはり、激しい生活意欲に燃えた若い世代でした。「おれたちは自由なのだ！」その自由は、すべての道徳を過去のものとして踏みにじろうとしました。人間は自由に考え、自由に語り、自由に行動する権利を持っている、と若い世代は与えられた自由を享楽することにちゅうちょしませんでした。けれどしばらくして、その自由がなにか不自由なことに気がついたのです。皆が自由を主張し、自由にふるまうということが、いつか生活の秩序を乱し、人間らしい生き方をどこかに置

き忘れたような生活なのだということに気がつきました。そして、改めて「自由」と「放埒」とを区別するようになりました。あらゆる束縛を脱して、したいことを存分にするということは「放埒」であって「自由」ではないのだ。人間の文化的産物としての「自由」という思想は、そういうものであるはずがない、と理解したのです。では自由とはいったいなんなのでしょうか？

も一度、さきほどの大森林のたとえにもどりましょう。あやめも分かたぬ暗黒の中の束縛のない世界にいながら、あなたの心は、その時、何を求めるでしょうか？　底なし沼にも引きずり込まれず、猛獣のえじきにもならないで、この暗黒から逃れ出るにはいったいどちらの方角に進んだらいいのだろうか？だれか、だれか私を安全な道に手引きしてくれるものはいないだろうか？あなたの心は道案内者を呼び求めますね。そして、もしも、その時、どこからか一本のたいまつが現われて、「さあ、この光について来るがよい。そうすれば、あなたはこの暗黒から脱け出ることができる。」という声が聞こえるなら、あなたは、その時こそ、ああ、助かったと歓喜の叫びをあげ、こおどりしつつ、そのたいまつの導きに従って行かれることでしょうね。その時、あなたは「だれだ！　私について来いなどと言うのは？　私は自由でありたいのだ。君の言葉などには従わないぞ。」とは、おっしゃらないでしょうね。つまり、そのたいまつは、あなたを束縛するものではなくて、むしろ、あなたを解放してくれる救いの手だとお感じになるからでしょう。

猛獣のえじきにもならず、大蛇や毒ぐもの巣窟にも出会わないで、あなたの行くべき所、すなわち光明の世界に行き着くために、一本の安全な道が示された時にこそ、あなたは、ああ、私は助かった、とお感じになるでしょうね。

真の意味における自由とは、何をしていいかわからずにいながら、しかも何でもできるという無意味な状態ではなくて、必ず、自分の行こうとしている目的への道に連なるものだということがおわかりでしょう。目的があれば、その目的にあなたをまちがいなく安全に導いてくれるものを、あなたは束縛とはお考えにならないのです。たとえば、仙台から作並を経て山形に行こうとして車を走らせるとしましょうか。ところどころの別れ道や十字路に、山形への方向を示した里程表がありましょうが、あなたはそれをありがたいと思って眺めこそすれ、決して束縛とはお感じにはならないはず、また、鉄道の踏み切りが下りているなら、あなたは、それを突切るようなばかな冒険をなさらないでしょう。つまり、山形へ行くには、そのための正しい道があり、また途中注意して守らねばならぬ掟（おきて）があるのです。その指示と掟とは、あなたを完全に目的地に運ぶためにあるので、決して、あなたの自由を束縛しているものではありません。

ところで皆様、私は先日、全人類の知らねばならぬ人間存在の目的を知る道は、結局、人間を創造し給うた創造主、すなわち神ご自身の、それについての啓示を信じて受け取ること以外には

ないと申しました。そして、キリスト教という宗教は、キリストによって完成された神の啓示による人間の目的を全人類に伝えると主張しているものだと申しました。キリスト教は、全人類の知らねばならぬ唯一の真理として、人間は、神の愛によってこの世に創られ、再び神の愛なる永遠の生命、限りのない幸福と光栄の生命に帰り行くという、人間自身の思いも及ばぬ崇高な宿命に定められたものであると主張します。

しかし、だれでもが、どんな生命を生きようと、たとえば、ただ富や快楽の追求に明け暮れする空虚な生命に生きようと、だれでもがたやすく、その目的である永遠の生命にあずかり得るのではないので、限りなき正義、限りなき聖さである神の生命にあずかるためには、そのために、神によって定められた正しい道を歩みつつ、この世の生命を聖く正しく、内面的に充足したものとせねばならないのです。人間を、その終局の目的である永遠の生命に導く道を、神は人間各自の心の中の良心の声と、また、大自然を貫く自然法の中に刻み込み給いましたが、更に、神みずからの啓示によって神の掟を人類に与え給いました。

それこそ、さきほど申しましたように、この世の暗黒に引きずり込まれず、さまざまな誘惑のえじきにもならずに、人間だれでもが辿り着かねばならぬ終局の目的に、誤りなく安全に私たちを導くための、いわば暗黒を照らすたいまつの炎なのであって、束縛ではなく、むしろ、解放の

救いの御手なのであります。そして、この掟に従うとき、私たちは光に向かって進むのですし、その掟に逆らう時、私たちは光に背を向けて暗黒の中にさまようことになるのです。

ここまでお話しますと、光に向かって進む道が、それが私たちのなさねばならぬ「善」なのであり、光に背くこと、すなわち、その道にはずれることが、私たちのしてはならぬ「悪」と呼ばれるものなのだ……などという必要もないでしょうね。人間のなさねばならぬ「善」と、してはならない「悪」と、この「善」と「悪」との、けじめのないところに「道徳」というものもあり得ないなどと、付け加える必要もないでしょう。

「道徳」……それは神のみ前に真剣に生きようとする人間の、あらねばならぬこの世の生命の姿です。その姿を、道徳、すなわち「道の徳」とは奇しくも名づけたものかなと思います。

生まれ落ちて、やがて物心ついた瞬間から、この世の生命を終わる間際まで、神の掟に従って、神が「なせ！」と命じ給う業を行ない、「なすな！」と禁じ給う悪を避けつつ、ひたむきに、神の生命に向かって歩み続け、登り続ける人の道、それなくして、どうして美しい人の世が築かれ得ましょうか。

先日ちょっとお話しましたように、戦争中、私はインドネシアの原住民の宗教上の奉仕のため南方のセレベスに参りました。着いてしばらくのほどは気がつきませんでしたが、そのうちに、

私は、表面にはもちろん出しませんが、その実、原住民の心の奥底では日本人に対する憎しみと軽べつとが、しっかりと根を張っているのに気がつきました。ある日、私に対する気安さから、思わずふと口をすべらせたあるインドネシアの婦人に、私は面と向かって聞いてみました。

「いったい、どうして君たちは、そんなに日本人がきらいなのか？」と。

そして、その婦人の答えはこうでした。

「私たちは日本人がこわいのです。なぜなら日本人という民族はあまりにも神をおそれることを知らない民族だからです。」と。

武力をもって進駐した南方の島々で、警察も治安法もない、いわゆる自由の天地で、被征服者に君臨した日本の兵隊たちが、もしも、神をおそれることを知らないなら……ああ、それから先は言う必要もないでしょう。

「日本人はあまりにも神をおそれることを知らなすぎる！」

私はこの言葉を、私を通じて日本国民に与えられた警告として受け取りました。

だが、そういうと、皆様はきっと「では原子爆弾を広島や長崎に落としたことは神をおそれる人間のすることか？」と反問なさるでしょうね。そうです。原子爆弾や水素爆弾を落とすことは

もちろん、それを作ることすらが、あまりと言えばあまりにも神をおそれぬ仕業というのほかはありません。

世界中が神を見失ったのです。だが、だからこそ、その結果として世界がどうなって行ったかを、私たちは知っていますね。私はここで、いつか申し上げた言葉を再び繰り返します。

「全人類がも一度、神を見い出し神をおそれることを知るようになるまで、人間の科学はこれ以上進歩してはいけないのだ！」と。神をおそれる心、すなわち、高い確固たる道義心の裏付けなく、人間の科学がひとり、先走りすることは恐ろしい危険をはらむことなのですから。

皆様、神を見い出しましょう。神の啓示による人間の終局の目的を信じて受け取りましょう。そして、その目的に向かって、私たちの正しい道を歩みましょう。そして、そして、より美しい世界を築き上げようではありませんか？　私の切ない呼び声に答えてくださる同志たちのひとりでも多からんことを祈りつつ、今宵はこれでお別れします。

皆様、ではまた来週、さようなら。

第二十四話　自由人の誇り

先日は「自由」という問題について半分しかお話しませんでしたので、きょうは残りの半分についてお話することにいたしましょう。先日も申しましたように、自由とは、なにをしていいのかわからなくしかもなんでもできるという無意味な状態ではなくて、自分が今、なにをしなければならぬかを正しくわきまえた上で、しかもそれをするためになにものからも束縛を受けないでいるという状態なのです。

そして、人間が、人間としてなにをせねばならぬかということは、結局、人間存在の目的に直接に結びついていることなのですから、従って人間が行き着かねばならぬ目的に向かうその「道」にかなっていることが「善」なのであり、それに背を向けること、すなわち、その「道」にはずれることが「悪」なのだというところに「道徳」の根本があるのですから、従って、また「真の自由」とは人間のなさねばならぬ善を行なうため、言いかえれば、人間がかくあらねばならない理想の姿を実現するために、なにものからも拘束されてはいないという状態を意味することにな

ります。

社会に生きる以上、人間は肉体的には常にある束縛を持っています。ちょうど、動物が檻に入れられ、あるいは鎖につながれているように、人間もまた、毎日の生活のためには一定の会社の一定の席に縛りつけられているのです。あるいは、もっと大きな、もっと快適な家に住みたいと思っても、なかなか思いのままにはならないもので、粗末な裏長屋で辛抱せねばならぬかもしれません。また、病気になれば、望むと望まないとにかかわらず病院のベットを離れることができないでしょう。肉体的自由、言葉をかえると、人間の動物としての自由には限りがあります。世の中のこと万事が、そうそうは思いのままにならないものなのですからね。

が、それにもかかわらず、人間はもっと高い次元において、すなわち精神の高みにおいては完全に自由であり得るのです。いや、自由でなければならないのです。肉体的な自由に対して、これは「心の自由」と呼ばれます。

いったい、自由とか平等とかの思想は、もともとキリスト教思想として生まれて来た高度の精神文化なのでありますが、人類が神を見失ってから、いつの間にか、自由とか、平等とかなどの言葉だけは残りましたが、中味はすっかり入れ変わってしまったのです。それではキリスト教思想の流れをくむ精神文化としての「心の自由」とは、どういうことなのでしょうか？

すでにお話しましたように、神の啓示による人間存在の目的と、その目的に行き着くための「道」としての掟……これさえわきまえれば、人間はだれでも、たやすく、その目的に到達できるかというと、決してそうではありません。そこには、その道の途上にはさまざまな妨害物が、あたかも人間を一歩でも神から遠ざけようとするかのように、所狭しと横たわっています。自由とは、苦しみつつ、戦いつつ、一つ、また一つと、その途上に横たわる妨害物を押しのけることによってのみ、はじめて、かち得られる貴重な宝なのであります。

その妨害物にはさまざまなものがありましょうが、中でも私たちの心の自由を束縛する最も根本的な妨害物は、私たち自身の持つ動物性というものです。いつかも、人間とは複雑怪奇なもの、いわば、神の生命の分け前ともいうべき霊魂と、あくまで動物本能に生きようとする肉体と、この全く正反対な二つのものででき上がっていると申したことがありましたが、この人間の動物としての一面こそ、私たちの自由の最大の敵であると考えられるのです。

偉大な聖者、聖パウロでさえ「人間の精神に従えば、私は神の掟に従うことを喜ぶが、私のからだに、も一つの力があって、それが理性に対して戦い、からだにある罪の力のもとに私を縛りつける。ああ、私はなんと不幸な人間であることか！」と叫んでいます。

人間はだれでも、ただひとりの例外なく、物心づくと間もなく情欲というものを感じます。情欲とは理性と官能との争いを意味します。聖パウロが同じロマ書の中で「私は自分で望む善をせず、むしろ望まない悪をしている。」と言っているのはそのことです。してはいけないと言われるとなおさらしたくなる。見てはいけない、触れてはいけないとわかると、よけいに見たくなり、触れたくなるもの、そういう情欲が人間にはあるのです。ですから、理性がはっきりと真理に目覚め、人間のあらねばならぬ高い姿をしっかりと凝視すればするほど下等な官能との戦いは、より深刻になるでしょうね。だが、なんとかしてその官能の力に打ち勝たない限り、人間は真の意味での自由を味わうことはできないのです。

卑近な例をとってみましょう。給料日に、なんとなく気が大きくなって、友人と一緒にお酒を飲みにいったとしましょう。しかしある一定の時が来ると、理性は「もう今夜はこれ以上、飲んではいけない。」と、限度の来たことを教えます。ところで、あなただったらそんな時、どうなさいますか？

「うん、わかっているよ。だが、もう少し……もう少しだけ。」と、そのふん い気に未練が募って、どうしても手から杯を放すことができなくて——たいへん失礼な言い方になりますが——そのまま飲み続けて、よっぱらって、醜い姿をさらけ出されたと、まあ仮定しましょうか。その

時、あなたは官能に負けたのですね。つまり、あなたは「だれからも強制されたのではない、おれが自由に飲んだんだ。」とおっしゃるでしょうが、実は、あなたは——ほんとうのところは——よい加減でやめておきたかった、だが、あなたの官能が……あなたの動物性が、あなたの心を縛りつけ自由を奪って、あなたに酒を飲ませたのです。あなたは決して自由ではなかった。あなたは、あなたの官能のみじめな奴隷にすぎなかったのです。酔いがさめて、あなたは、そこはかとない後悔をお感じになることでしょう。そして、お酒のために多額の金を払った後の残り少ない月給袋の軽さに気づかれるなら、また、淋しくあなたの帰りを待ち佗びる奥様の顔を思い出さなければならないなら、良心のとがめはひとしおでしょうね。

さらに、も少し深刻な例をとらせていただけるなら、お互いに結婚の相手としては考えられない男女の交際で、それがいけないことだと、心の片隅で感じながら、ついに越えてはならない垣をふみ越えて、不倫な愛欲の味を知り、その後で互いに悩み、そして、ついには互いに惜しみながら、心に痛手を負うて去って行くという人間の心の悲劇……その愚かさは、自分たちが自由にふるまったのだと信じながら、その実、醜い肉欲の暴力に振りまわされたみじめな奴隷であったのだというおのが姿に気づかぬところにあるようです。

それにつけても、考えさせられることは「道徳」というものに対する現代人の無知ということです。自分でやってみたくてむずむずしながら、社会の制裁とか家庭のトラブルなどが恐ろしくてかろうじて耐えている背徳行為を、ある作家が勇敢に文学という衣を着せて書き立ててくれたので、せめて、それを読むことによって、そして、そこに共感を感ずることによって自ら慰めとしようということで、「美徳のよろめき」だとか「挽歌」などという、いわゆる、一連の姦通文学が、日本のベストセラーズになったという、その意味の深さを、私はしみじみと恐ろしいものに思うのです。人間存在の終局の目的に向かうところの道に連なるものとしての「善」と「悪」とのけじめのないところに、真の道徳というものはあり得ませんし、道徳の確立されぬところに、人間の真の自由の喜びも、また、あり得るはずがありません。

さきほどのお酒の話にもどりましょう。もしも、あなたが、限度の来たことを告げる理性の声に、もっと飲みたいという未練を絶ち切り、きっぱりと杯を置いて友と連れ立ってそこを立ち去られたのであったなら、あなたはりっぱにあなた自身の主人であり、もっとその安逸な情緒に浸っていたいという情欲の束縛の鎖をきっぱりと絶ち切って、あなたはりっぱな自由人であったのです。たまさかの俸給日に、その中のわずかのお金を投じて、なかの良い友人と美酒を汲み交わして友情を温め得た……それはそれでよいことでした。良心の呵責のない、ほのぼのとした喜びを互いに分けあって、その友と別れたあなたは、ほんの少しばかり軽くなった俸給袋を持って、

愛する妻の待つわが家に急がれるでしょう。少しきげんのよくなったあなたは、その俸給袋を奥様に手渡しながら、友人と一杯飲んで来たよ、と朗らかに告げられるでしょう。あなたの朗らかさが奥様にも伝染して少しばかり中味の減った俸給袋ですが、奥様は黙ってにこにことほおえみながら、それを受け取られるでしょう。

小さなことですが、あなたが正しくあるために一つの小さな妨害物の束縛を脱したという、その心の自由が、その自由人の誇りが、あなたの家庭を明るくしてくれるのですね。と申しましても、私は、月給日には、俸給袋に手もつけないで封をしたまま、そっくり奥様に手渡されるよい習慣をお持ちになるりっぱなだんな様方に悪い知恵をつけるつもりは毛頭ありませんから、その点誤解をなさらないよう、お願いします。

皆様、生きるこの世の生命は、ますます苦しく、ますますせちがらくなって行くようですね。けれど、もしも、私たちの日々の生活のための多忙な働きを繰り返しながら、それを守銭奴のような富への執着に心捉われてするのでなく、また、他人を押しのけて出世しようという野望をそそのかす情熱に束縛されてするのでもなく、ただ、この世の毎日毎日の小さな生命の営みで、一歩ずつ、私たちの永遠の目的に近づきつつあるのだという喜びと希望に胸ふくらませながら、その日その日の仕事を神に捧げて、自由人としての、喜びと誇りに生きる生命があるとするなら、私たちは、それをこそ「自由」と呼ぶことをちゅうちょしないでしょうね。

そうです。それが「心の自由」というものなのです。

肉体の自由を束縛されて、望むと望まないとにかかわらず、一定の生活形式の中に押し込められたような日々を生きながらも、せめて、人間精神の高みにおいて、私たちは存分に、心の自由の喜びを謳歌（おうか）したいものですね。

どうやら、あわただしい師走の夜が、ひえびえと、みちのくを包み始めたようです。おからだに気をつけてください。

では今宵はこれで、皆様、さようなら。

第二十五話　心の旅路を振り返つて

皆様、この夏から始めてちょうど半年皆様とご一緒に続けてきました幸福探求の思索の旅、『心の花束』のこの時間も、どうやら終着駅に近づいて来たようです。

「しあわせは、いずこにあるのか？」そろそろ、その結論を出さねばならね時が、やって来ましたが、それに先立って、きょうは、も一度、私たちの辿りました思索の旅の後を振り返り、最後の仕上げへの心の準備をしたいと思います。

ともすると、生活の惰性に押し流されて、あまりにも「考える」ということから遠ざかった毎日の生活でありますが、しかし、人間はパスカルが申しましたように「考える葦」、生きているこの生命の姿を、ひとり静かに考える時間と勇気とをもってください、と私は皆様にお願いしました。

自分をみつめること、その凝視から生まれ出て来るものは、人生の真の姿です。若く、美しく、富み栄え、成功の喜びに酔っている時、「ああ、私はしあわせだ！」と言うことはだれにでもできるやさしいことですね。けれど、人生はいつもいつまでも、私たちを甘やかしてはくれません。やがて、年老い、若さと共に美しさも消え失せ、浮雲のような人々の賞讃から忘れ去られて、ひとり、近づく死をみつめるときしみじみと心に迫る思いは「人生は孤独だ」ということです。その上に、働いても働いても楽にならぬ生活の貧しさの重荷、あるいは、自分の責任でもないのに、ふとしたことから、おそらくは戦争の犠牲者としてでしょうか、自分の身体の一部を失った不具の身、または、あれほど、自分のすべてを捧げて愛したのに、その純粋な愛情が無慙に裏切られた、いやしがたい心の痛み……そういう不幸が重なるとき、人生の孤独はさらにいっそう耐えがたいものになるでしょうね。けれども、「人生とは、そういうものなのだ。生きることは淋しいことなのだ。」と、あきらめてはいけません、と私は申しました。生きているこのいのち、二度とやり直しのきかぬこの生命です。私が存在しているというこの事実が、無意味なもの、淋しいものであるわけがない。たとえ生きている姿がどんなにみじめであろうとも、私が、私という全人格をもって、存在しているという厳然たるこの事実は、生きるに値するだけの価値をもってはいないでしょうか？　たとえ、貧しさに打ちひしがれて生きようとも、病床に横たわったままの生涯であろうとも「ああ、生まれて来てよかった！」という感謝をもって抱きしめたいほどに、この世の生命は生きるに値するいのちではないかと考えましたね。

だが、生きることの価値、それはあくまで、生きることの目的に連なっていることだと申しました。すべて、物事の値打ちというものは、そのものが作られた、その目的にどれだけかなっているかということによって定まるもの、従って、人間の生命の価値も、私の日々のいのちが、人間存在の目的にどれだけかなったいのちであったかによって定まるものと悟り、それでは人間はいったい、なんのために作られ、なんのために生まれて来たのかをご一緒に考えてみましたね。

それは、むつかしいことではありませんでした。だれでもが、否応なしに、そこに宿命的に引きずられているもの、すなわち、「しあわせでありたい」ということが、私たちの生まれながらに宿命づけられた悲願なのであり、そして、それが生きているこの生命の目的であることを悟りました。そして、では、そのしあわせとは？　と、しあわせの青い鳥を求めて、私たちの幸福探求の行脚の旅が始まったのでしたね。

人々が「しあわせ」と呼んでいるもの、富、お金の正態をご一緒に見つめました。人間としての、ゆとりと、誇りとをもって生きるに足るだけのお金、それは、しあわせへの手段として、なくてはならぬもの、しかし、それ以上のものをむさぼるとき、富は人間を不幸にするだけなのだとわかりました。

次に、人々が、あんなに夢中になって追いかける名声とか地位とかの、この世の栄光に目をと

めてみましたね。そして、それも、自分の内面にそれだけの価値があって、いつとはなしに集まる名声ならば、正しく清い生命への報酬として心おきなく受け取れるでしょうが、自分に価値もないのに、ただ術策や金の力で名声や地位や権力を追求することの愚かさを理解しました。

さらに、その次には、金も要らなきゃ名も要らぬという世界、愛欲の刹那的な悦楽のはかなさにも目を向けてみましたね。そして、この動物的本能が、精神的に高められず、理性の檻を脱出して暴れだすとき、人生は、ちょうど、猛獣を野に放ったような、淫乱と修羅のちまたとなるだけのものだと悟りました。

それらすべては、それを正しく用いるとき、しあわせへの手段として、すばらしいものではあるが、それ自身が人間の生涯をかけて追い求めるしあわせの青い鳥ではないのだと悟ったとき、私たちは思わず口ずさみましたね。

山の彼方の空遠く、幸住むと人の言う
我、友どちとめ行きて涙さしぐみ帰り来ぬ。
山の彼方になお遠く、幸住むと人の言う。と、

ではしあわせはいずこにあるのか？　私たちは幸福探求の道を続けて、今度は、人間自身の本能に目をとめました。そして、レオナルド・ダ・ヴィンチの名画にまつわるエピソードや、人間の芸術という崇高な労作や、または、ドライとウェットなどと呼ばれる生活のあり方などの中に私たちは人間存在の不可解な複雑さを学びましたね。動物のように欲情するかと思うと、人間独特の内面的な美しさに心引かれたり、火のような憎しみに燃えて、いがみあうかと思うと、すばらしい芸術作品を残したり、肉体的には富み栄えて絹に包まれ美食に飽いていながら、心の奥底では無気味な空虚感におそわれて、悩み、呻く、複雑怪奇なこの人間という存在です。私たちは、この複雑な正態のなぞを解こうとして、人間の本質をえぐってみました。そして、精神活動と呼ばれる、私たち自身の働きを分析して、私たちはそこに一般の動物とは本質的に異なるもの、ただに進歩のていどの差ではなく、越ゆることのできない溝によって、他の動物からは判然と区別されたところの、人間独自の精神性を見出しました。なぞは解けたのです。私というものが、ただ一つの存在でありながら、その実、やがて土に帰って行く物質としての肉体と、私の一番奥底で時間と空間とを超越し、無限なるものに向かって、あえぎ続ける霊魂という、全く相反する二つのものから成り立っているという事実が、すべての不可解と見えたなぞを解く鍵であったのです。

からだがどんなに富み栄え、栄耀栄華の限りをつくしてみても、それで満たされるのは人間の持つ動物的な一面だけなのであって、しあわせということが、私たちの全存在が満ち足りる充足の生命をいうのだとすると、しあわせであるために、まず満たされねばならぬものは、人間の最も心の奥底の生命、霊魂の生命でなければならなかったのです。

それでは、私たちの心の生命はなにによって満たされるのでしょうか？　そこで、私たちは人間の持つ二つの精神活動の一つ、知恵、すなわち「知る」という力を考えました。知恵は真理を追求します。ですが、真理とは？　科学し探求する人間の知恵の前には、それ活動の天地として、それこそ、限りない未知の世界が横たわっています。けれども、なによりも先に全人類が知らねばならぬもの、全人類の知恵が、知らずして求めていて、それをつかまぬ限り、知恵は、いつも渇き、いつも飢え、絶対に満たされることがないという、たった一つの真理を、私たちは野の草花に、秋の虫に、そして、はてしない天空の星々に教えられましたね。それこそ、『神！』という、言葉はただの一語ですが、限りない深さと限りない奥行とをもつ無限なる神秘でありました。天地（あめつち）の森羅万象の中で、ただひとり、人間のみが、有限の世界の神秘の壁を突き破って、無限なるものに連なることができるという、その人間の私たち自身の偉大さに、おののきながら、「ああ、そうだった。神が存在するのだ！」と悟ったとき、私たちは人間霊魂の存在が今更のよ

うに裏書きされるのを感じました。この生命、この生命の中で、動物性としての肉体は進化論という学説が教える通り、下等な生物からだんだんと進化してきたものであるかもしれない。が、その動物性とは全く本質的に異なった人間の霊魂は、神の生命の分け前、すなわち神ご自身の創造の御手になる造化の傑作なのでした。神とは、「大自然」とか「無限なる力」とか「宇宙の大法則」などと呼ばれるような、私たちとはなんの関係もない冷たい存在ではなくて、神は、私たちの創造主、私たちは被造物なのでした。

そして、そう理解したとき、間髪をいれず私たちの頭に浮かんできた次の問題は、創造主なる神は、なんの目的もなしに人間を創造し給うわけがない。人間には神によってもくろまれた終局の目的があるはずだということです。けれども、ここまで辿り着いたとき、実は、私たちの知恵は、その限界に到達したのです。たぜなら人間創造の目的という、神の意中の奥義を、人間自身が人間の力だけで引き出すことはできないからです。

皆様は、ダンテの神曲をお読みになったことがおありでしょうか。あの神曲の天国篇で、天国の栄光の頂を目ざして登り行くダンテを導くのは、高貴な詩人ビルジリウスでした。が、その坂道の途中でビルジリウスの姿は忽然と消え失せます。案内人を見失って途方に暮れるダンテの目

の前に、その時、静かに姿を現わしたのは美しきベアトリチェでした。艶然とほおえんで、ダンテに導きの手を差し伸べる永遠の恋人ベアトリチェ、皆様は、ダンテがこのベアトリチェをもって何を象徴しようとしたか、おわかりでしょうか？

さて、私たちの幸福探求の旅路も、いよいよ終幕近くになりました。残されたもう一歩を、もう一つの階段を、皆様、どうぞ私と一緒に歩んでくださいませ。

では、また皆様と共に過ごす来週のこの時間を心から楽しみながら、今宵はこれでお別れします。皆様、ごきげんよう、さようなら。

第二十六話　生きるに値するいのち

昔、キリストがユデアで福音を述べ伝えていましたときの、ある日のことです。キリストに反感をもっていたファリザイの輩や町の長老たちが騒々しく、ざわめきながら、キリストを取り囲みました。その時、うつむいて地面になにか字を書いていたキリストは、なにごとだろうと立ち上がりましたが、その立ち上がったキリストの足下にドサッと投げ出されたものがありました。見ると、それは、髪を振り乱し、恥かしさに面をおおって泣きくずれるひとりの女でありました。人々は、その女を指さしながら、口々にキリストに向かって申しました。「この女は姦通の現場をつかまったのだ。モイゼの法律によると、こういうみだらな女は、その場で石殺しの刑に処せよ、とあるが、ラビはこれをどうさばくのか？」と。

キリストは、静かに答えました。

「モイゼが、そう命じているなら従わねばならぬ。石を投げうつがよい。」

人々は、キリストのこの言葉にちょっと、戸惑ったようでしたが、次の瞬間には、ワッと歓声

をあげ、手に手に石を取ってこの女を打ち殺そうと身構えました。そのとたんです。キリストのりんとした声が、人々の耳を……いや、人々の心を打ちのめしました。

「待て！　他人の罪をさばくものは、自分自身が罪を犯していてはならぬ。未だかつて神のみ前に罪を犯した覚えのないものがあるなら、そのものがまず石を投げるがよい。」

人々は、アッと声をのみました。キリストの言葉は気負い立った人々の心の奥底で、まさに晴天の霹靂のように鳴り轟いたのです。キリストとひとりの女とを取りまく群衆は、手にした石をそっと地面におくと、ひとりまたひとりと、その場を立ち去って行ったということです。

これは聖書に現われたキリストの姿の一こまですが、神の掟にそむいて、おのが身を動物の欲情に供し、その汚れと恥に、よよと泣き伏すひとりの女も、その女を罪人とさばいて石をもって打ち殺そうとする群衆も、神のみ前にすべては罪人なのでした。だが、それはまた、そのままに、私たち自身の姿でもあるのではないでしょうか？　未だかつて、神のみ前に罪を犯した覚えのないものが、果たして世の中にひとりでもおりましょうか？

もちろん、こういうとき、罪という言葉の意味が正しく理解されねばなりません。そしてそれが、警察のごやっかいになるという意味でないことはいうまでもありません。人間の終局の目的である永遠の生命に行き着くために定められた人の道、すなわち、人間が、かくあらねばならぬ

と定められた神の掟が描き出すすばらしい理想的人間像を打ち砕く行いは、すべて、道ならぬ業となるのです。

他人から恩を受けながら、それに報いようともせぬ忘恩と裏切り、……自分の悪業を棚に上げて他人の小さな過失に憤る憤怒や傲慢、憎しみと恨み、……また他人の成功や幸福には心悲しみ、他人の不幸には心の中で思わず凱歌をあげるねたみ心、……正しい限度を越えての暴飲と暴食、……あるいは、性の衝動にかられて、動物的な欲情におのが身体を汚す邪淫など、心と言葉と行いとをもって、神の掟にそむく私たちの姿は、たとえ、それが世間一般の通例ではあったにしても、私たちのあるべき道義的人間像を破壊し、魂の生命をむしばむのです。むしばまれた魂には、カラリと晴れて澄み切った日本晴のような充実感は、およそ縁の遠いものですね。

なあに、だれだって、そうなんだ……と自分自身に言い聞かせながらも、ちょうど長い間、風呂に入らぬ垢じみた不快感に似たものが、澱のように魂の底にこびりついて……ああ、もしも、あの純潔だった少年時代から、も一度出直すことができるものなら……それができないとしても、せめて、身も心もきれいさっぱり洗い浄めることでもできるなら……とは、自分自身に反省することを知っている、真剣な生命を生きようと望むすべての人の心からの願いではないでしょうか？

だが、しかし、たとえ、過去の生命のしみがことごとく洗い浄められたと仮定しましても、もしも、私というものが、今と全く同様に意志の弱い、情欲にひかれやすい、みじめな存在にすぎないのだとすると、新たに出直した新しい生命のすがすがしい喜びもつかのまのこと、また、たちまち罪の汚れにそむくことになりましょう。

ですから、満ち足りた生命を生きるということは、私がおのが弱さによって陥った過去の汚れが、すべて洗い浄められると同時に、再び同じあやまちに陥らないために私の弱さが強められ、私の無知が照らされ、私のみじめさが高められることでなければならないのです。

ここで私たちは三度、神に目をあげます。第一には、人間創造の目的を問うための神の啓示を仰いだ私たち、そして次には、その目的に行き着くための安全な道として、神の掟を受け取った私たちは、今、ここに三度目、私の弱さが強められ、私のみじめさが高められるために、神の御力を乞い願うのです。

真の宗教とは、神の啓示による徹底した人生観を人類に伝え、そこへ導く道として、永遠不変の道徳のいしずえを人類に与え、そして、弱い人類がその道を登り行くために必要な力を惜しみなく与えるもの……そうです、そういうものをこそ、私たちは真の宗教と呼ぶのです。

「神は愛にて在す」とは、キリスト教の主張するところです。そして、キリストは、神の愛をは

てしなき許しの愛と説きました。おのが罪を憎み、なんとかしてその罪の償いをはたしたいとの熱意と、再び同じ罪を繰り返すまいとのまごころをもって、神のみ前におのが罪を悔いるなら、殺人も、姦通も、強盗も、神のみ前に許されない罪はないとキリストは説きました。私たちが過去の魂の汚れを憎む真剣な情熱をもって、神のみ前にぬかずくなら、神は、私たちの魂を、その限りない愛の中に、しっかりと抱き包み給い、ちょうど醜い鉄の一片が鎔鉱炉の炎の中で真赤に灼熱されて、火となるように、私たちの魂も、おのが過去の欠点や罪や過失もろとも、神の愛の中に浄化され、灼熱され、美しい光を放って燃え立つ一片の炎と化するという、キリスト教でいう神の恩寵の生命を信ずることができるなら……いや、これは事実なのです。信じなければならないことなのです。昔、長崎に二十六人のキリシタンが邪宗を信ずる者として、十字架に磔にされて処刑されたことがありましたが、その中に、数人のまだいたいけな少年がいたことをご存じでしょうか？　その中でも、クリスチャン・ネームをルドヴィコという十三才になる少年は、時の長崎奉行が、「もしおまえが、おまえの信ずる神を捨てると誓うなら、私はおまえを侍分に仕立ててやろうではないか。」とすすめる甘言と誘惑を退け、神を捨ててこの世になんの喜びがありましょうかと、りりしく言い放ち、毅然として処刑されて行ったのですが、そのわずか十三才の少年の驚嘆すべき勇気は、いったいどこから出たのでしょうか。また近くは、蟻の街のマリ

ア と称えられた北原怜子という可憐な一少女の、大学教授の娘という安逸を投げうって、バタ屋部落に入り込み、ついに、それら見捨てられた人々のしあわせのための人柱となったという、あのけなげな強さは、なにを物語っているでしょう。それこそ、神の恩寵に生きる魂の、高さと強さとの、生きた証明ではないでしょうか？

信仰のもたらす魂の強さは、……自分の生命を喜んで投げ出し得る魂のけなげさは、神が、自分の行いを、自分の生命を喜んで嘉し受け給うとの動かすことのできない信念から湧き出て来るのです。そして、また、神が愛し給うというこの信念は、自分の過去の汚れが洗い浄められ、清浄なこの魂の中に神の恩寵が満ちあふれているとの燃え立つような確信から、ほとばしり出て来るものなのです。

皆様、おこがましいかもしれませんが、私は、取るに足らぬ小さな、虚無にも似た小さな存在ではありますが、神が私を愛していられると心の底から確信しています。神は私を愛し給い、私の生命の一瞬一瞬を、愛のまなざしで見つめ給う……これは私がこの世に生きる限り、私のあらゆる行いの、いわば原動力なのであります。だが、そう申しましても、私はこの言葉を、高ぶった気持ち、おごった気持ちで言っているのでは決してありません。私が神の愛を信ずるのは、私が自分の罪深さを意識するからですし、その私の数え切れないほどの罪の上に与えられた神のみ

許しを確信するからです。

さて、私たちが神の愛を信ずるとき、当然なことですが、私たちもまた、神を愛しまつることを誓うのです。神を愛しまつるとは、神の意に従い、神の掟を守って、道義的な美しい人間像を自分の中に築き上げたいとの悲願であります。

神の掟を守って……と申しましたが、神の掟の中で最も大いなるもの、いや、むしろ、神の掟のすべてを一つにしぼり上げたものは、キリストの言葉を引用いたしますと、それは「おのが心の限り、力の限り神を愛しまつることと、神を愛しまつるがゆえにおのが隣人をおのれのごとくに愛すること」なのです。

皆様、私はこの『心の花束』の一番最初の話を「愛するということ」についての話から始めたことをご記憶でしょうか。そして、私はきょう、私の最後の話を、再び「愛すること」で結びたいと思います。

近代ヒューマニズムは、神への愛を忘れて、ただ人間同志愛し合うことを、すなわち博愛主義をその理想としてかかげました。けれども神の愛に基礎づけられない人間愛は根のない草のようなもの、それがしおれ、枯れ果てるために、そう長い年月は必要ではなかったのです。近代思想としての博愛主義は枯れ落ちました。そして残ったものは、メッキのはげた人間の野性、つかみあい、いがみあう疑心暗鬼の世界でした。

神を愛するということは、さきほども申しましたように、私自身の罪が許されたという感動から湧き出ることです。そして、真剣におのが罪深さを意識するとき、私たちは他人をさばくことはできなくなります。自分が許されるためには、自分もまた、許さねばならぬ、ということはきわめて当然なことなのですからね。私は一番最初のお話のとき、愛するとは許すこと、忍ぶこと、忘れることだと申しました。神の愛を信じ、神の愛に生きるとき私たちは、その時始めて、ほんとうの意味で、許しあい、忍びあい、愛しあうことができるのです。

私はまた、しあわせは、満ち足りた魂の生命だと申しました。魂の持つ、二つの精神的な能力、知恵は真理を、意志は善を追求します。つまり、知恵は知りたい、意志は愛したいという欲求です。そして、知恵が、神の存在と、それに伴う人間終局の目的を知り、意志が、限りなき善と美なる神を愛し、神を愛するがゆえに、人間同志互いに、高い愛情をもって、愛しあうとき、人間の魂は満ち足りるのです。その時、六尺に足らぬ小さな存在でありながら、この世のなにものをもってしても満たされ得なかった人間の魂が、ついに無限なるものによって満ちあふれるのです。

私は、カトリックの教えを信じたなら、病気がなおるとも申しませんし、貧しい人々がお金持ちになるとも申しません。けれども、深い理解をもって、キリストの教えを受け取り、神の愛の

中に憩うとき、貧しい人々は、人間らしい生活を営むための手段としての富を追求しながらも、今現に貧しくあるという、その貧しさの重荷を満ち足りた心でになう勇気を見い出すでしょう。富める人々は、人間らしい生活を営み得る以上の有り余った財産に対する誤った執着に打ち克ち、それを貧しい人々に分け与えることの喜びを悟るでしょう。そして、いつの日にか、憎しみや戦いによるのではなく、愛と自由に基づいた平等な世界が実現するでしょう。

病める人々は、その病苦によって浄化され高められて、人間の終局の目的に一歩一歩近づきつつある自分の姿に満ち足りて、病苦に耐える力を持つでしょう。

恋人同志は、神の力に支えられて欲情に負けず、神の愛に基づく美しい未来の家庭の設計を語りあうことでしょうし、夫と妻とは、永遠を目指す人生の旅路のよき伴侶であろうと誓うことでしょう。

こうして、私たち全人類が、唯一の神を父と仰ぐ神の子ら、血を分けた兄弟姉妹なのだと悟って、互いに、いたわりあい、助けあい、愛しあって、この世の生命を生きるとき、ああ、私は声を大にして絶叫したいのです。

『この世の生命は、喜びであり、感謝であり、魂もはち切れるばかりの満ち足りた生命なのだ！』と。

皆様、私たちの生命はなんと生きるに値する生命ではないでしょうか。

皆様、ちょうど半年にわたり、ラジオを通じてお近づきになれました皆様とも、お別れする日が参りました。この半年の間、私の拙い話に耳を傾けてくださいました皆様に、心から、厚くお礼を申し上げます。仙台市の荘司様、宮城県大河原の松本様、押野様を始め、遠く福島、岩手、青森の各地からも、心のこもったおびただしい激励のお便りをいただきました。ぜひぜひ、いつまでも続けるようにとの暖かなお言葉もありましたが、いろいろな都合で、一応『心の花束』第一集として、打ち切らせていただき、半年のお休みをいただいて、さらに私自身、思索を深め、修養をつんで、次の七月から再び『心の花束』第二集として、皆様とご一緒に過ごす時間を持つことにさせていただきたいと存じます。

なお、カトリック教会の教理について、もっと詳細に知ってみたいとお望みの方、またさらに進んで、カトリックによる信仰生活を生きてみたいとお望みの方は、ご遠慮なく、もよりのカトリック教会に、おいでになって直接、教会の神父たちとお話し合いになってください。では、もう一度、聴取者の皆様に心からお礼を申し上げてお別れいたします。

皆様、どうぞ、いつまでも心にしあわせの灯をともし、お元気でお暮らしくださいませ。

では、さようなら。

⑥⓪ 天国を奪う人々
鈴木習之著 P 230 ¥ 280 〒 70

⑥① 折り折りに
井手雄太郎著 P 145 ¥ 200 〒 60

⑥② ありのまま
坊城佐和子著 P 200 ¥ 230 〒 60

⑥③ シスターひとりアメリカを行く
今泉ヒナ子著 P 248 ¥ 300 〒 70

⑥④ 高原の四季
幅北光著 P 191 ¥ 280 〒 60

⑥⑤ 旧約聖書を読む
池田敏雄著 P 380 ¥ 500 〒 70

⑥⑥ 歌うトラップ一家
M・A・トラップ著 P 249 ¥ 300 〒 70
小田部胤明

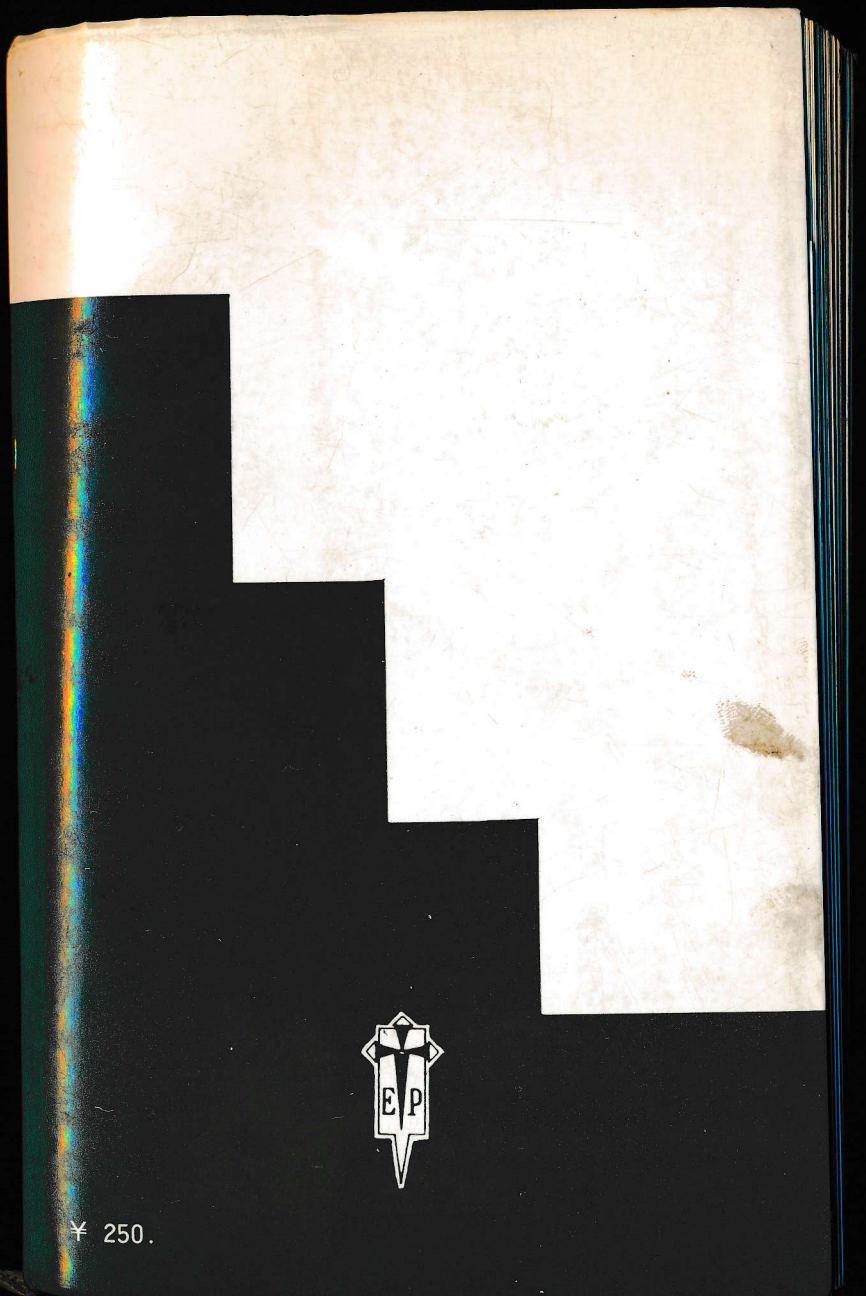
生きるに値いするいのち

昭和35年9月30日　初版発行
昭和42年12月8日　21版発行　定価 250 円
教会認可済

著者 小林有方

発行者 東京都港区赤坂8丁目12—42 聖パウロ女子修道会
代表者 イダ・コンティ
印刷所 中央出版社印刷部
発行所 東京都港区赤坂8丁目12—42
電話 赤坂 408—2513
振替 東京 101228番
聖パウロ女子修道会

落丁・乱丁はおとりかえします


EP
￥ 250.